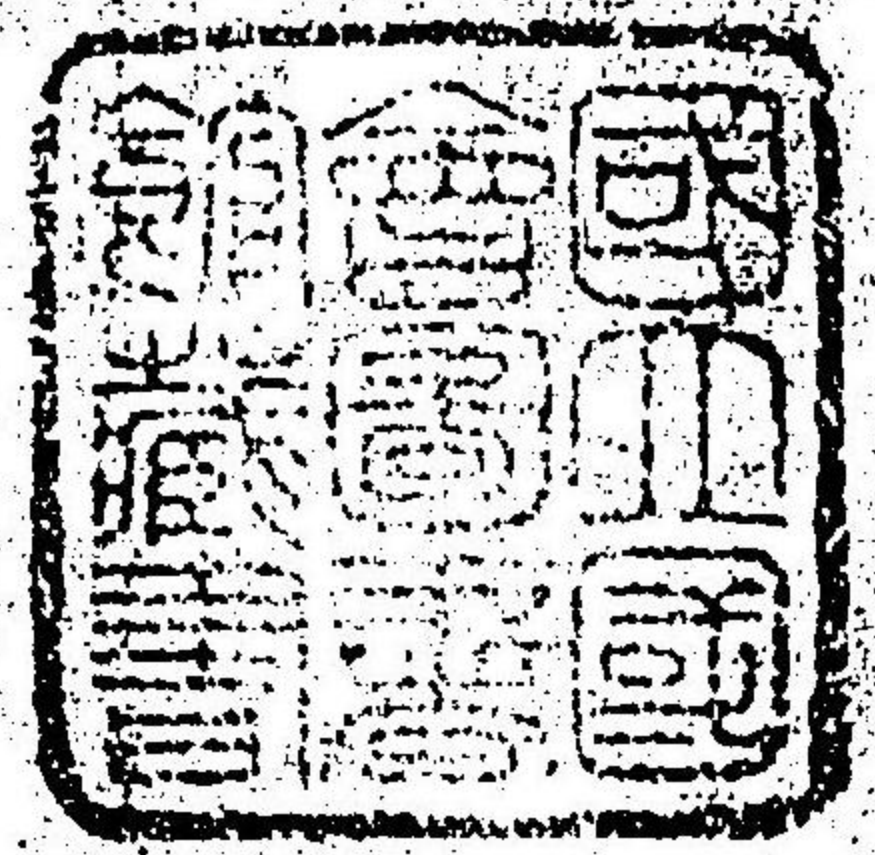
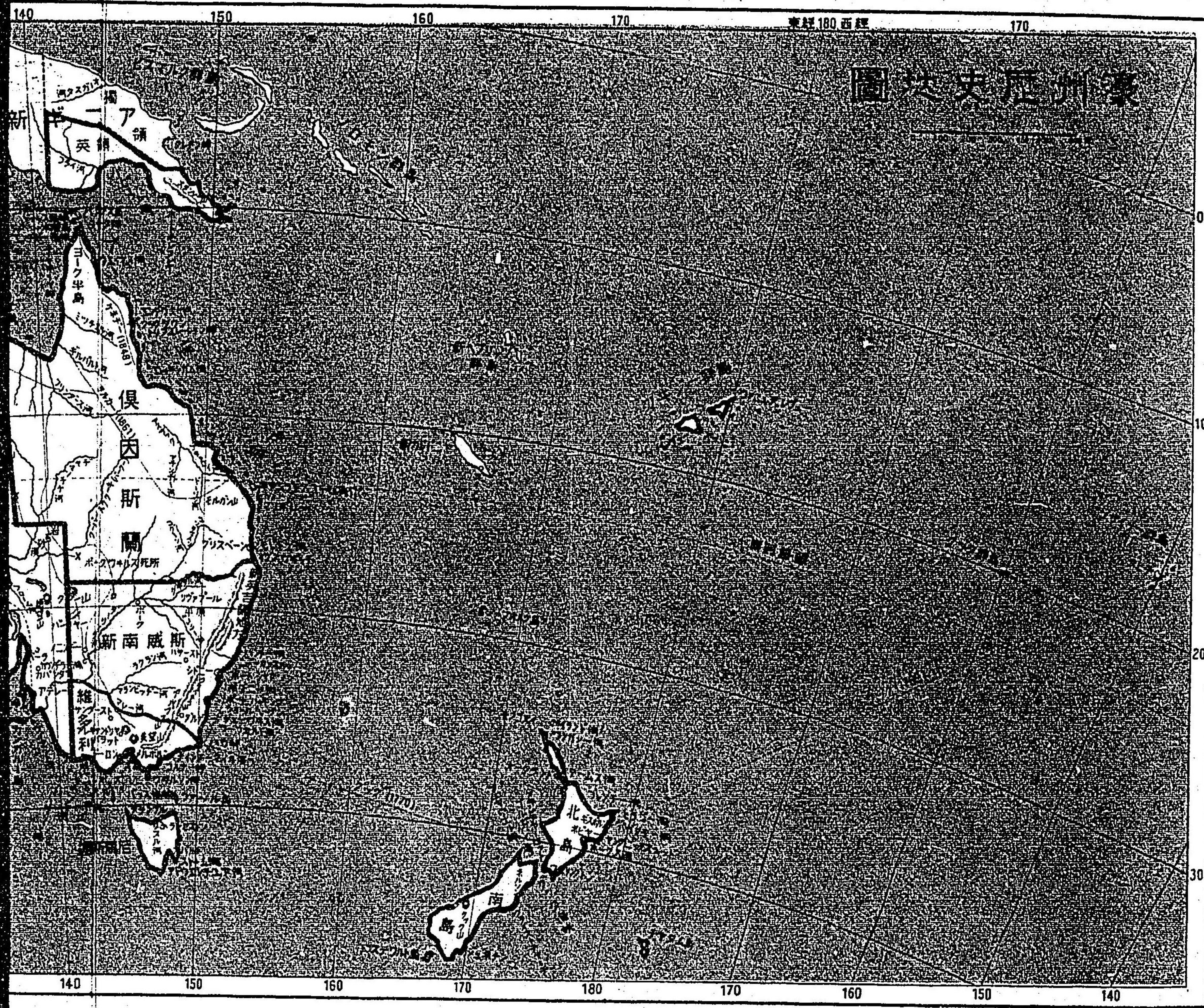


# 濠洲史

東京高等商業學校校長松崎藏之助先生序  
岡山縣立商業學校講師アール、ジェー、イングロト先生序  
岡山縣立商業學校教頭松崎万之丞先生著

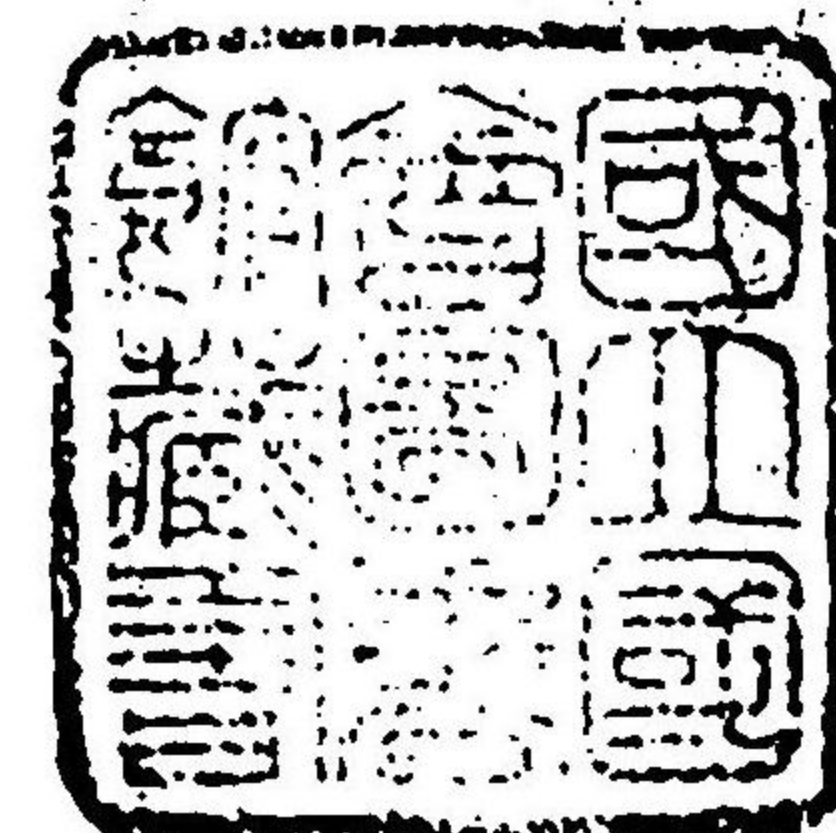
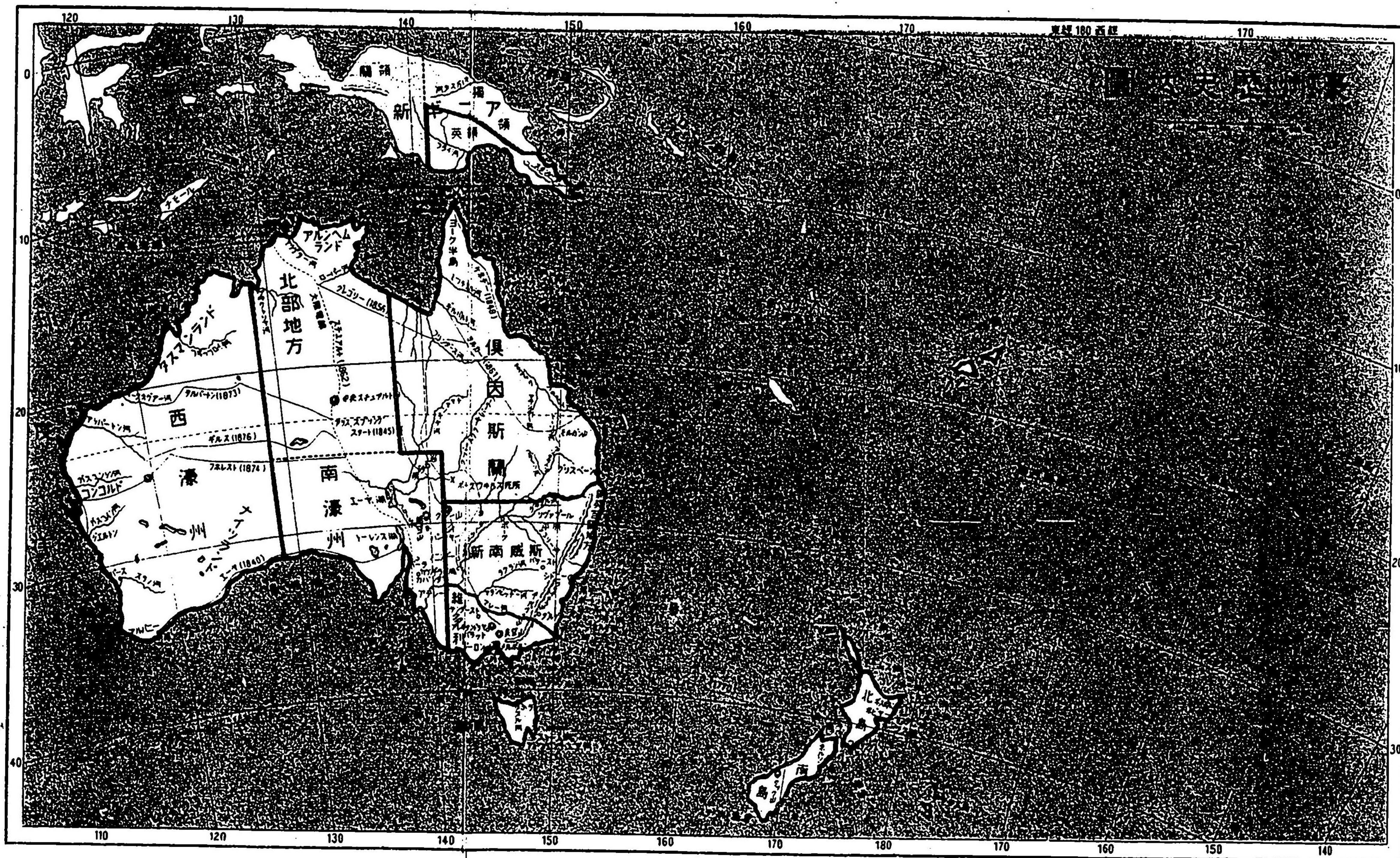
東京 晴光館發行

239

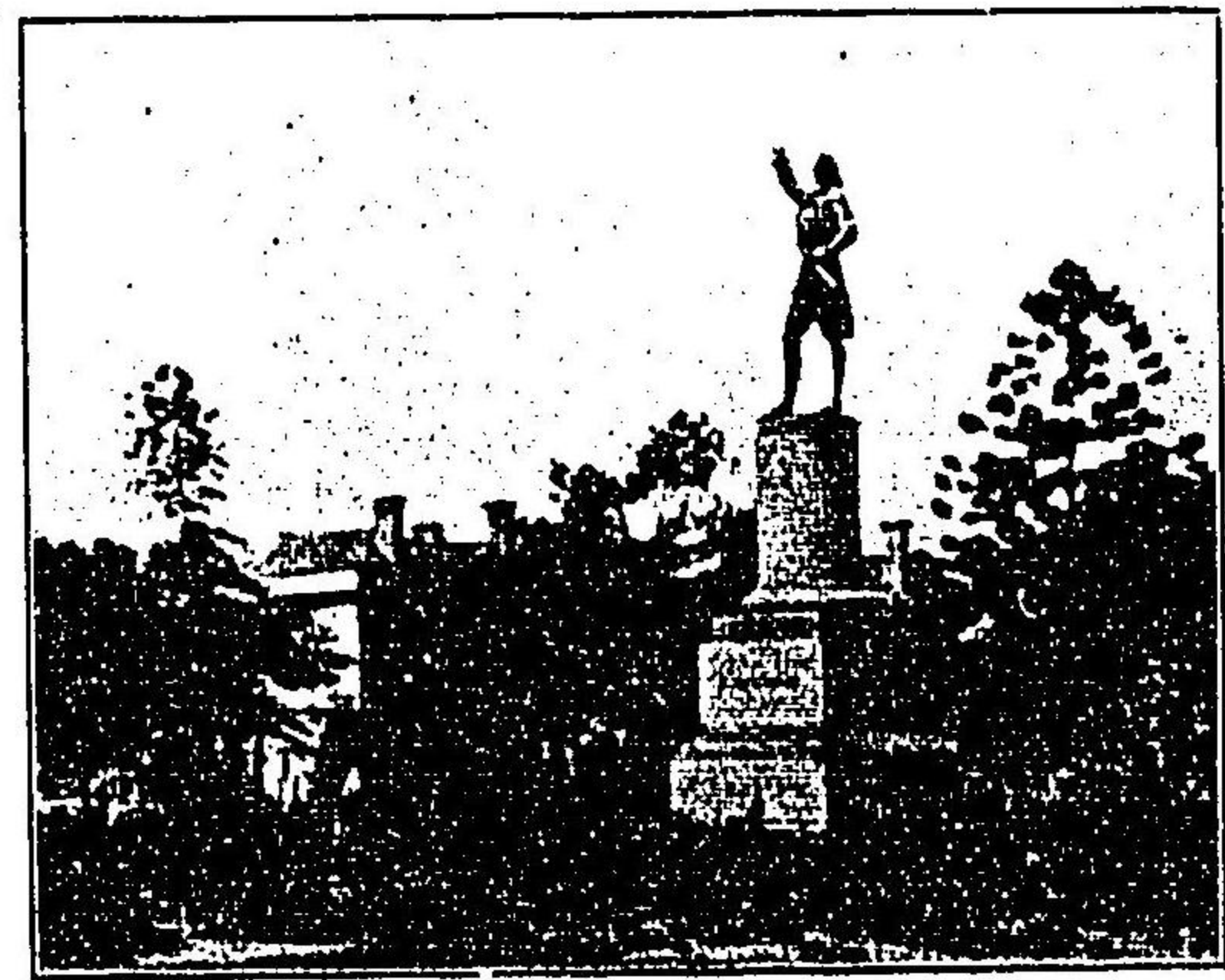


225502 411

271.M433g



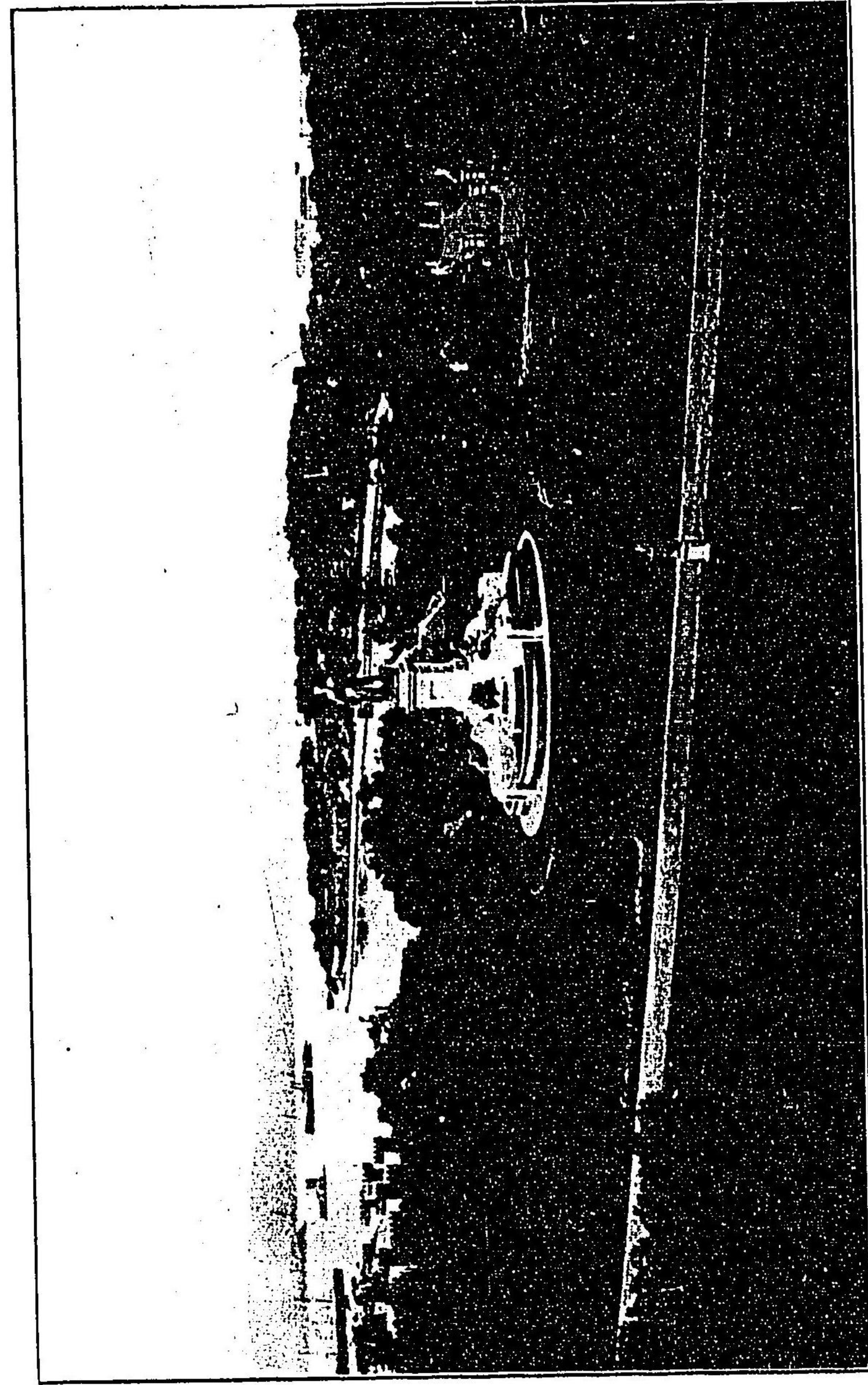
225502



像銅之ククンテプヤキ



像銅ノ「トルアエチス、ルアエシクマ、ソヨツ」家探探



像銅ノ「ブツリキア」守太ハルアニ央中 ム望チ「ソソククヤヤジ、トーホ」リ「園物植府尾徳悉





## 濠洲史序

今や各國民及政府は競ふて世界平和の保持と其之に伴ふ慶福の獲得に焦心す此時に當り吾人の須らく勗むべきは先づ各國民の間に横はる精神的障害を除くにあらん哉一旦精神的障害にして除去せらるゝ時は物質的障害は自ら除去せられんのみ而して精神的障害中其理由なくしてしかも結果の恐るべきものは國民若しくは其個人の間<sub>に</sub>於ける感情の衝突に若くはなし感情の衝突は相互の誤解に基き相互の誤解は相互の無智無識に基く故に國交上最も貴ぶ所は其相知



るの點に存す由來我邦人中南洋に往來する者少からず又彼士人にして我國に來遊する者多しと雖も未だ彼等の實狀を闡にする文書記録に至ては晨星も香をらざるが如し松崎万之丞君嘗て東京高等商業學校に學び業成りて後久しく濠洲に在り頃來教鞭を岡山商業學校に執るの傍ら其親しく見聞研査せし所に依り濠洲史を著はし將に之を梓にせんとす余に序を求めらる余必らず其世を益するあらんを思ひ喜んで一言を卷首に識るす

明治四十年八月

松崎藏之助謹識

### 自序

我國文運日に月に旺盛を極め、諸般の書籍能く備らざるなしと雖も、獨り濠洲史に至ては未だ其見るべき者あるを聞かず、之れ寧ろ史界の一大缺陷たり、今や振古未曾有なる大戦勝の後を受け、國力海外に發展し、殊邦に雄圖を畫策せんとするに當り、先進同盟國の試験場は蓋し唯一の指針たり、加之日濠貿易を企つる者を見るに、大概失敗に終らざるなきは既に世人の怪しみ、且つ遺憾とする所たり、而して其原因を尋ぬるに數多あるべしと雖も、必竟審かに彼の國體に通曉せず、猥りに輕舉事を行ふも、亦其一因なりと謂はざる可らず、余嘗て南洋に遊び、淹留數年、

爰に如上の缺點を補ふの一助たらしめんとして、僭越を顧みず、敢て之を梓に上す、古人曰く「虎穴に入らずんば焉んぞ虎子を得ん」と讀者夫れ之を諒せよ。

於烏城

明治四十年丁未初夏

著者識

凡例

- 一、本書は筆を載せて濠洲發見より千九百一一年聯邦成立に至り、第壹編總説に於て地理上の概要を述べ、第貳編濠洲探檢史、第參編金鑽發見史、第四編各州發達史、及び第五編聯邦史に區別し、専ら重要なる事實を網羅し、務めて實業思想を加味せり。
- 二、卷頭特に此の歴史に對する地圖を添へて便覽に供し、又地名は傍らに——人名は——を附し、而して用語、方言等にして適當の譯語なき者は原語を用ゐ、或は著者自ら之を意譯せり。
- 三、地方に在て職務の餘暇單獨筆を執れり、而して到底充分

なる材料を蒐集すること能はず、漸次補遺して異日之れが完成を期するのみ。

四、主なる引用書籍左の如し、

The Australian hand book.

History of Australia; Sutherland.

The New nation; Terry F. Rowland.

The Seven colonies of Australia; T. A. Coghlan.

Early experience of Life in South Australia; John Wrathall Bull.

# 濠洲史

## 目次

### 第一編 總説

#### 第一章 濠太刺利洲

一、區劃—二、大陸の位置—三、面積及人口

#### 二編 濠洲探検史

#### 第二章 濠洲の發見

一、端緒—二、發見及探検者—三、キャンペン、クック—四、其他の探検

#### 第三章 (一)内地の探検及發見

一、パッサ及フリンダース—二、端艇旅行—三、クラーク—四、パッサ海峡

目次

の發見—五、フリンダース—六、達斯馬尼の週航—七、バックスの運命—八、フリンダースの海圖出版—九、ボージェン—一〇、フリンダースの捕虜—一一、フリンダースの末期

第四章 (二)内地の探検及發見(自千八百廿三年)……………一九

一、ブルー山脈—二、オックスレー—三、オーラン、カニガム—四、ヒユーム及ホーザエル—五、スタート—六、マレー河—七、ミッチェル

第五章 (三)内地の探検及發見(自千八百四十年)……………二九

一、探検の發展—二、エーヤ—三、大濠洲灣—四、バックスターの最後—五、キング、ジョージス、サウンドに到着—六、スタート—七、中央へ旅行—八、ライカード—九、ミッチェル—一〇、ケネデー—一一、グレゴリー

第六章 (四)内地の探検及發見(自千八百八十六年)……………四四

一、ボーク及キルス—二、カーベントリヤ灣へ急行—三、惻愍—四、ホーク及キルスの臨終—五、救援隊—六、マクデナルド、ステュアルト

七、ワルバートン—八、ギルス及フホレスト

第三編 金鑛發見史……………六一

第七章 (一)新南威耳斯州……………

一、千八百五十一年の重要—二、金鑛發見の風説—三、エドワード・ハーグレーヴス—四、金坑に突進—五、取締規則の實施

第八章 (二)維多利州……………六七

一、維多利州の金鑛發見—二、バララット—三、アレキサンダー山—四、サンダースト—五、金鑛發見の結果

第九章 (三)俱因斯蘭州……………七二

一、金鑛發見の虚報—二、ギムバイ—三、バルマー河畔—四、モルガン山

金坑

第四編 各州發達史……………七六

第十章 新南威耳斯州

七六

(一) 悉德尼罪囚移住地(自千七百八十八年)

七六

(二) ボタニー灣

一、ボタニー灣 二、ボート、ジャクソン 三、當初の艱難 四、ノーフォーク島 五、第二艦隊 六、罪囚の逃亡 七、太守フキリップの歸國 八、太守ハンター 九、殖民地の状況

第十一章

(三) 新南威耳斯州(自千八百八年)

八三

一、太守キング 二、新南威耳斯軍隊 三、殖民地の狀態 四、囚徒の暴動 五、深洲羊毛の起源 六、太守ブライ 七、ブライの放逐

第十二章

(三) 新南威耳斯州(自千八百廿七年)

九一

一、太守マコーリー 二、ブルース山の通路 三、太守プリズベイン 四、太守ダーリング 五、上院 六、新聞の争闘 七、太守ポーク 八、土地問題 九、牧畜家

第十三章

(四) 新南威耳斯州(自千八百五十年)

一〇〇

一、太守ギブズ 二、金融の恐慌 三、土地條例 四、移民 五、分離 六、代議政體 七、アル、グレイ 八、太守フキップロイ 九、囚徒輸送の廢止

第十四章

(五) 新南威耳斯州(自千八百五十一年)

一一一

一、金鑛發見の結果 二、太守デニンソン 三、憲法の改正 四、旱魃 及洪水 五、ダンバー號 六、文物隆興

第十五章

(六) 新南威耳斯州(自千八百六十年)

一二六

一、土地條令 二、プリンス、アルフレッド 三、鐵道布設 四、悉德尼博覽會 五、外國遠征 六、太守キヤーリングトン 七、太守ジャヤーゼ 八、聯邦

第十六章

(二) 達斯馬尼州(自千八百廿六年)

一三三

一、殖民地の創設 二、コリンズ 三、種族 四、ベターメン 五、コリンズの死去 六、太守ダヴェニー 七、新ノーフォーク 八、山賊 九、太守

ツィンデル—一〇、太守アーサー—一、分離

第十七章 (三) 達斯馬尼州 (自千八百廿七年) ……一三三

一、太守フランクリン—二、囚徒の激流—三、フランクリンの困難—

四、太守ウキルモット—五、太守デニソン及罪囚輸送問題—六、非輸

送同盟—七、輸送の終止—八、名稱の改正—九、太守及責任内閣—

一〇、實業の發展

第十八章 (二) 維多利州 (自千八百四十年) ……一四二

一、ボート、フキリップの發見—二、太守コリンズ—三、ウエスタルン、ボ

ート—四、バトマズ—五、ヤラ河—六、ヘンチー兄弟—七、フオークナー

—八、ウキリヤム、バックレー—九、達斯馬尼州の感激—一〇、太守ボー

ク—一一、ロンスデール—一二、ラトロウ

第十九章 (三) 維多利州 (自千八百五十五年) ……一五五

一、金鑛熱の結果—二、囚徒防遏條令—三、金鑛地方の景況—四、免

許料—五、太守ホザム—六、バラントの暴動—七、暴徒の就縛—八、バ  
ラントの叛亂—九、ユイレカ要塞—一〇、暴徒の審問—一一、金坑地  
の改良

第二十章 (三) 維多利州 (自千八百五十五年) ……一六六

一、責任内閣—二、紛擾—三、太守ダーリングへ贈呈—四、議員の俸給

—五、博覽會—六、ホーフトン及ブラッセイ—七、聯邦

第二十一章 (二) 南濠太刺利州 (自千八百三十六年) ……一七五

一、ウエークフキールドの方案—二、南濠會社—三、亞約來—四、太守

ヒンドマーシ—五、ウエークフキールド方案の失敗—六、太守ゴトラ

—七、瓦解と再興—八、太守ゴトラの召還

第二十二章 (三) 南濠太刺利州 (自千八百五十一年) ……一八四

一、太守グレイ—二、鑛產物—三、銅—四、バーラ銅山—五、太守ロープ

—六、太守ヤング

第二十三章 (三) 南濠太刺利州(自千八百五十年)……………一九二

- 一、一時の衰運
- 二、土地條令
- 三、北部地方
- 四、大陸貫通電信
- 五、太守の更迭
- 六、經濟狀態

第二十四章 (四) 西濠太刺利州(自千八百廿九年)……………一九八

- 一、キング、ジョージス、サウント
- 二、スラン河
- 三、土地の交附
- 四、ピール
- 五、暗懺たる狀況
- 六、囚徒の輸送
- 七、囚徒の害惡
- 八、經濟狀態

第二十五章 (一) 俱因斯蘭州(自千八百廿三年)……………二〇六

- 一、モレントン灣
- 二、囚徒收容所
- 三、牧畜業
- 四、自由民移住地
- 五、土蕃
- 六、分離

第二十六章 (三) 俱因斯蘭州(自千八百六十年)……………二二一

- 一、綿花
- 二、甘蔗の耕作及製糖
- 三、大洋洲の土人
- 四、南洋土人條令
- 五、太守の更迭
- 六、分割問題
- 七、近時の情況

第二十七章 (二) 新西蘭殖民地(自千八百四十二年)……………二二八

- 一、發見及起源
- 二、タスマン
- 三、クック
- 四、佛國探檢隊
- 五、英國の主權
- 六、殖民地の建設

第二十八章 (三) 新西蘭殖民地(自千八百四十五年)……………二二八

- 一、マオリ種族との戦争
- 二、立憲及國是

第二十九章 フキジー群島……………二三六

- 一、發見
- 二、企業
- 三、英國の主權
- 四、政府の設立
- 五、太守の任命
- 六、土蕃
- 七、産業

第三十章 英領ニューギニア……………二四二

- 一、占領
- 二、發見
- 三、殖民
- 四、生蕃
- 五、財政及商業

第三十一章 日耳曼ニューギニア……………二四八

- 一、占領
- 二、殖民地の設立
- 三、探檢
- 四、行政

第五編 濠洲聯邦史

第三十二章 濠洲共和聯邦 (其二) ..... 二五一

一、發端—二、聯邦の必要—三、バートン及憲法—四、批准

第三十三章 濠洲共和聯邦 (其二) ..... 二五八

一、名稱—二、聯邦の起源—三、濠洲聯邦の困難—四、經費—五、權限及組織—六、總督及び首相—七、聯邦の利益

第三十四章 經濟上の發達 ..... 二六二

第壹節 農業 ..... 二六四

第貳款 牧畜及副産物 ..... 二六四

一、羊—二、牛—三、馬—四、製乳

第貳款 耕作物 ..... 二六五

一、小麥—二、燕麥—三、玉蜀黍—四、大麥—五、馬鈴薯—六、果實—七、甘

蔗—八、葡萄

第參款 鑛産物 ..... 二六八

一、金—二、銀—三、銅—四、錫—五、鐵—六、石炭

第二節 製造業 ..... 二七〇

第三節 商業 ..... 二七二

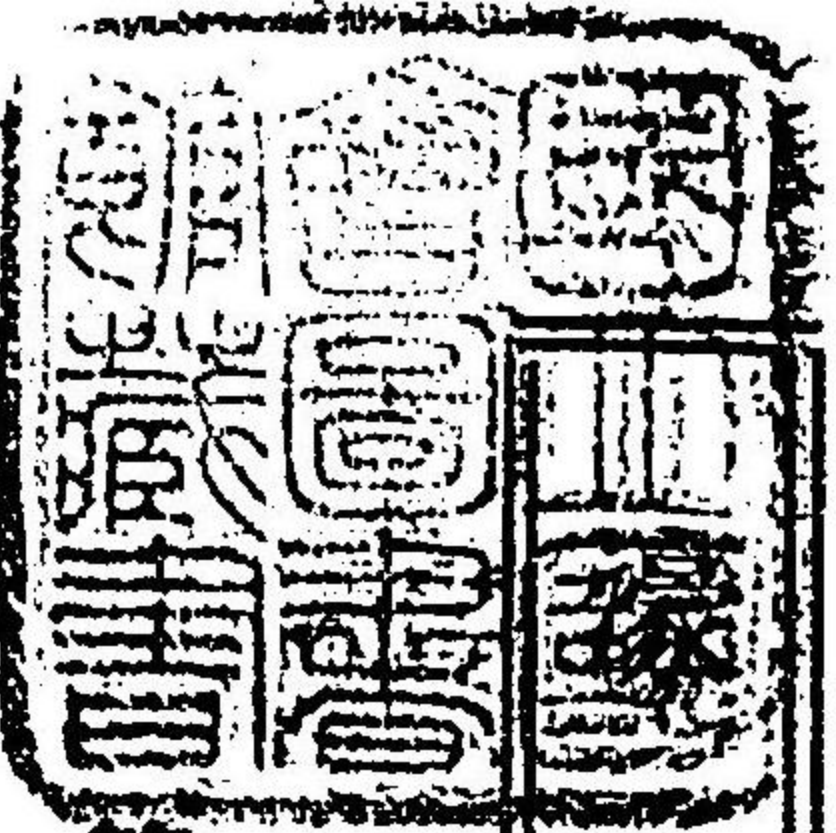
第三十五章 移民制限法 ..... 二七六

第三十六章 結論 ..... 二八一

濠洲史 目次終



洲史



第壹編 總說

第壹章 濠太刺利洲

松崎万之燠著

大不列顛帝國の總面積は大凡八百四萬平方哩にして其三分の二は則ち濠洲に在り而して英塞遜人固有の企業心を實地に施し最も成功せし所にして眞に大英國の試驗場たり將又寶庫なりと謂ふ可し今や此趣味ある歴史を探究するに當つて豫め地理上の梗概を左に記述せん。

一、區劃 濠洲に在る英領殖民地は新南威耳斯州、維多利州、南濠州、西濠州、俱因斯蘭州、達斯馬尼州、新西蘭殖民地、フキジ、群島及び新ギニヤ等を包

第壹章 濠太刺利洲

括し、上記五州は本土に在り、而して達斯馬尼州を併せて六州と成し、之を濠洲共  
和聯邦と稱す、千九百一年一月一日悉德尼府に於て宣言し、別に聯邦政府を組織  
して、新に首府を新南威耳斯州の西南ダルクゲッチーに建設することに決せり。

二、大陸の位置。濠洲大陸は南緯十度三十九分より三十九度十一分半、及び  
東經百十三度五分より百五十一度十六分に位し、東は太平洋、西は印度洋、南は南  
氷洋に面し、北は亞細亞と無數の島嶼を羅列して相連り、東西最も長きは二千四

百哩、南北最廣一千九百七十一哩、海岸線八千八百五十哩なり。

三、面積及び人口。千九百一年の統計に據れば、其面積及び人口左の如し。

州名	面積平方哩	人口
新南威耳斯州	三一〇、七〇〇	一、三五四、八四六
維多利州	八七、八八四	一、二〇、一〇七〇
俱因斯蘭州	六六八、四九七	四九六、五九六
南濠州	九〇三、六九〇	三六二、六〇四

西濠州	九七五、九二〇	一八四、一二四
達斯馬尼州	二六、二一五	一七二、四七五
合計	二、九七二、九〇六	三、七七二、七一九
新西蘭州	一〇四、七五一	七七二、七一九
總計	三、〇七七、六五七	四、五四四、四三四

以上は生蕃を算入せず、重に歐羅巴人にして大部分百分ノ九十は英國人なり、而  
して生蕃の數は精確ならずと雖も、殖民の當初は其數本土に在る者大凡十五萬  
人、新西蘭十二萬人、達斯馬尼族數千人と稱せしが、漸次減少し、既に後者は全く滅  
失して一人の生存する者なく、他は千八百八十一年の統計に依て細別すれば乃  
ち左の如し。

新南威耳斯州	一、六四三
維多利州	七八〇
俱因斯蘭州	二〇、五八五
南濠州	三

南濠州	六三四六
西濠州	二三四六
合計	三一七〇〇
新西蘭州 「マオリ」種族	四一、四三二
總計	七三、一三二

### 第貳編 濠洲探檢史

#### 第貳章 濠洲の發見

一、端緒 濠洲發見の時代は詳かならず、千五百廿一年より千五百四十二年頃の地圖を見るときは馬來群島の南方に廣漠たる範圍を畫き記して大瓜哇ジャバと云ふ、之れ則ち現今の濠洲大陸にして名稱等は葡萄牙語を用ゆるが故に發見者も同國人たるべく、恐らく千五百七年より同廿七年の間にして兎に角三百年前の

發見なることは確然たり。

現にマルコポロの航海日誌にも之れを證せり、蓋し十六世期の後半西班牙及び葡萄牙の兩國は合併して西王フィリップ二世之れを支配せしが故に、當時の事蹟は往々にして其西葡何れなるかを混同せりと雖も、大瓜哇は明かに葡萄牙の國旗を掲げて其所屬たるを示せり、然れども之れ僅かに濠洲の北方沿岸を想像せしに過ぎざるなり。

千五百廿年頃世界一週を企てたりしマジエランは比律賓群島に到りて殺戮せられたりと雖も、其航海圖に大陸を記してマジエラニカと稱し、南緯卅五度の點を示し、東方は六十度に達し輪郭稍々彷彿せり、而して千五百五十年調製のドーフィン地圖は更に明細にして後年キャプテン、クックと共に濠洲に赴きたるサー、バンクスが英國博物館に寄贈せし者あり、南洋に大陸を畫きたる地圖決して少なきに非らず、沙翁亦之れを記載せり。

二、發見及探檢者 抑も南洋大陸の存在を豫知したるは歴山王を以て嚆矢

とす、大王遠征を企て印度に到るや、烟眼を以て能く南方に大陸ありと看破せり、而して三百年前より事實となりて漸く地圖上に記載せらるゝに至れり、然れども沙翁時代則ち千六百年頃には未だ判然たらずして實際に探検して確定したるは千六百年なりとす。

此年西班牙國航海者デロ及び貴族トレスの兩人大小三艘の船舶を卒ゐて王命を齎らして秘魯に赴き、更に探検を試みて陸地を發見し「テラ、オーストラリ、デル、エスピリチュ、サント」(南洋の神國)と命名せり、而して後年フリンダースは之れに基因して大陸をオーストラリヤと呼稱せり、然れども此發見は現今の新ヘブリズ島にして濠洲本土を距る殆んど一千哩あり、此處に偶々颶風に遭遇し兩船爲めに隔絶してデロは空しく船首を回らして墨西哥に歸航し、トレスは進んで眞菲に達せんとして濠洲の東北角を通過し之れをトレス海峡と稱せり。

同年和蘭船「ダイフエン」號は濠洲の北方カーペンタリヤ灣に到り船員上陸せり、之れ歐人の濠洲大陸に足跡を印したる初めに於て土人と争闘しキーヤ、ウキーヤ岬

の名稱を殘せり。

千六百十六年デルクス、ハートグは濠洲の西北方を探検してシヤーク灣に到りコ  
ンコルドと名稱を附せり、而して千六百十八年キャブテン、ザーチエンは北方沿岸を  
探検してアルンヘム、ランドと命名し、翌年キャブテン、エデルは西方沿岸則ち西濠洲  
を探検し、千六百廿二年蘭船「リーキン」號は南方沿岸に到り、又千六百廿七年ビー  
ター、ナイツは南方を探検して大濠洲灣に入り、而して千六百廿八年ジエネラル、カー  
ペンターはカーペンタリヤ灣を探検して皆其名を殘せり。

千六百四十二年タスマンは東洋和蘭殖民地の太守デーメンの命に依て新西蘭  
を發見し、次でタスマニヤに到り自ら之れをファン、デーメンズ、ランドと名稱を附せし  
も後世其發見者の名に改稱せり、而して二年を経て再び濠洲北岸に至りて之れ  
を新和蘭と名付たり。

千六百八十八年英人ウキリヤム、ダムビヤは海賊船にて濠洲西方沿岸則ちパッカニ  
ーヤス群島に至り、財を蓄へて英國に歸り安樂に餘命を送らんとせしが、偶々ジ

エームス一世の命を蒙り軍艦「ロエバック」號を卒ゐて再び濠洲に來りて探検せり、其歸途フエルナンド島智利、ザアルバライゾーの西方太平洋上四百哩の處に在りしが千九百六年大地震の爲め海底に陥落せり、に立寄りアレキザンダー、シエルカークを救助せり、之れ蘇格蘭人にして漂流して該島に在ること四年、文豪ダニエル、ダフ、ハ是等の事實を布演して漂流記を作れりと云ふ、故に該島を一に「ロビンソン、クルソー」島と稱す。

ダンビーヤは西方沿岸を探検して濠洲を全然不毛なる土地と見做し、到底開拓の見込なき所なりと報導せしを以て世人は漸く濠洲を忘るゝに至り、折柄戰雲歐洲の天を蔽ひ外を顧みるの暇なく、爾來百年間杳として遂に知られざるに至れり。

三、キヤブテンクック。然るに偶然再び濠洲を發見して、新時限を現はすに至れり、則ち千七百六十九年金星は太陽面を經過するが故に、之れが觀測を行はんが爲めに英國政府は學士會院の勸めに依り、遠征隊を組織しキヤブテン、クック

を擧げて指揮官となし、商船「エンデジャウ」號三百七十噸を選択し、彼の有名なるバンクスを初め天文學者、博物學者等多く便乘して千七百六十八年八月廿五日英國プリマス港を出帆し、リオデジャネローを経てホルン岬を廻り、翌年四月十三日ツアイエター群島中に在るタヒチ島に到着し、充分精密に觀測することを得たり。

キヤブテン、クックは名をジエームスと云ひ、千七百二十八年英國ヨークシャーの寒村貧農の家に生れ、年十三にして商店に奉公せしが、性來航海を好み刻苦して遂に英國海軍に入て船長となれり。

此に派遣の目的を達したれとも、糧食等準備充分なるが故に、直に歸國するを遺憾なりとし、更に南洋探検を企圖し、先づ新西蘭に到り六ヶ月滞在して探検を爲し、再び出帆して濠洲大陸の南端「ハウ」岬に達し、海岸に沿ふて東北に進み一江灣を發見し該所に上陸して「バンクス」及び「ソランダー」博士は植物を蒐集せり、依て以て「ボタニー」灣と名付く。

茲に占領の儀式を行ひ「新南威耳斯」と命名せり、蓋し本國威耳斯の地勢に酷似す

るを以てなり、之れを英國の版圖に歸したる始めとす、于時千七百七十年四月なり。  
 更に進んでジャクソン港 モルトン灣等を發見して沿岸東北千三百哩を測量し、一夜三更トリプユレーション岬附近に於て珊瑚礁に觸れて大に船體を破損し、辛ふじて一小河口を搜索し入て修繕することを得たり、之れをエンデヴオー河と云ふ、滞在すること二ヶ月にして出帆することを得、ヨーク岬よりトールレス海峽を通過して新ギニヤに到り、其の濠洲大陸より分離せることを確め、更に蘭領 パタピヤより喜望峯を迂廻して翌年六月歸國し、初めて濠洲に關する新思想を鼓吹して大に世人を感動せり、後年クックは再び第二回航海(一七七二—一七七五)を企て新カレドニヤ及びバサンドウキツ群島其他重要な發見をなし、更に千七百七十七年達斯馬尼のアドヴェンチア灣に到り、歸途布哇に於て土人の襲撃を受け無殘の最後を遂げたり。

四、其他の探検 爾來濠洲探検を企つる者尠からずと雖も、特に記すべき重

要なる者なく、千七百七十二年佛人マリオン、翌年英人フワルノーは達斯馬尼に到り、千七百九十一年ラベルズ、キャプテン、ヴァンクレーヴァー、ドントレカストー等相次て來り、就中ヴァンクレーヴァーは南方沿岸及びキング、ジョーシ、サウンド探検し、千八百一年佛國は遠征隊を派遣しボーデン及びフレシネーは濠洲の西南を探検せり、之れ蓋し那翁の命にして濠洲占領の意思ありたるや明かなり。

第三章 (一)内地の探検及び發見

一、パッス及びフリンドンダース 英國政府キャプテン、クックの建議に基き罪人の一團を送りて千七百八十八年悉德尼府を興せりと雖も、其當初の状態たる、故山萬里、文明國との交通は殆んど途絶せられ、而して内地は瘴烟漠々、足を容るゝこと能はず、眞に之れ屈強なる流刑場にして、恰も奈落に墜られたるに異ならず、然れども漸次寂寞を破て内地の探検を行ふに至りたるは勢の然らしむる所、殖民後七年にして冒險敢爲の二青年來て其端緒を開くに至れり。

千七百九十五年太守ハンターの「リライアンス」號にて赴任せるや、ジョージ、パッサと稱する醫官、及海軍少尉試補たるメイシユ、フリンダースの兩人を伴ひ來れり、俱に殊稱なる少壯者にして、温良恭謙能く人に交はり、頗る熱心敢爲の氣象を有し、献身的に探検事業を行へり。

二、端艇旅行。到着後一ヶ月ならずして八呎許なる端舟を購入して「トム、タム」と名付け、一人の「ボーイ」を雇ひて兩人にて漕ぎ太平洋に出てたり、然れども怒濤の爲めに翻弄せられて恰も木葉の如し辛ふじて「ポタニー」灣に入り精細に測量を行ひ、沿岸及び河流等の圖を作成して太守に呈し、大に感賞を得、更に「ポタニー」灣の南方海に注ぐ一大河流あるが如く傳へらるゝが故に、其實否を探らんが爲めに出發せり、然れども屢々災厄に遭遇して其危険擧げて名狀すべからざる者あり。

或時船を轉覆して火藥を濕したるを以て、パッサは之れを乾さんが爲めに岩石上に擲け置き、飲料水を汲み來らんとせし間に、突然五十人許の土蕃集合し來り、虚に乗じて襲撃せんとする者の如く、毫も油断すること能はず、此に於てフリンダースは一計を案じ土蕃は頭髮を剪るを以て、無上の贅澤となすの嗜好あることを知るが故に、彼等を磨きて順次に岩石上に座せしめ、自ら鋏を採て斬髮を施し漸く火藥の乾きたるを待て船に飛び乗り、辛ふじて虎口を遁るゝを得たり、而して大洋に出づるや、強流の爲め南方遙かに押流され、風向も逆となりて帆を用ゆること能はず、此に於て晝間は力を限り櫂を採て漕ぎ、日暮れば石を投じて錨となし、僅かに睡眠を貪るのみ、一夜俄かに暴風起り激浪忽ち船を呑まんとする勢なるを以て、惶惶錨を抜き、パッサは帆を司どり、フリンダースは櫂を執り、又「ボーイ」は浸水を汲み出し、各自懸命に分擔の任務を盡くし、幸に岩陰を發見して夜を徹し、其後二日ならずして目的地に達することを得たりと雖も、河流在るに非ずして「ポート、ハッキンク」の小灣たりしなり、乃ち詳細に探検して沿岸三四十哩の間、精密なる地圖を作るに必要なる報告を爲せり。

三、クラーック。殖民後、幾ばくもなく、偶然沿岸を探検するの機會を發生せり、這

は「シドニー、カウ」と稱する一商船達斯馬尼の北方フアーノ島附近に於て難破せるを以て之れを救助せんが爲めに上乘クラークを頭とし多數端艇に搭乗して悉德尼を出發せり、然るに不幸にしてハウ岬に到り暴風の爲めに陸上に打揚げられたるか故に、陸路三百哩の間慘憺未知の地方を徒歩して歸るの止むなきに至れり、而して糧食は僅少にして忽ち盡きて食する物なく、又一滴の飲料水だもなく、殆んど飢餓に斃れ、辛ふじて悉德尼を距る三十哩の處に達したる者あれども、黒奴の爲めに殺戮せられ僅かにクラーク及び一兩名漸くジャクソン港頭に到着するを得たり、衣服は襤褸の如く、身體枯瘦して骸骨に均し、此に於て救助船を送り、之に搭乗せしめたる時は恰も嬰兒を取扱ふに異ならざりしと云ふ、而してクラークの恢復するや、初めて其通過したる地方の情況を審かにし、加之「シドニー、カウ」號の水夫にしてフアーノ群島に避難することを得たる者あり、救助せられて悉德尼に來り、其物語をなせしを以て、幾多の材料と成り、彼此相綜合して漸く其沿岸を知悉するに至れり。

#### 四、パッス海峽の發見

パッスは太守ハンターより捕鯨船に船員六名、及び六週間の糧食を支給せられたるを以て、シヨール、ヘーヴンの河口を發見し、又ジェーヴキス灣を測量して海圖を製し、更にツーフホルド灣よりハウ岬を廻り、進んで維多利地方を發見せり、其ナインチー、マイル海濱に沿ふて航行し、西南に禿頭山の屹立するを見る、後之れをウキルン岬と稱す、偶々暴風に遭ふて避難所を索めんとして、圖らずウニスタルン港を發見して十三日間滞在せり、然れども糧食の欠乏を來したるを以て、頻りに焦慮して歸途に就き、再び暴風に出遇ひコルナー浦を發見して避難せり、此行十一週間を費して沿岸六百哩を探検し、濠洲に於ける主要なる岬一ヶ所及江灣四ヶ所を發見せり、加之最も重要なる發見は達斯馬尼は大陸より離れたる一孤島なることを確め、之れをパッス海峽と命せり、一小捕鯨船を以て能く此發見をなす其勇氣と熟練とは宜しく稱揚せざる可らず。

五、フリンダース 此際フリンダースはノーフホルク島に趣き不在なりしか、還り來て直に「シドニー、カウ」號の第二回救助船に便乗してフアーノ島に到り、其難破物



を收容するが爲めに碇泊中、小舟を借りて五日間附近の島嶼及び達斯馬尼の北方を探検せり、而して此旅行中初めて濠洲特種の動物なる袋鼠を發見せり。

**六、達斯馬尼の週航。** 翌年則ち千七百九十八年太守ハンターは發見の目的を以て「ノーフォーク」號なる一小帆船を兩人に與へたるを以て、三ヶ月の許可を請ふて達斯馬尼を一週せんとし、タマル河及びダルリンブル港を發見し、遂に目的を成効して、プリンダースは海圖を調製し其経緯の如きも極めて精密に測定せり。

**七、バスの運命。** シドニーに歸るや、バスは友人に唆かされ、西班牙の禁を犯して南米に密輸入を企て、其後絶えて消息を聞かず、察するに捕えられて銀山に送られ、懲役となりて空しく果てしものならんか、彼の膽略は人の認むる所、濠洲地理上貢獻せし所決して尠少ならざるなり。

**八、プリンダースの海圖出版。** プリンダースは翌年大尉に昇進し、「ノーフォーク」號を以て北方ハーヴェイ灣に到る沿岸を探検し、翌年千八百零年倫敦に赴き、濠洲の地理に關し初めて詳細なる報導をなし、海圖を出版して賞賛を博せり、英國

政府又大に感激して、遂に濠洲全海岸の測量を爲さんとを決定し、プリンダースを以て「インヴェニステーター」號の指揮官となし、特に佛國政府より彼の爲めに旅行券を請求して之れを與へたり、蓋し當時英佛兩國開戦中なりしが故に、途上佛國軍艦の捕獲に備ふるか爲めなり、此に於て先づ濠洲の南方沿岸に到り、一島を發見し、無數の袋獸棲息するを見て之れをカンガル島と稱し、次てスペンサー灣を發見し、又ポート・フキリップに來れり、然れども十週間前既に「マレー」大尉は「レデー、ネルソン」號を以て之れを發見せり。

**九、ボーデン。** プリンダースのバス海峡に到るや、ボーデンの卒ゆる佛國遠征隊に邂逅せり、ボーデンは徒らに達斯馬尼の附近に遷延し、後れて濠洲南岸を探検して、自ら發見せしもの、如く佛語を以て名稱を付し、數ヶ月の後兩遠征隊は再び悉德尼に於て會合せしが故に、プリンダースは已の海圖を示し、佛國官權は彼れを以て南方沿岸の發見者たることを承認せり、然るに佛國の出版には之れを無視してボーデンを以て其發見者となせり、此の如く互に相敵視するにも關せず、

悉德尼<sup>一</sup>にては佛國遠征隊を厚遇し、適々其水兵等の壞血病に罹る者多きを見て、病院に收容して治療を施し、或はボーデン以下を遷應して頗る歡待せり。

一〇、フリンダースの捕虜。フリンダースはヨーク岬を廻りてトールレス海峡の精密なる海圖を調製し北方沿岸を探検せり、然れども船は最早老朽して永く其用に堪えざるに至りたるを以て悉德尼に引返へし、海圖及び日誌等を携帶し、貨物船に便乗して英國に歸へらんとし、行くこと僅かにして珊瑚礁に觸れて座礁し、二週間を経て救助せられて悉德尼に歸り、再び「カムパランド」と稱する一小帆船にて英國に赴くととなりたれども、較々もすれば海水浸入し、殊に充分に糧食を貯ふること能はざるを以て、那翁より得たる旅行券は彼れを保護する者と思し、佛領モリシアスに寄港せり、然れども太守デ、ケーンは忽ち彼を捕へて、無法に禁錮し重要な書類等を沒收せり。

ボーデン之れを聞いて直にモリシアスに到り、赦免を請はんとせしも、程なく該處に於て死去せり、而してフリンダースの海圖書類等は、總て佛國に送られ佛語に變更

して出版し、フリンダースは空しく獄中に呻吟せり。

一一、フリンダースの末期。後六年を経て英國艦隊來り、赦るされて英國に歸るを得たり、而して已れの傳ふる所の報告は世人已に之れを知悉せるを以て、更に一大著述をなさんと企て、日夜苦心して遂に其目的を達したり、然れども如何にせん、永く辛酸を嘗め、寒暑に身を曝らし、或は數年鉄窓の下に苦しみ、悲惨を極めたるの結果、大に健康を害し、其著書の出版せられたるの日、恰も妻女に擁せられて終焉せり、嗚呼彼は一大發見者たり、敢て私利を求むるが爲めに非らず、奮然厥起して探検を行ひ、能く其職責を盡し、偉大なる利益を與へたり、當時却て之れを知る者少なく、後世に及んで漸次顯著なるに至れり。

#### 第四章 (三) 内地の探検及び發見 (自千八百十三年至千八百三十六年)

一、プルー山脈。新南威耳斯の地勢は之れを三區に分ち、海岸地方、高原地方、及び内部平原地方とす、而して海岸地方は比較的狹隘にして六七十哩乃至百二十

哩の處ありと雖も、大概三十五哩内外にして東西に馳する大山脈ありて分水嶺をなし、之れを越えて内地は平坦たる曠野なりとす。

初めて悉德尼に殖民するや、其範圍甚だ狭く又敢て深く内地に入る者稀なり、而して悉德尼を距る西方五十哩許にして連山重疊せり、之れをブルー山と云ふ、當時之れを以て越ゆべからざる難所と爲せり、彼の勇敢なるハッス及び數人嘗て之れを試みたれども果さず、ケイレーと呼ぶ者漸く遙かに進むことを得たりと雖も、遂に絶壁に阻められ、進退谷まり、道を失ひたることあり。

千八百十三年六月大尉ウエントリス、ローン、及びブラックスランドの三人初めて成效することを得たり、鬱勃たる森林を横切り、或は峭壁を匍匐し、暗嶺たる山間を辿りて、漸く西方に出て、一大沃野を發見して、道路の容易に造り得べきを確め、太守マコーリーに復命せり。

一、オックスレー 千八百十七年測量總監オックスレー、ハラクラン河の水源を探検すべき命を受け、一小團體を卒ゐてマコーリー地方より出立し、ラクラン河岸に

沿ふて進むと數日、恰も波動の如き森林及び牧野の地方を經過せり、然れども須臾にして風光頓に一變し、丘陵漸く低く、樹木矮少にして更に又一大平原に出て、眼界總て沼澤なり、蘆葦繁茂して一見恰も滄海の如し、之れを踏み分けて進めば、泥濘膝を埋め、行路頗る困難を極む、此に於て踵を廻らして南方に向ひ迂廻して、河流に従ひ、荒漠たる地方に出て、再び沼澤を以て遮ぎられ、此處に到りてラクラン河は無限の沼澤と變じて全く河流を滅せり、之れ則ち其終極にして到底殖民すること能はざる地方なりと斷定し、バサーストに歸るやラクラン河は無限の沼澤に注ぎ、之れ或は一大内海の淵ならんか、毫も企業の見込なしと報告せり。其後オックスレーはマコーリー河の探検に派遣を命ぜられたれども、成效を得ず、該河も同様沼澤に注ぎ、長三四十哩、到底斷念するの止を得ざるに至れり、再び新イ

三、オーラン、カンニガム 植物學者カンニガムは草木の採收をなすが爲に、未知の地方を開き、多く重要な發見をなせり、道は千八百廿五年リヴァプール山脈

を越ゆる路を發見し、其風景絶佳なるを見て、バンドラバツスと呼び、山岳を越えて、リヴァプール平原及びビダーリング牧野を發見せり、而して該地方はダーリング河の上流なるビール、グキダイル、及びダマレスクの三川ありて、頗る灌漑に富み、一兩年ならずして群羊を以て蔽はるゝに至り、濠洲農業會社亦此處に大農場を設置せり。

四、ヒユーム及びホーヴェル 維多利の南方海岸にフリンダース及び他の航海者に依て精細に探検せられたりと雖ども、内地は未だ全く知れざるが故に、千八百二十四年太守ブリスベーンは方案を廻らし、囚徒の一團をキルソン岬に上陸せしめ、内地を通過して悉德尼に歸着すれば、之れを以て赦免を與へんことを議し、其監督をヒユームなる者に命ぜり、彼は殖民地に生れ勇敢なる邊民<sup>ブッシュ</sup>なり、性質稍々專横なりと雖も、熱誠果斷にして探検事業を以て成効せんことを企圖せり、此に於て彼は太守の方略を不可なりとし、船長ホーヴェルなる者と共に其囚徒を卒めて悉德尼より南方海岸に達すべきことを誓ひ、許可を得て、囚徒六名を伴ひ、二臺の牛車に糧食を満載し、レーキ、ジョージを出立せり。

一行マランビッチ河畔に達するや、河流廣く且つ急流なるが故に、貨物を運送すること能はず、此に於てヒユームは油布を以て車を包み、船に代へ繩を結びて口に啣きて之れを牽き、游泳して渡れり、而して一行悉く彼岸に渡り、更に行進せり、然れども密林地方なるが故に車を挽くこと能はず、止むことを得ず遺棄して牛背或は各自之れを擔ひ、爵蒼たる森林丘陵を通過し、進むに従て左に濠洲、アルプ、スの山嶺々々として雪を戴くを望見し、遂に沿々たる大河の岸に達し、之れをヒユーム河と稱せしも、後變更せり、マレー河則ち之れなり、忽ち樹枝を組み油布を以て包みて舟となし、河流を横切りて初めてビクトリアの北方樹木疎々たる傾斜に入り、西南に進んでオーヴェンス河を發見し、更に又一河の流に達し、之れをホーヴェル河と命ぜしも、後ゴルボルン河と改稱せり。

大洋の濱に達する目的なりと雖も、四面曠漠として路窺まりなし、ヒユーム及びホーヴェルは一兩日間、一行を止め、遙かに小高き丘陵在るを見て、其頂上に登り、四望を試むるも眼界唯々影じ來るは波動の如き護謨樹と小丘點々起伏する在る

のみ、之れを失望山と稱せり、此に於て少しく方向を轉して進めば數日ならずして滄海を望むを得て一行觀喜名狀すべからず、景色庭園の如く一小江あり、土人は之れをジローンと稱す。

此に爭論を惹起したるは、ホーヴェルは此地をウエスタルン港なりとし、ヒュームはフキリップ港なりと主張せり、而してヒュームは非常にホーヴェルの無學を凌辱し、ホーヴェルは又ヒュームを傲慢自負なりと嘲り、兩者互に感情を害し、爾後再び友誼を回復せず、然れどもヒュームは終始機敏なる觀察を行ひ、能く一行をして安全迅速に歸着するを得せしめたり、此に於て俱に土地を附與せられ、囚徒は赦免狀を得たり。

五、スタート。千八百二十六年より同廿八年に至る間、引續き大旱魃を來したるを以て、太守ダーリングはオックスレーの前進を阻障したる沼澤は全然乾涸せしならん、而してマコーリー河の探検は決して困難ならざる可しと思考し、遠征隊を組織すべき命令をキャプテン、スタートに傳へ、ヒュームを伴ひ、軍人二名及び囚徒八

名より成る一團を引卒せしむ、一行乃ち小舟を運搬してマコーリー河に至れば水淺くして之れを浮ぶること能はず、依て河岸に沿ふて徒歩し、嘗てオックスレーの引返したる場所に達せり、然れども沼澤は炎暑の爲めに乾涸して灰土と化し、一面の茅藪悉く枯凋して、光景轉々駭愕たり、敢て之れを踏破して進まんか、到底窒息を免れず、此に於て西方に向ひ平坦たる地方に出て、之れを迂廻するに介殼到る處に散布するを見る、以て氾濫の状態を知るを得べし、而して此曠原より一河の流るゝ在り、スタートは太守の名譽を以てダーリング河と命名し、流れに沿ふて進むこと九十哩許にして歸還せり、其一大内海の存在するは臆説たるを確むるを得たり。

六、マーレー河。千八百廿九年スタートは再び博物學者マクレイと共に探検の途に上り、小舟を携えてマランビッヂー河に到り、囚徒八名を卒めて之れを浮べラクラン河の合流に達すれば、河流漸く狭く、河岸樹木鬱蒼として、綠陰暗く、急流直下して、忽ち白砂皎々たる間を過ぎて、一大河流に出ずるを得たり、之れをマーレー

河と稱す、數年前ヒユーム等の渡りたる下流なり。  
 スタートの旅行の方法は、日出より日没に至るまで舟を漕ぎ、日暮れば乃ち河岸に上りて宿營す、時に數百の土人來襲することあり、然れどもスタートは能く温顔を以て彼等を遇し、友情を以て接するが故に、能く之れを懐柔することを得たり。  
 マーレー河を進むこと殆んど二百哩にして北方より注ぐ一大會流則ちダーリングの河口に達す、之れ嘗てスタートの自ら發見して命名せし所なり、溯ること一二哩土人の魚を捕えんが爲めに樹枝を以て造りたる梁あり、破壊して進むに忍びずして引返へせり、土人は河岸に隠れて之れを目撃し大に感謝して大聲歡呼せり、一行英國旗を打振り萬歳を三唱して之れに和し、徐に流れを下りて再びマーレー河に出て先づ西に向ひ更に南に進み遂に渺々たる水面に達せり、之れをアレキザンドリナ湖と稱す、蓋し女皇の名に因めり、而して湖水を渡りて太平洋の通路を發見せしと雖も、砂洲の障得あるを以て出づること能はず、再び溯りて歸途に就けり、而して尙ほ一千哩の行程を扣へたり、漸くマランビッデーに入るや、既に

飢食次乏を來し、流に逆ひ全力を竭して饑餓と疲勞の爲めに顔色なく、剩さへ盛夏の候、炎天に曝露して心神爲めに昏み、一人は發狂し、他は糧を投じて寧ろ死せんと絶叫する者あるに至れり、スタートは從容慰撫し悉さざるなく、辛ふじて歸着するを得たり、而して此行漢洲第一の大河を發見し、一千哩未知の地方を探検して多く重要な發見をなせり、故に陸上に於てはスタート海上に在てはフリンダースを以て漢洲探検家の巨臂なりとす。

七、ミッチェル 更に漢洲地圖の空白を充さんが爲めに努めたる探検家の一人はミッチェル少佐なり、千八百卅一年西北の遠征を企て十五名の囚徒を引卒してダーリングの上流に達せりと雖も、糧食運搬の爲め後方に留めたる二人の者は土人に殺戮せられ糧食を却奪せられたるが故に中止せり、而して千八百卅五年探検を企て再び不幸に遭遇せり、其は彼のオーラン、カンニガムの兄弟にしてリチャード、カンニガムなる植物學者あり、一行に加はりて無端土人の爲めに殺戮せられ遂に一大抵抗に出會ひたるが故に引返せり。

千八百三十六年南方に遠征して遂に大に成功せり、先づ廿五名の囚徒を卒ゐてマランビッジー及びラクラン兩河の合流に達し、止まりて附近を探検せり、此時又土人の來襲を蒙り、己むを得ず數名を銃殺し、進んでマレー河を渡り、ロンドン地方の山上に登りて四方を眺むれば、恰もエデンの樂園に髣髴たり、森林能く茂り、緑野千里に亘り、地平線上幽婉として數多の河流の注ぐを見る、眞に絶景たり、克蘭ピアンズの傾斜を経てグレング河を發見し、携帶したる小舟を浮べて河流を進めば、仙境に入るが如く、深林、綠堤、草木花咲き、窈窕たる蔓羅垂れて岸に懸り、清流潺々として、白壑を洗ふて洞窟に送り、或は山麓を廻りて、幽邃たる溪谷を過ぎ、知らず海に達せり、然れども河口障得ありて進むこと能はず、而してポートランド灣は右方近距離の所に在り、此に於てミツチエル少佐は遠足を試みたるに、圖らざりき海岸に奇麗なる家屋ありて、前面に一小帆船の碇泊せるを認む、之れ達斯馬尼より來りて捕鯨所を設けたるヘンチー兄弟の住所なり、ミツチエルは歸途マセドン山に登り其風景を賞して「南洋の蓬萊」と云へり、此探検の功に依り悉德尼議

會は一千磅を議決し、其後又本國より叙勳せられて、則ちサー、トーマス、ミツチエルとして知らるゝに至れり。

### 第五章 (三) 内地の探検及び發見 (自千八百四十年至千八百六十年)

一、探検の發展 南洋の海岸は千八百十五年迄に悉く探検せられたり、故に新發見を爲さんと欲する者は、勢ひ内地に向はざる可らず。

既に述べたるが如く、千八百卅六年以前に於ける探検は皆大陸の東南部を以て主とし、オックスレーは新南威耳斯の北部、カニガムは俱因斯蘭地方、ヒューム、ボーヴェル、スタート及びミツチエル等は新南威耳斯の南部及び維多利地方を旅行せり、而して是等勇敢なる探検家の足跡を追ふて、牧畜家は漸次其地方に入り込み、適當なる所あれば乃ち家畜を卒ゐて移住せしが故に、フリスベーンより亞的來に一線を畫く以南の地方は、限なく探検せらるゝに至れり、然れども未だ大陸の八分の七は探検せられず、此に於て冒險家は絶えず地理を究むるの目的を以て、深く内

地に入りて探検を行ひしと雖ども、其方法や全く趣を異にするに至り、當初は多く囚徒を卒ぬ水草を追ふて旅行し、往々土人の襲撃に苦められ、カニガム兄弟其他之れが爲めに生命を犠牲に供したる者少からず、其後に在ては、之れに加ふるに更に中央部に入て炎熱及び飢餓の爲めに苦闘せり。

一、エーヤ。剛膽なる探検家エドワルド・ジョン・エーヤは千八百四十年遠征を企て、自ら経費の半額を支辨し、南緯政府は當時頗る財政困難なるにも關せず、一、百磅を補助し、友人等相議して殘部を醸出し、歐人三名、土人三名を伴ひ、馬十三頭及び羊四十頭は、餌食に備へ、アデレードより出立してスペンサー灣頭に達すれば、一、小船は三ヶ月間の餌食を準備せり、而して更に内地に入て荒蕩たる地方を進むと四五十里にして西方に轉じ、トレンス湖に到れば湖水乾涸して廣袤殆んど二十哩、燦然として鹽を以て蔽はれ、之れを踏めば泥濘たり、行くこと六哩許にして漸く深く、馬脚を没するに至る、己むを得ず迂廻すること數哩、海岸を辿ると雖ども、到底際限なきを以て、北方に向ひ再び荒蕩たる地方を過ぐることに殆んど二百

哩許エーヤ湖に達すれば又鹽の外皮ある泥土に出會し、加之飲料水の欠乏を來したるを以て遙かに後方に引返へし、更に西方に進みたれども屢々鹹湖に遮ぎられ、東北に轉ずれば礫确荒寥、早魃の爲めに草木枯凋して百哩の間、一滴の清水なく、瀕死を凌ぎてフローム河に達せしと雖も、エーヤ湖に注ぐ河流なるが故に、之れを掬すれば苦味にして飲む可からず、エーヤは一小丘に登り眺望せしも、慘憺たる砂漠なるを以て之れを絶望山と呼稱して踵を廻らし再びスペンサー灣頭に引返へせり。

三、大濠洲灣。此に於て目的を變更して西濠洲に達せんが爲めに大濠洲灣の沿岸を進行し、三度ストリーキイ灣を廻はりたれども、礫确にして水の欠乏同様たり、此に於て其到底無謀なるを知り、太守ゴラーは直に引返へす可き命令を傳へたり、然れどもエーヤは回答して曰く、何等成效せずして歸るは忍ぶべからざる恥辱なりとし、一行を歸還せしめ輕装してバックスター、黒奴キリー及土人二名を伴ひ、馬數頭を以て數週間の糧食、飲料水を運搬せしめて、大濠洲灣を進行し、海



抜三百乃至六百呎に余る、斷岩絶壁を越ゆる所少からず、而して海岸を遠ざかれば塵埃甚しく、夜に入て寝れば土砂顔を埋め、食物又之れが爲めに塗れて、殆んど嚙下すべからず、加之炎熱灼くが如くにして、水の欠乏依然たり、此の如き状態にて百十哩を旅行して、遂に馬は倒れて動かざるに至れり。

エーヤは土人一名を随へ、急行十八哩以上も進みたれども、一滴の水を得ず、夜に入て横臥せしとき、唇爛れて苦悶甚し、而して翌朝に至り、稍々小高さ丘陵を認めたるにより、近づけば深さ七呎許なる井戸數多あるを發見せり、之れ土人の貯水所なり、乃ち此の水を運びて馬を蘇生せしめ、一行來て井戸に籠り、滞在すること一週間、再び出立して偶々土人に出遇ひ、前方所々に此の如き貯水あるを聞き、無益に馬を疲勞せしむるを慮れて少量の水を運搬せり、然れども砂漠地方を過ぐるに六十哩に垂んとして、未だ一ヶ所の井戸を認めず、大に失望して、バックスターに急ぎ歸て水を持ち來らしめ、而して海濱に出づるや、馬は海水を見て之を飲まんとして狂亂し、遂に二頭は斃れて、餓食を運搬すること能はざるに至り、空しく

遺棄せり。

バックスターは漸く失望落膽して、歸還せんことを促すに至りたれども、エーヤは斷平として前進を主張し、再び荒蕪たる砂漠に到りて、更に二頭の馬を失ひ、百二十六哩を進んで水を得ず、馬は續々斃れ、バックスターは歸るを迫るも、勵聲一番して更に百六十哩を進み、地下を掘りて僅かに清水を得たり、然れども一行馬肉を食して、餓食の欠乏を補ひ、バックスターの喪心愈々甚しく、エーヤも稍々躊躇するに至りたれども、此に至て進むも退くも其困難は已に同一たり、加之土人三名は未だ甚だ快活にして、歡喜談笑するを見て、多少人意を強ふするに似たり。

**四、バックスターの最後。** 毎夕露營するや、エーヤは銃を裝填して座右に置き、以て土人の來襲に備へ、馬は蹇歩せしめて之れを放ち、置き以て、草を食するに任せ、交々監視をなせり、一夕馬は三四町許り逸したるを以て、エーヤは之れを追従して至り、獨り岩角に腰を打掛て暫らく沈視せり、夜色暗淡として、冷輝轉々、斷崖突然銃聲一發、耳朶を掠ひ、キリー周章走り來て、戰慄云ふ所を知らず、舍内に入れば、

バックスターは地上に倒れて苦悶するを以て、直に抱き起したる刹那絶息せり、蓋し二人の奴僕は糧食を奪ふて逃走を企て、バックスターの支えたるを以て銃殺して遁れたるなり、此に於てエーヤは幽獨萬恨に堪えず、夜を徹して警戒を怠らず、翌朝死骸を葬らんとせしも、附近一帯岩石にして穿つ可らざるを以て毛布に包みて地上に置き、泣然として訣別せり。

五、キング、ジョージス、サウンドに到着。エーヤはキリーを伴ひ、一週間を経て漸く水を得たり、途中彼の兇漢密かに尾行し來るを認識したるを以て、須臾も安眠すること能はず、徐々に進行するに従ひ、風光漸く一變するに至り、袋獸二頭を銃殺して之れを獲たり、而して再び海岸に出づるや、二隻の小舟遙かに海上に漂ふを見たり、此に於て聲を限りて絶叫し、或は發砲したれども聞こえざる者の如し、一小岬角を廻れば、又一艘の船あるを認む、之れ其本船にして佛國の捕鯨船なり、兩人共に導かれて船内に止まる十一日間、頗る懇切なる介抱を受けたり、船長をロシターと云ひ衣服を給し、營養を加へ、漸く元氣恢復するを得て再び發足せり、

三週間にして一丘上に登りアルパニーの市街を望み、住民亦之れを探知し來て市内に伴ひ凱歌を唱へて歓迎せり、而して十一日間滞在して便船を求め、亞的來に向て出帆し、一年と二十六日を経過して漸く歸着せり、此遠征や大概荒蕪たる砂漠を経過し、單に之れを知るを得て地理上附加する所あるのみ、其實益に至ては何等効力少なしと雖ども、忍耐敢爲なる探検家として永く記憶すべき價值や充分なりと云ふ可し。

六、スタート。エーヤの歸還後、二年を経て、ダリング及びマレー、兩河を發見して著名なるキャプテン、スタートは探検の中心に遠征せんことをロード、スタンレーに建議して承認を受け、乃ち千八百四十四年五月、十六名の一隊を率ゐて、充分に用意を整へ、ダリング河岸より出立せり。

十三年前に已れの探検したる地方は、光景全く一變して、家畜群羊野に滿ち、恰も書圖の如し、此に於てか千八百二十八年に到着したる最終點を以て出立點となし、ブールは測量、ブラウンは醫術を司どり、而して又ジニー、マクデニアル、ステニアルト

は之れが參謀となれり、氏は此遠征に於て大に經驗を積み後年自ら大探險を爲すに至れり。

ダーリング河に沿ふて進み、レイドレー池畔に達し、カウンデラー湖を過ぎ、北方に轉ずれば地味礫礫にして、全然非常なる砂漠たり、而して數多の小丘起伏するを見て之れをスタンレー山脈と呼べり、現今バトリヤ山脈と稱する者則ち之れなり、スタートは一小丘上に登りて望見したれども、毫も將來望を屬すべし情況なし、然れども今や世界に於て一二を争ふプロトクン、ヒルの銀山は則ち氏の登りたる所にして、其足下には此の如き富源を藏蓄し、一大繁華なる市街を現出せんとは夢想にだも悟らざりしならん。

馬十一頭、牛三十頭、及び羊二百頭を卒ひて水の供給頗る困難なるが故に、自ら先發して充分なる池水或は河流等を發見して宿營を定め、而して後全隊を前進せしむ、從て行進甚だ遅々たり、時恰も冬季に際し池水到る處清水を湛えたり、然れどもグレイ山嶺に達したる時は、漸く炎暑を感じ、殊に千八百四十四年の夏は歴

史上最も酷熱を極めし年なり、加之砂漠に均しき地方に在ては流水悉く乾涸して、威炎土を焦し馬蹄は爲めに龜裂し、靴脚又燒爛して一行總て生色なし。

プールの漸く岩石間より湧出する細流を發見し、其涓々として間斷なきを確め該處に屯營して六ヶ月間滞在せり、然れども之れ恰も陷穽に均しく敢て移動すること能はず、此に於て四方に搜索を試み、漸く三十哩許にしてクーパー、スクリーキの河流あることを探知したれども、飢渴の爲めに達することを得ずして引返へしたる者あり、又其屯營する河流に沿ふて探檢せしに二十九哩にして砂漠中に消滅せり。

而して熱度は陰影に於て百三十度、炎天に在ては到底堪ゆべからず、ペンを使用せんとすれば墨汁忽ち乾きて一字だも書くこと能はず、爪及び櫛等に至る迄皆龜裂を生じ、金屬に觸れば指頭忽ち焦爛す、此に於て地下を掘りて穴居し、旱魃數ヶ月時に黒雲起り電光炯々として遠く雷鳴を聞くと雖ども一滴の雨を降らさず、一行悉く疲勞するに至り就中プールは壞血病に罹り日を追ふて衰弱せり、漸

く冬季に近附き降雨來りたるが故に、ブルを救はんが爲めに、半数を分ちて急ぎダーリング河畔に引返さすべきを命じたれども、行くこと少時ブルは絶命せるを以て、愁傷死骸を擔ふて歸り來り、之れを原野に葬り、傍らの樹木を削りて姓名を刻し以て墓標とせり。

**七、中央へ旅行。** 久しからずして連日降雨沛然として到り、給水爲めに充分なるを以て前進を開始し、西北に進むこと六十一哩にして宿營し、以て近傍を探検せり、スチユアルトはトレンス湖に向ひ、スタートは醫師ブラウンを伴ひ、北方ストルゼレツキ河に到れり、而して該河岸は最も幽絶にして大に愉快を覺ゆと雖ども更に北方に進むや、再び困難極まりなく丘陵崛起して、沼澤悉く鹹味なり、此に於て焦慮疾行すれば又忽ち一大砂漠に出て眼界總て石礫壘々たり、スタートは該處を呼んで岩石の砂漠と云ひ、速かに南方熱帯線に達せんとせり、然れども夏期既に迫まり尙ほ前進するは狂暴に均しく、スタートは天を仰て嘆息せり、今や漸く目的地を距る百五十哩の處に來て、空しく歸還するは終世の恨事之に過ぎ

ずと雖ども、如何にせん進めば則ち一死あるのみ此に於て、止むなく急行歸營し此行實に入週間を費して八百哩を旅行せり。

再びスチユアルトと共に出立してクーパー、スクリューの河流を發見し、該河を渡りて岩石の砂漠に入りたるを以て引返へしたれども、スタートは甚しく疲勞を來し遂に病床に横はれり、一行懇ろに介抱して荷車に載せ辛ふじて歸宅せりと雖も、金石をも礫かすが如き日光の爲めに視力を害し、遂に盲目となりて餘命を送り、而して又此報告に因て澳洲内地は大概砂漠たるの誤謬を傳ふるに至れり。

**八、ライカード。** アイラン、カニガムは新南威耳斯の北方及び俱因斯蘭の南部を探検せりと雖も、大陸の東北部に至ては千八百四十四年迄殆んど未知に屬し、同年初めて獨乙人にして少壯有爲の植物學者ルドウキッピ、ライカードに依て、此の豊饒なる地方を紹介せらるゝに至れり、一行五人悉徳尼より出立して鬱蒼たる森林豊草たる牧野を過ぎ、又數多の大河流を發見せり、其重なる者はフキッツロイ河にして枝流をドーン、アイザアツク及びマケンジと稱し、又ボーデキン河あり支流

多く、次にミッチェル河及ギルバート河等にして、遂にカーペンタリヤ湾に達せり、而して又フリンダース及びアルバート兩河を渡りたれども、該河は少しく以前にキヤプテン、ストーク英國軍艦にて其海岸を探検して既に之れを發見せり。

同灣を廻りてローバー河を發見し、アリゲター河に沿ふてファン、チーメンズ灣に到り、該所に於て一行を待受けたる一船に搭乗して悉德尼に歸り、盛なる歓迎を受けたり、蓋しライカードは此の如く豊肥廣大なる地方を明瞭ならしめたるが故に、悉德尼住民は千五百磅を贈金し、政府又千磅を與へて其勞に酬えたり。

ライカードは資性誠實熱心なるが故に、到底永く深洲大陸を未知の狀態に遺棄するに忍びず、千八百四十七年再び俱因斯蘭州の北部に探検を企てたり、然れども此計畫は遂に不成功に終はり、多數の羊及山羊等を伴ひたるが故に、速かに進行すること能はず、フキッツロイ河口を彷徨すること殆んど七ヶ月許にして引返へすの止を得ざるに至れり。

千八百四十八年第三回遠征隊を組織して大陸を東西に横切り、モントン灣を出

立して二ヶ年の見込を以てスワン河殖民地に達せんことを期し、一大遠征隊を卒めてコンダマイン河の支流コグリン河に達し、該地より悉德尼に在る知友に書状を送り、一行健全にして成効の見込充分なりと報導して、更に原野に出立せり而して其後絶えて何等の消息を聞かず、此に於て數年間其救援搜索を行ひたりと雖も、此一大遠征隊は全然喪失し、果して如何なる運命に終りたるか、杳として知ること能はず。

### 九、ミッチェル

ライカードの第一回遠征中、彼のグレネルグの發見者なるサー、トーマス、ミッチェルは俱因斯蘭州の探検を試みんとして遠征隊を組織せりと雖も、其

同一地方を通過する虞あるを以て、ライカードの歸還するを待て、北方に出立せり、而してダーリング河の支流にして重要なるカルゴア及びワレゴリ兩河を發見して西方に轉じ曠原地方を通過して沿々たる大河に出て、流れに沿ふて進むこと百五十哩、想ふに之れ大陸の中央より流出して印度洋に注ぐ、北方海岸の最大河流にして九年前ストークが其河口を發見したる河流ならんとし、假りにウキクト

リヤ河と呼稱せり、而して土人は之れを「バーク」と云ふ。

一〇、ケネデー。ミツチエルは此探検を測量助手たるエトマント、ケネデーに委ねて、自らは歸還せり、此に於てケネデーはウキトリヤ河の水流を溯り、更に百五十哩を進みたれども糧食の欠乏を來し引返さすの止むを得ざるに至れり、然れども該河は豫想に反しスタートの發見したるクーバース、クリーキの上流なることを確むることを得たり、該河は延長千二百哩、濠洲中央部に於ける最大河流にしてエーヤ湖に注ぐ者なり。

千八百四十八年ケネデーはヨーク岬半島の探検を命ぜられ、十二人より成る一隊を卒のロッキンガム灣に上陸してヨーク岬に達すれば、一帆船は該所に在て待受る手筈なりしが、此遠征は慘憺たる困難を蒙れり。

此熱帯地方は有刺の叢林鬱塞し、又沼澤多く行路頗る困難を極むるが故に、全員を行進せしむべき必要なしと認め、八名をウエイマス灣に駐め、歸途船にて立寄るべきを約し、ケネデーは歐人三名及び、ジャッケイと呼ぶ黒奴を伴ひ、一行勇氣を鼓

舞して叢林中を跋渉し、ヨーク岬を距る數哩の處に到りたるに、過て自ら銃丸の爲めに負傷したる者あるを以て、兩人を其看護に残し置き、自らジャッケイを隨へ、ヨーク岬に達し援助を求めんと欲し、行くこと少許、エスケープ河畔に達したる頃、土人の爲めに追尾せられ、暗黒なる人影出没するを以て、須臾も油断せず、八方に眼を配りて警戒したれども、運命の盡くる所、何處ともなく一箭飛び來て背面を貫き、而して忽ち土人の突撃し來るを見て、ジャッケイは發炮して之れに應戦し漸く退散せしむることを得たり。

ジャッケイは主人を抱き起せば、ケネデーは此忠實なる義僕に前途を指示し、書類等を托して瞑目せり、此に於てジャッケイは慟哭稍々久ふして斧を以て穴を穿ち、懇ろに死骸を葬り、遺書を携帯し匍匐して海岸に出で、直に疾行北進して岬頭に達し帆船内に救助せらるゝを得たり、蓋し此の遠征は探検史上最も酸鼻を極めたる者にして、負傷者及び看護兩名も其行方を知らず、察するに殺戮せられたるならん、而して又ウエイマス灣の八名も土人の來襲を受けて奮闘し、或は飢餓疾病

等の爲めに、其救援の達したるときは僅かに二名を殘せしのみなり。

一、グレンゴリー。千八百五十六年エー、シー、グレンゴリーは一小團隊を率ゐて、ライカードの搜索に赴き、其或は西北海岸に到りしならんと思意してキャンブリッジ灣よりウキトリア河畔を進み、スタート、クリーキと稱する河流を發見して丘陵山徑を辿り、遂に礮礮たる地方に出でたり、彼のスタートの艱難せし所の如く、加之恐るべき銳利なる刺葉を有する雜草簇生して馬脚を傷くること刀刃の如し、而して該河は遂に沼澤と化し、又鹹湖に注ぎて滅失せり、此に於て方向を轉じてウキトリア河の一大曲流の所に到り、更に東に向てカーペンタリヤ灣を距る五十哩の所を迂廻してモントン灣に歸着せりと雖も、ライカード一行の消息に就ては何等の得る所なし、要するに此の遠征は廣濶なる地方を探検して、ウキトリア及びローバー兩大河の流域を究むることを得たり。

第六章 (四)内地の探検及び發見 (自千八百六十年至千八百八十六年)

一、ポーク及びキルス。千八百六十年麥普尼府の一人商人内地探検の爲めに一千磅を醸金し、維多利學士會院は大陸貫通遠征の目的を以て三千四百磅の義捐を募り、維多利政府又六千磅を支出し、更に三千磅を費して亞刺比亞より駱駝廿六頭を輸入せり。

學士會院は委員を設けて熱心に之れが計劃を爲し、ロバート、オハラ、ポークを推して總指揮官となし、ランデルを第二指揮官とし、駱駝の取扱に印度人三名を雇ひ、而して又ダブルユー、ジェー、キルスは少壯熟練なる天文學者にして測量器械等の取締を爲し、専ら學術上の研究を行ひ、其他學者二名、助手十一名を伴ひ、馬廿八頭を以て行李の運搬をなさしむ。

千八百六十年八月廿日麥普尼府「ローヤル」公園より出立し、其狀況頗る美觀なり、市長は簡單に祝詞を述べて速かに成効歸府せんことを祈り、ポークは馬上先頭に在て歡聲沸くが如くなる裡に徐々前進せり。

マランビ、デー河に至る迄は殖民地方にして何等の記すべきことなく、該河畔に到

て一行中に争論を惹起し、ポークは部長の一人を免じ、ランドルは辭職せり、之れ失敗の端緒にして、ランドルに代り駱駝を監督する者の人選を誤れり、ポークはライトなる者に出遇て、互に意氣相投合し、忽ち親友となり、遂に遠征に於ける重大なる職務を委任せり、之れ寛大能く人を容るゝの度量に依ると雖も、抑も又甚しき鹿忽と云はざる可らず。

マランビッチーを出立して、ダリリング河に沿ふて、メニングーに達す、之れ十六年前スタートの探検せし所なり、ポークは此處に半數を駐めて、ライトに附し、後續隊として來るべきを命じ、自らキルスと助手六名、及び半數の駱駝及馬を卒る慘憺たる地方を經由せり、全然不毛なるに非らずと雖も、有毒なる豆類の野生する者ありて爲めに大に馬匹を害せり。

疾軀急行、漸くクーパーズ、クリッキーの河岸に達し、辛ふじて水草を求むるを得たり、此處に屯營を設け暫らくライトの來るを待受けたりと雖も、遂に來らず、而して休養に依て人馬共に恢復したるを以て、ポークは頻りに焦慮して、既に濠洲中心

に近附きしが故に、忽ちカーペンタリヤ灣迄竊進せんと決し、ブラヘーなる者に助手三名、駱駝六頭、馬十二頭を殘し、命じて曰、「三ヶ月間此處に滞在すべく、而して其期間内に余等一行歸り來らざれば、死せし者と見做して、麥普尼に歸還すべし」と告げ、十二月十六日、ポーク及びキルスはキング及びグレイと稱する二人を隨へ、駱駝六頭、馬一頭及び三ヶ月間の糧食を運搬して旅程に上れり。

二、カーペンタリヤ灣へ急行 沿々たるクーパーズ、クリッキーの流れに沿ふて進み、エーヤ、クリッキーと稱する細流に出て、給水充分なるを以て、前進して東方に轉じ、更に正北に向ひ百四十度の經度に沿ふて森林を通過し、水草兩ながら充分なるを得たり。

クーパーズ、クリッキーを出立せしより六週間を経て一河の北に向て流るゝを發見せり、之れをコロンカリーと命ぜり、流れに沿ふて進み、遂に一大河流に出づ、河岸樹木鬱蒼として、椰子樹等多く、果實の熟するを見たり、之れ必らずカーペンタリヤ灣に注ぐ河流なるべきを想像し、一層の勇氣を鼓舞せり、然れとも其携帯する糧



食は僅に三ヶ月に充て、而して己に半数以上を經過せしと雖も、尙ほ海岸を距ること百五十哩あり、此に於てポークは大に焦慮して、驀進し、爲めに駱駝は遂次疲勞せるを以て、已むことを得ず、グレイ及びキング兩人を殘し、一頭の馬に少許の糧食を運搬せしめて、キルスと共に徒歩して發足せり、然るに不幸沼澤に陥り、馬は歩むこと能はざるを以て、之れを遺棄して進み、兩人漸くカーペンタリヤ灣の一小江に達することを得たり、而して其沿ふて來りたる河流は千八百四十二年 ストリークスの發見したるフリンダース河なることを知れり。

更に進んで海洋を目撃せんと欲せしも、之れが爲めには尙ほ兩三日を要すべく、而して糧食は既に盡きたるを以て直に踵を廻らすべき窮境に迫まり、キング及びグレイの滯留する所に達したるときは既に全く飢えたり、ポークは一頭の蛇を食せり、之れ一大過失にして忽ち悪感を催ふし、遂に歩行も自由ならざる重態に陥れり、然れども幸に遺棄したる駱駝及び馬は恢復せしを以て之れに安架を設け、ポークを載せて一行漸く歸途に就けり。

而して又一行の者を見るに、炎熱燒くが如き熱帶地方を旅行すること毎週百四十哩、爲めに大に健康を害し、就中グレイは病に罹り、一夕樹蔭に憩ひ、麥粉を水に攪拌して之れを吸りつゝあるを、ポークは見て以て糧食を盜む者なりとし、驀然一撃を加へたり、憐むべし爾來甚しく衰弱するに至れり。

三月末に至ては糧食全く盡き、駱駝一頭を殺し肉を乾して貯ひ、四月の初めに及んで馬を屠れり、此の時に至りグレイ遂に倒れて進むこと能はず、ポークは之れを作病なりとし捨て去る、然れどもキルスは之れを忍びずして扶けて少くこと一兩日にして絶息せしを以て原野に葬れり。

ポークも今は大に惘憊し従て己れの性急なりしを悔むに至れり、一行僅かに三人悉く疲勞の極に達し、四月廿一日踏跟として漸く屯營に辿り着けり、之れ實に四箇月半を經過せり。

時將に夕陽西に傾がんとし、四面閑として人影なし、忽ち書信を發見して之れを檢すれば其朝「グラヘー」等は出立して僅かに七時間に過ぎざるなり、「一行三人陸

然直に追蹶する勇氣なく、徒らに長大息するのみ、不圖傍らの樹皮を削り、堀れと刻しあるを見て、其樹下を堀返へしたるに少許の糧食を貯へたり。

ブラヘーは命令の期間よりも一ヶ月半余り滞在したれども、ライトの來るべき模様もなく、又糧食次第に減じ頗る不安なるが故に退去せしなり、彼れライトなる者は此遠征の蠶毒にして、永くメニンデーに在て遊逸に耽り、ブラヘーはダーリングに達する中途に於て彼れの來るに際會せり、豈甚しき懈怠と云はざるべけんや。

### 三、憊。

ボーク、キルス及びキングの三人は、夕飯を喫して漸く蘇生の思をなし、二日間休養せしも前途安危目睫の間に迫まり、糧食僅少にして日夜兼行するも辛ふしてダーリング河畔に達するに過ぎざるなり、乃ち額を鳩めて熟議を凝らし、ボークは亞的來に向はんとし、左すれば途中絶望山あり嘗てエーヤの窮塞せし所なりと雖も、當時は既に大牧場ありて百五十哩を距るに過ぎざるべしと思考せり、而してキルスは之れに反對して曰く、メニンデー迄は三百五十哩ありと雖

も、一度通行したる道筋なれば安心にして、又水に欠乏せず宜しく之れに依る可しと主張せり、然れどもボークは此議を斥けて、一行絶望山に向て出立し、クーパー、ス、クローキに沿ふて進むこと數哩、非常に險惡なる地方に出で、一頭の駱駝は疲勞せしを以て屠りて肉を乾かし、更に河流を進めば遂に一大水澤に出で、河流は此處に注ぎて消滅せり、而して暫時休養するに糧食既に盡き衣服は破れて襤褸たり、此に至て只々絶望山に達する一途あるのみ、最後一頭の駱駝を屠り、ボーク及びキングは止まりて、其肉を日光に曝らして乾燥する間に、キルスは單身絶望山の搜索に赴けり、然れども不知案内の荒野を彷徨して空しく歸來りたるを以て一行共に出立し如何にもして絶望山に達せんとせり、身體綿の如く疲れて疾行すること能はず、日夜恐るべき不毛の曠野を通過して際限なく、一小丘陵だも眼光に影じ來らず、遂に断念せり、之れ該山を距る五十哩の所なり、尙ほ僅か前進せば地平線上其山嶺を望見せしならん、豈不運の極みならずや、  
踵を回らしてクーパー、ス、クローキの水草を逐ふて辿り、僅かに一日の糧食を餘す

に至り、一行座して嘆息するのみ、ポーク曰く、聞くクイバース、クリッキの土人は、「ナード」と稱する草木の實を食して生活すと、果して然らば土人を尋ねて之れを索むるに如かずと、乃ちポークはキングと共に出立して適々土人に遭遇し、大に款待せられて其方法を得て歸來れり、之れ一種野生の草根を掘りて其粒子を採收するなり、然れども之れ多少熟練を要することなるが故に、終日を費して漸く二食に足らず、晝間は之れを摘み、夜に入りて之れを洗ひ焦りて粉末となし、食用するに劣等なる土人には適すべきも、嘔吐を催ふして毫も營養の効なし。

斯くして屯營を距る數哩、該河の下岸に漂泊せり、而して一方ブラヘーは途中ライトに出會し、共に再び屯營に歸來りたれども何等の消息なきを以て斷念して引返せり、之れポーク等の立去りたる兩三日の後なりき。

ポークは又救援の來たらんかを考へ、キルスを赴かしめたり、此に於てキルスは單身兩三日を費し來て搜索したれども何等の形跡を認めず、徒らに滞在するも無益なるを慮り、一行と運命を共にせんと欲して引返えし、途上一夕土人の廢棄

したる茅舎内に入て、魚骨を發見して之れを舐り、翌日池水に死魚の浮ぶを獲て無上の珍味とせり、然れども斯かる不時一片の食は毫も飢を凌ぐに足らず、偶々土人に出遇ひたるに甚だ親切にして一人は旅囊を擔ひ、他は衰弱せる身體を扶けて居所に伴ひ、直に少許の食物を供し、更に多くの魚類を焼きて饗應せり、四日間滞在して一行を連來らんとして再び尋ね來りたるときは、彼等既に去て影を止めず、已むことを得ず、一行三人勇氣を鼓舞して進みたれども、衰弱甚しく今は一步も歩むこと能はざるに至り、終日淹留して、「ナード」の實を拾ひ、又は時に鳥を撃て食用せりと雖も、徒らに苦痛を長むるに過ぎず。

キルスは旅行中細大漏さず細に日誌を認めたれども、最早此時に至ては記事も甚だ簡略となり、非常に誤字をすら用ゆるに至れり、蓋し心緒亂れたるも亦怪むに足らざるなり、而して其記に曰く如何にして此の如く四肢の弱きか自ら了解すること能はず、全く感覺を失ひ水に浸すも回復せず、遂に匍匐することすら能はざるに至れり、若し救援來たらざれば最早二週間以上は生活すること覺束な

し云々。

四、ボーク及ひキルスの臨終。今やボークは土人を尋ねて救を乞ふの一機會あるのみとして、キングを伴ひ出立せり、而してキルスを留置するに忍びずと雖も、詮方なく舍内に安臥せしめて、枕邊に入日間の「チード」を供へ、別れに臨んでキルスは父に宛てたる一通の書状と時計をボークに托し、互に手を握て、袂別を惜み、血涙爲めに滂沱たり、無慘なる哉。キルスは寂寥たる原野に唯獨り何人も其末期を知る者なし。

ボーク及ひキングは初めは稍々遠距離に歩行せしも、翌日は二哩ならずしてボークは遂に倒れて又立つこと能はず、キングは百方慰安せしと雖も、其詮なく自ら一小叢林に潜入して足を延ばし、須臾にして動くこと能はざるに至り、時計と日誌をキングに渡して曰く、能ふべくんば之れを麥普尼の知友に傳へよ、而して余の全く絶命する迄傍に在て、肯て死骸を埋むること勿れと、右手に拳銃を握り翌朝八時涙を吞んで長謝せり。

此に於てキングは惘然暫らく四方に漂泊して土人の荒廢したる茅舎を發見し、内に土人の遺失したる者ならんか幸ひ一袋の「チード」を拾得せり、優に二週間を支ふるに足る、依て忽ちキルスの所に引返へしたれども、悲の哉、既に幽明界を異にして空しく遺骸を葬りたるのみ。

再び搜索して一種族に會し、銃を以て鳥を撃ち會長を驚かし、其歡心を得て大に敬愛せらるゝに至り、一日彼等を卒めてボークを吊ひ、然れども遺命に依て埋葬せず、單に枝葉を累ねて之れを隠蔽せり。

#### 五、救援隊

ライト及ひブラヘー等の維多利に歸りたるは、ボーク等一行三人

がクイバース河畔を去りたる時より五ヶ月の後、此に於て全澳洲殖民地傳へて之れを知り、救援隊編成に同情を表し、維多利州先づ第一となり、學士會院はエド、ダブルユー、ホーウキットに一小隊を卒めてクイバース河畔を搜索せしめ、俱因斯蘭は五百磅を醸出し、カーペンタリヤ灣を搜索せしめんが爲めに、ランドスポローを主將として、瀛船「ウキクトリヤ」號に搭乗せしめて、一隊を送り、直に又「アルバ」號を尾

行せしめたり、蓋しポーク等は該地方に於て、土人と共に棲息せしやも圖られずと想像せしが所以なり、而して又ウオルカーはロッキヤンプトンよりカーペンタリヤ灣に赴きフリゲダース河に達するを得たり、此地は則ちポーク及びキルスの通過せし所なれども、當時其形跡を止めず、而してマツキンレーは南薩州より派遣せられ、トレンス湖の方面を指してクーパーズ河畔に達せり。

此の如く各州舉て遠征隊を派出し熱心搜索に従事せしが、遂に成功せしは則ちホークキットの一隊なり、彼の屯營よりクーパーズ河を下りて其河流に沿ひ、駱駝の足跡を認め、之れを追ふてポーク及びキルスの死せし地方に出で、多數の土人に會し導かれて其茅舎に到れば、キングは見る影もなく憔悴甚しく言語を發すること能はず、一兩日營養を加へ漸く回復するを待て、ホークキットは先づキルスを吊ひ贖經して懇ろに埋葬し更に又彼叢林中を檢分すれば、ポークは既に白骨と化し、傍らに鑄びたる拳銃あり、此に於て英國旗を以て包み之れが爲めに墳墓を築けり。

三日を経て土人を集め、小刀、斧、頸飾、鏡等其他砂糖五十斤を一族に分配して、キングを介抱せし厚意に報むたるを以て、黒奴は欣喜雀躍せり。

ホークキットのキングを伴ひて歸るや、此悲惨なる事實は四方に傳播し、維多利政府は更に一隊を派遣して、ポーク及びキルスの遺骨を麥普尼府に持來らしめ、國葬を以て之れを葬り、全殖民地又舉りて吊意を表し、後年同府公園に銅像を建て永遠に傳へて紀念とせり。

此遠征や、終局の功を全ふすること能はざりしと雖も、却て之れが爲めに各方面より一時に救援隊を派して、探検搜索を行ひたるが故に、從て内地を詳かにするの動機となりたり、故に之れを以て薩州探検の中心となす。

六、マクヂユアルド、スチユアート。ポーク及びキルスは初めて薩州大陸を貫通したる人なり、然れども此冒險を企てたる者前後決して少きに非ず、而して何人も成功すること能はざりしが、茲に嘗てスタートと共に、岩石の砂漠地方に遠征を試みたるスチユアルト其人ありて此目的を完成することを得たり。

スチユアルトは千八百五十九年牧畜家の委嘱を受けて南濠州に於て適當なる殖民地を搜索せんが爲めに遠征を企てエーヤ湖及びトリレンス湖に到りて其通路を發見し、而してエーヤの窮塞せし範圍を越えて深く不毛に入り、却て美麗なる牧野を發見することを得たり。

翌年南濠政府は濠洲大陸を南北に横斷通過したる先鞭者に、貳千磅の報酬を懸賞せり、此に於てスチユアルトは二名を隨へ亞的來を出立して北方ファン、デーメン海に向ひ、千八百四十四年スタートの達したる所よりも遙か内地に入り、海岸を距る四百哩の處に於て土人の抵抗に出遇ひ、止むなく引返したり、然れども大陸の中央に達することを得て一小山嶺を發見し、自ら名付て中央スチユアルト山と稱せり。

翌年再び同一通路を経由して、殆んどファン、デーメン海を距る二百五十哩の處に到り、糧食の欠乏を來し引返せり、而してボーク及びキルスは恰もカーペンタリヤ海に向てクーパーズ河畔を出立せんとせしとき、此報告に接せりと云ふ。

千八百六十二年スチユアルトは第三回遠征を試み前通路を経て名狀すべからざる辛酸を甜め、遂にファン、デーメン海に到着することを得たり、而して此成功を祝し凱旋して亞的來に入るの當日、恰もホークキットの一隊はボーク及びキルスの遺骸を推して、麥普尼に歸らんとする途次、同地に立寄り、之れに依て觀ればスチユアルトは千八百六十二年七月ファン、デーメン海に到り、ボーク等は既に千八百六十一年二月カーペンタリヤ海に達せり、然れどもスチユアルトは再三之れを試みて刻苦慘憺遂に成功したる者なるが故に、南濠政府は之れに懸賞を與へ、世人も亦た決して之れを異とせざるなり。

七、ワル、パルトン。千八百七十二年スチユアルトの通路に大陸電信線を架設せり、從て接續發信所數多あるが故に南北大陸を貫通するは甚だ容易なるに至れり、此に於て東西横斷旅行の冒險を企つる者あるに至り、千八百七十三年ワル、パルトン初めて之れを成効せり、自ら己れの男子兩名を伴ひ、駱駝十七頭を卒ゆるが爲めに亞非利加人二名を雇ひ、南方熱帶線に近き電信局アリス、スプリングよ

り出立せり。

アリス、スプリング附近は綠蔭幽絶なりと雖も、數日ならずして駱駝の助けなくんば、到底旅行し得べからざる不毛の地方に出て、四百哩を進むや全然赤裸礮確と變し、スタート河の水流此處に至て滅失せり、之れ千八百五十六年ダレゴリーの引返へしたる所なり、而して困難言語に絶し十七頭の駱駝は僅かに二頭となり、萬死を冒して漸く西北海岸オークオツア河に達するを得て、亞的來に歸還したるときは將に一眼を失へり。

ハ、キルス及びフホレスト。千八百七十三年の末に當りて、ギルスと稱する維多利出生の一青年、大陸電線の中央より西薩洲に向て出立し、海岸に到る半途にして引返し、其後三年を経て再び之れを企て、水の欠乏に依て非常に困難せしも遂に成効せり、而して土人と奮闘せしこと一再ならざりしと云ふ。

千八百七十四年西薩政府の測量技師フォレストはシエルトンより出立して、シャーク灣の南に至り更に東方に向て千二百哩を旅行して電信線に到着せり、而して

亞的來に入るや群集歡呼凱旋を祝せり。

フォレストは未だ青年なりしも、頗る敏捷熟練なる探検家にして、常に輕装一兩名を伴ひ能く長途の旅行を成効して稱贊を博せり。

其兄弟アレキザンダー、フォレスト及び數多の、フレンツ裁民又屢々各方面の探検を行ひ、多く優良なる土地を發見せり、而して既に探検したる地方を見るに、過半は牧畜に適するも他は全然不毛礮確なる砂漠たり、然れども前掲幾多の義勇ある探検家の在る有り、其他ジャードン兄弟、アーネスト、ファンエック、ゴッス及びバロン、ファン、ムユラー等相次で生命を賭して冒險を行ひ、爲めに薩洲全土殆んど探検せらるゝに至り、僅かに南薩の小部分、及び西薩の中央部のみは未だ足跡到らざる所ありとす。

### 第三編 金鑛發見史

#### 第七章 (一) 新南威耳斯州

一、千八百五十一年の重要 薩洲に在て千八百五十一年は特書すべき

事件多く、數年渴望したる憲法は英國議會の協賛を得て批准せられ、此に於て達  
 斯馬尼、ポート、フィリップ、南瀛州及び西瀛州も亦單に本國官權に依てのみ左右せ  
 らるゝ太守の專權に服従すべきに非ず、母州新南威耳斯の如く自治の威信を保  
 ち、上院議員の三分の二を民選して法律を制定し、而して公共の利害に關し須ら  
 く太守と商量することを得、更に同年七月一日ポート、フィリップは分離して維多利  
 なる一州を形造れり。

同年特に重要な事件はバサースト附近に於ける金鑛の發見にして、其結果忽ち  
 殖民地の光景を一變して、爾後數年間瀛洲の歴史は金鑛發見談を以て充たさる  
 に至れり。

二、金鑛發見の風説。 夙にブル山は金を産出する地質なりとの説傳

はり、既にマコーリー太守時代に囚徒が金を發見せりと云へり。

千八百四十年波蘭の貴族ストルゼンキはコシアスコ山嶺を旅行して金の存在  
 を認め、たれども、太守は之れを公にすることを禁ぜり、蓋し徒らに殖民地を激動

し、殊に囚徒を感亂せしむ可き虞あるを以てなり、而してストルゼンキは之れを  
 諾したれども、學者は到底黙過せず、就中宣教師クラークは學術に身を委ね、瀛洲  
 地質學の大斗として尊敬せらるゝ人なるが故に、悉德尼に於て標本を示し、ブル  
 山は確かに大金鑛を包藏すべきことの意見を吐露せり。

ストルゼンキは又標本を倫敦に送り、千八百四十四年英國大學者サー、ローデリッ  
 ク、マーチソンは英國地學協會に於て意見を開陳し、全然クラークと同一の所説を  
 述べ、越えて千八百四十六年に至り再び該問題を論じ、烏拉山の岩石と比較對照  
 して必然豊富なる貴金屬の存在を主張せり、然れども千八百五十一年に至る迄  
 は、甲論乙駁徒らに議論を闘はすのみ、未だ自ら時と金とを費して其實否を確め  
 んとする者なかりき。

三、エドワード、ハーグレイヴス。 此時恰も北米加里福尼に金鑛發見の報傳  
 はりたるを以てバサーストの殖民ハーグレイヴスなる者あり、一獲千金の目的を以  
 てサクラメントに渡航して金鑛採收に従事せしも、不運にして毫も獲る所なく、空



しく時日を費せり、然れども金銀の發見と其採收方法は實驗を積みたるが故に、  
 澳洲に歸りて之れを試み、遂に能く目的を達して巨萬の富と名譽とを獲得する  
 に至れり。

初め加里福尼金坑に在るや、其周圍の景色及び地質岩石の状態等を見て圖らず  
 十三年前にブル山の麓谷を渡りたるときの記憶を追想し、恰も其勢驍たるの  
 威を生じ、バサースー附近の丘陵間を流る、溪水の光景等を想起しては、歸心矢の  
 如く、忽倏便船を求めて歸途に就き、悉德尼に着するや、一鞭馬を馳せてブル山  
 に到り、千八百五十一年三月十一日目的地を距る里許にして宿泊し、翌朝未明馬  
 に跨り、鋤及び鉄葉盤を携へ、朝露深く閉し、芳香馥郁たる護謨樹の森林に分け入  
 り、一二時にして記憶の地點に達せり、之れ降雨來ればサムマー、ヒル河に注ぐ細流  
 の乾涸せし麓谷たり。

直に盟に砂土を掬ひて水に浸し、乃ち加州に於て實驗したるが如く、之れを振動  
 すれば砂土は流出して金は沈澱するなり、忽ち粲然たる斑點を現はし、僅少にし

て何等の價值なしと雖も、僅かに周圍に財寶の存在するを證據立つるを得たり。  
 近傍麓谷を探検すること數日、充分に之れを確めて悉德尼に歸り、深く秘して語  
 らず、四月三日書を殖民次官に提出して曰く、若し政府にして五百磅を附與せば、  
 當州に在て多大なる金銀産出地を指示すべしと、而して次官は答て曰く、豫め報  
 酬を與ふること能はずと雖も、其場所を指示せば結果に應じて報酬すべしと、彼  
 は之れを承諾して殖民省地質學者スタッチブリーと共にサムマー、ヒル河に赴き、五月  
 八日試堀を行ひ、金粒數「オンス」を得たり。

十三日三十磅の價值ある金塊を發見せり、此にスタッチブリーは其確實なるを報告  
 せしを以て、五日を出でずして該麓谷に群集し來る者四百餘人、流れに臨みて列  
 を連ねること殆んど一哩、各自盥を手にし、金を洗ふに忙はしく、往々二百乃至五  
 百磅の金塊を獲たるものありて、一週間の後には一千餘人に達せり。

**四、金坑に突進。** 此に於て殖民地到る處甚しく金銀熱の激昂を來し、職工  
 は業を罷め、牧畜家は群羊を見捨て、商人は店頭を閉して突進し、皆忽倏の間に一

幾千金を僥倖せんとせり、然れども採金の事たる決して容易なるに非らず、大概數週乃至數ヶ月の辛勞を要する者なり、此に於て大概倦怠して歸る者多く、從て途上不平を嘯々する者踵を接し、遂にはハイグレープスに欺かれたりと憤激し、萬一其手裡に陥るときは生命も危かるべき情況なるを以て、彼は常に假裝して其迫害を避けたりと云ふ、然れども新南威耳斯政府は約に依り最初五百磅、後年一萬磅を附與し、隣州維多利又二千三百八十一磅を贈與せり、其他自己の採收したる金鑽等を合すれば、ハイグレープスは慥かに艱苦に値する報酬を得たりと云ふべし。

同年七月、バサースト近傍に於ける一牧場の主人、適々晝飯の食卓に在りしとき、家僕と爲せる土人、遽しく入り來て手眞似と共に半ば訥して曰く、御主人よ、白人は小なる者、私は大なる者を見出せりと、忽ち食匙を投じ、馬車を飛ばして現場に至れば、重量百二十英斤許なる金塊を指示せり、之れを馬車に載するに斧を以て二つに打破りて持歸り、後四千磅に賣却せりと云ふ、此報に接するや再びバサースト

街道は絡繹織るが如く、以前に優る十倍の群集を爲すに至れり。

**五、取締規則の實施** 金坑地方人民漸く群集するに至るや、政府は之れが爲めに取締法の必要を認め、先づ委員を設け、法官一人及び巡查若干名を附して、金塊の輸送を護衛せしめ、又採金に従事せんと欲する者は、豫め許可を受け、一月三十志の手數料を納むることとせり、而して順次新坑發見して絶えず群集を吸引するが故に、市街は寂寞を極め、殊に隣州は皆大に人口を減少するに至り、チエーロン河岸最も好景を呈し、一時は該河岸に一萬人以上の群集を現はし、其他オンキーマンブレイドウッド、及びバール等又甚だ盛運を極め、僥倖なる者往々驚くべし、金塊を發見せり。

## 第八章 (二) 維多利州

**一、維多利州の金鑽發見** 千八百五十一年、ラトロープ太守の職に就くや、其管轄する所僅かに一小社會に過ぎず、然るに金坑を追ふて隣州に移住する者

日に増加し、爲めに自州の成立を危くする状況を呈したるを以て、麥普尼市民は深く之れを憂へ、同年六月九日金礦發見委員なる者を組織し、麥普尼を距る二百哩以内の地に於て、有利なる金坑を發見して第一に報告する者には、二百磅の報酬を與へんことを懸賞せり、此に於て搜索を試むる者多きを加へ、遂にブレンチー山脈に金の存在を認めたりと傳ふる者あるより、該山間に入て搜索する者二百名に達したれども、何等の効果を爲るること能はずして、長日月を經過せしが、偶々エスモンドと稱する加州より來たる坑夫之れを成効せり。

彼はハイグレブスの如く實際の經檢を有し、一見地質を辨別するが故に、クルー地方を最も適所なりとし之れが搜索を行ひ、遂に岩石に附着して燦爛たる金礦を發見せり其報傳はるや忽ち數百名雲集し來れり、而して又殆んど同時にヤラ河の上流數哩、アングーソン河に於て六人の一團金礦を發見せり、此に於て實際何れが第一發見者たるべきかは、頗る判斷に苦しむに至りたれども、後年多利議會は彼に一千磅を贈呈せり。

二、パロ、ット 同年八月十日のシーロン新聞は、ブニョンに於て金礦發見せることを記載せり、此に於て牧畜地方たる該傾斜面は忽ち靜寂を破て、搜索團體集合し來り、尖銳或は鋤を以て隨所を穿ち、盛んに財寶を索めたれども豫想の如くならず、漸次北方クルーの方面に進めり、而してクルーに於ても同しく失望せり、如何となれば該地方に於ける金は大概岩石中に混合附着して、當時未だ此種の採掘を行ふべき方法備はらざるが故に、所謂寶の山に入て手を空しくするの概在り、漸次ブニョンの方向に移動し來りたるを以て、兩者ヤラ河の傾斜に於て遭遇せり、之れ一小洞流の在る所にして則ち有名なるパロ、ット金坑之れなり。

先づ河流灣曲をなす處に於て採掘に従事せり、之れをゴールデン、ポイントと稱す、而して各自一日二十磅乃至四十磅を獲るは容易にして、群集忽ち増加し各自適所を選びて採掘區を定めて採掘し、漸く其砂層の底に達するや、白堊にして獲る所なきが故に放棄せり。

然るにキヤヴァナと呼ぶ一坑夫あり、他人の放棄したる採礦區に入り、忍耐して白堊を掘下げたるに、圓らざりき粒々たる砂金の堆積するを發見せり、要するに之れ過去數世期河底に欠陥を生ずるや、山間より流出し來れる金は自然に沈澱して、該坑穴内に堆積するに至りたる者なり、彼等は此坑穴を袋と稱し、往々數千磅を包藏する者あり。

全採礦區忽ち一齊に採掘を開始し、數呎を掘下ぐるや各自意外の僥倖を博し、一ヶ月ならずしてバラントは世界に於て最も豊富なる金坑と稱せらるゝに至れり、而して十月に至ては一萬人に達し、土饅頭壘々として其中央に縦坑を設け、二人坑内に入て土を掘り、他は之れを河畔に送て洗滌す、順次分業を以て之れを行ひ、洗槽臺無慮一千二百と稱す。

三、アレキサンダー山 九月に於てクルーシンの東北殆んど四十哩許アレキサンダー山に到りたる一團體、カツスルメインの近傍に於て金の産出すべき地質を發見せり、此に於てバラント、麥普尼及びシロロン等より突進し來り、十月には其

數八千人、十一月に至ては二萬五千人と稱す、而して三噸の金は麥普尼に輸送するが爲めに委員の幕營内に堆積せり。

四、サンダースト 然れども一二週間にして前陳二箇所の名聲は一時ベンチゴ河畔金礦發見の爲めに蔽はるゝに至れり、當初最も豊滿なるが如く見えたるが故に、一二ヶ月にして四萬人に達せり、則ちサンダースト市の發生したる所以なり。

千八百五十二年に於けるブニヨン及びベンチゴ河一帶の地方に在る人員は七萬人を降らざりき、而して悉く金礦採掘の同一業務に従事し、麥普尼及びシロロンは全然寂寞を極め、學者を問はず、農工商何れも皆之れが爲めに熱中し、海員は船舶を去り、巡查獄丁亦然り、從て賃銀暴騰して四五倍を出すも應ずる者なし。

五、金礦發見の結果 而して瀛洲金礦發見の報歐洲に傳はるや、千八百五十二年の中頃舳艫相合せて各國人を滿載し來り、上陸するや直に金坑に馳せ、同年移住し來りたる者殆んど十萬人、翌年更に九萬二千人を増加し、維多利州は

人口最も稠密となり、次て二年間に到着したる者十五萬人、之れを合して千八百五十六年には人口四十萬に達し、千八百五十年の殆んど五倍なり、而して千八百五十二年の採金高百七十四噸、價格千四百萬磅にして爾來十年間維多利より輸出せし金は壹億に達せり。

特に記載すべき大金塊は千八百五十三年に發見して「サラ、サンズ」と命したる者、價格大凡六千五百磅、千八百五十七年に發見せる「フランシエー、パークレー」價格七千磅、翌年「ウエルカム、ナグット」と命ぜし一塊を發見して一萬五百磅に賣買し、千八百六十九年「ウエルカム、ストレンジャー」を發掘せり、之れ前者に比し稍々大にして之れを最大の金塊なりとす。

### 第九章 (三) 俱因斯蘭州

一、金鑛發見の虚報 千八百五十八年北方フキッロイ河畔に於て金鑛發見の報傳はるや、船舶一時にクッペル灣に輻湊し來り、甲板立錐の地なく滿載して一

同上陸するや、該河の上流殆んど六七十里の所キヤヌーナと稱する所に突進し群集忽ち一萬五千人に達せり、然れども金産出地は甚狹隘なりしが故に、所持金を消費し盡したる者は全く窮境に陥り、加之斯の如く大多數急に遠隔の地に到て、一獲千金は空想たりしに過ぎずして、一度糧食盡くるや更に之れを求むるに途なく、宛然飢餓の慘狀を呈するに至れり。

新南威耳斯及び維多利兩州政府は船舶を派遣して歸還せしめたりと雖ども、飢餓の極、止を得ず、河岸地味肥沃なる處を選んで、開墾を爲し耕作を施したる者は、去るに忍びずして遂に土着するに至れり、之れ現今繁盛なるロッキヤムプトン市の起源なり。

二、ギムバイ 然れども千八百六十七年に至り遂に一大成效を奏せり、則ち俱州政府は利益ある金坑發見者に二百磅より一千磅の懸賞をなせしを以て、兩三年間に續々開發するに至れり。

千八百六十七年の末葉ナツシと稱する者、漫然彷徨してプリズベーンを距る百三

十哩ギムバイと稱する地方に於て、圖らず一大金坑を發見せり。

彼は暫らく秘して出得來る限り獨り自ら金を採收し、一兩日にして數百磅を獲たり、而して旅人の近附く者あれば叢林中に隠れ、人影なきを見探堀せり、然れども到底發見の避く可らざる所にして、却て先鞭を輸せられんことを恐れ、其近傍マリホローに到て此發見を報告して懸賞を得たり、忽ち群集し來て附近を採堀するに頗る豊盈にして殆んど四千磅は表面上に於て拾ひ取る事を得たりと云ふ。

三、パルマー河畔

パルマー河はミッチエル河の支流にして其北方に於て又

豊富なる金坑を發見せり、而して該地方は炎熱甚しく、加之土人來襲の危険ありしにも係はらず、群集し來て採金に従事し、又數千の支那人移住し來れり、土人は之れを惡むこと甚しく見るや忽ち殺戮せり。

四、モルガン山金坑

濠洲に於ける金坑中最も著名なるはモルガン山金坑

にしてロッキヤムプトンを距ること遠からず、千八百五十八年突進して飢饉に苦しみ、遂に土着せし一少壯牧畜家あり、俱州政府より六百四十「エーカー」の土地を購

入せりと雖ども、其地所たる小丘上に在りて礫确不毛到底耕作すべからざるを以て、モルガンと呼ぶ兄弟三人に六百四十磅にて賣却せり、然るに僥倖なるはモルガン兄弟にして其岩石多く金を含蓄することを發見し、車一臺の岩石を碎きて、容易に二三十磅許の金を得るを以て、直に採堀に着手せしに豊富驚くべく遂に世界最大の金坑主となり、其後一兩年にして八百萬磅にて賣却せり、而して實際は少くも其二倍の價値ありと云ふ。

要するに金は恰も世界の花の如き者にして鐵は之れ其果實たり、而して金鑛發見に依て移民を誘導して基礎を造り、漸次開拓して鉄に着手する時代に達せば、眞個發達の域に達したるものとす、濠洲は殖民の當初經營頗る困難を極め一時殆んど悲境に沈淪せしが、圖らざりき此天與の賜物ありて劇かに面目を一變し、則ち現今の繁盛を致すに至れり。

第四編 各州發達史

第十章 新南威耳斯州

(一) 悉德尼罪囚移住地 (自千七百八十八年至千八百八十八年)

一、ボタニー灣 キヤプテン、クックの報告は、當時遠洲に關する世上の所信を變  
 更せり、抑もダンビヤの時より遠洲全土悉く慘憺たる砂漠ならんと想像せり、然  
 るにクックの報告は全然之れに反し、殊に東方沿岸は山水明眉、地味頗る肥沃にし  
 て充分見込ある國柄なりとせり、而してクック歸國の當時、恰も英國は罪囚の處  
 置に關して非常に困難を感ずるに至れり、其は千七百七十六年北米合衆國は獨  
 立を宣言せしを以て、従前の如くヴァージニアに罪囚を輸送すること能はず、從て  
 英國牢獄は忽ち充溢するに至り、更に之れを送置すべき場所を選まざる可らず、  
 適々キヤプテン、クックの遠征は之れが爲めに屈強なる土地を紹介せしを以て、シド  
 ニー子爵は罪囚移住地を設立せんが爲めにボタニー灣に一團を派遣せんと決心

し、千七百八十七年五月一艦隊は出帆の用意を整へ、則ち軍艦「シリアス」號に小船  
 「サンプライ」號を附し、運送船六艘、糧食船三隻を以て罪人男五百五十人、女二百廿八  
 及び護衛兵二百人を卒むキヤプテン、フキリップは殖民地太守に任せられキヤプテン、  
 ハンター之れが次官となり、コリンズは判官として軍法會議及び行政を司ること  
 とし、千七百八十八年一月十八日より廿日に至る三日間に、艦隊相次てボタニー灣  
 に到着せり、而して此航海日數八ヶ月、罪囚の多數は監禁の爲め途中病に罹りて  
 死去せり。

二、ボート、ジャクソン。ボタニー灣に投錨するや直に囚徒を上陸せしめ、森  
 林の伐切を開始せり、然れども一兩日ならずして其不適當なるを知れり、港灣水  
 淺くして船舶は遠く岬頭に碇泊して大洋の激浪を受けざる可らず、此に於て太  
 守フキリップは三隻の小舟を卒むて、港灣の搜索を爲さんとし、岸に沿ふて進み、嘗  
 てクックがボート、ジャクソンと命じたる灣口に到れば、絕壁南北に聳え、潮流其間  
 を奔りて洋々乎として天に漲し、展望絶佳なり、之れ自然の良港にして灣内曲浦

蜿蜒、島嶼點在し海岸樹木鬱蒼として綠陰白沙と相影す。先頭土人の出沒するを認め舟を停めて密かに偵察を行ふ、蓋し之れ多少の失望ならざらんや、キャプテン、フキリップは三日間探検して最も適當なる場所を選び其一小江をシドニー、カウ州と名稱す、則ち國務卿シドニー子爵の名譽の爲めに其名を附せり、水深くして大船巨舶と雖ども直に陸地に寄することを得宜なる哉、現今世界屈指の良港たり。

一兩日後全艦隊來て囚徒は上陸し、流れに沿ふて鬱蒼たる森林を清め、該處に國旗を建て、三發の祝炮を放て、太守は群衆に對して使命を宣言し、式終るや、伐木丁々喧噪なる光景と變じ、各自勞務に従事して自己の住所を建設するに遲滯する者なし。

三、當初の艱難 全數三分の一以上は瘧血病等の疾病に罹り、應急病院を設立して入院患者六十六名に達し、其大半は恢復の望なし、而して勞働に堪ゆる者は耕作に従事せしめんとすれども、耕作の道を知る者なく、偶々太守の従僕一

人嘗て農業に従事せしことある者ありたるを以て、其指導に依り漸く着手することを得たり、元來農業の事たる粗野にして上流紳士は自ら之れを行はず、又軍人は戰闘に敏捷なるも農事を解せず、而して囚徒は怠慢にして武裝の軍人警戒せざれば働かず、少しく油斷すれば忽ち器具を破壊す。

此の如き有様なるが故、土地より收穫を得るは僅少にして漸次糧食の欠乏を來し、加之運送船「ガーディアン」號は氷塊に衝突して難破せりとの報知に接したる時は、此一小社會は殆んど恐慌を惹起せり、而して其後間もなく一船着港して罪囚を上陸せしめられたれども、糧食を積載せず、此に於て急速「シリウス」號を喜望峯に、サツプライ號をバダビヤに派遣して、糧食を求められたれども、一二ヶ月にして盡き、今や饑饉は眼前に迫り、太守を初め役員皆粥を啜りて僅かに壽命を繋ぐのみ、全員悉く衰弱して餓死する者多きに至りたるを以て、太守は己むを得ず一般勞働の中止を命じ、家畜は殆んど屠り盡し、僅かに二三頭逃れて森林に入りたる者あり。

四、ノーフォーク島 太守フキリップは軍艦「シリウス」號を以て罪囚二百名、軍人



七十名をノーフオルク島に送りて之れを救濟せり、蓋しクックの報告に依て其豊饒なることを知るが故に、太守は到着後直に副官キングを遣して該島を占領せしめ、軍人及び囚徒廿七名を以て開墾に従事し、當時既に充分の收穫あるに至れるを以てなり、然れども「シリアス」號は多量の糧食を積載して、歸途珊瑚島に坐礁して難破せり。

**五、第二艦隊。** 突然糧食船一隻港頭に見はれたるを以て、悉德尼住民は手の舞ひ足の踏み所を忘れたる程なりしが、俄然暴風起りて遙か北方に押流したるを見て其失望も亦極端なりし、幸に救助するを得て入港し糧食を陸揚せり、又間もなく二艘の糧食船到着し、罪囚は千七百人なりしが、二百人は途中に於て死し、猶ほ數百人瀕死の状態に在りて上陸後續々死去せしを以て、却て糧食を餘すに至れり。

**六、罪囚の逃亡。** 囚徒の多數は逃亡を企て、小舟を盗みて蘭領瓜哇に達せんとし、或は森林に匱匿する者あり、然れども餓死せしに非らざれば大概歸來て

自首せり、千七百九十一年四五十人一團となりて脱走し、徒歩して支那に赴かんとせり、其無學驚く可く、森林を彷徨して空しく白骨と化し、數年の後發見せられたる者少からず。

**七、太守フキリップの歸國。** 此の如き監督に従事して太守は大に健康を害し、千七百九十二年辭職するの止を得ざるに至れり、資性果斷敏捷にして又慈愛誠實なる人なり、平素健康不良なりしが故に、顔色常に勝れざりしも一種溫良の風姿あり、事務に勵精熟達して能く難局に處して責任を全ふせり、多大なる慰勞金を受けて本國に歸り、交際場裏に餘命を送れり。

其後三ヶ年間クローズ少佐及びベターリン大尉殖民地を管理し、千七百九十五年に至り、巽に「シリアス」號を失て歸國したるキャプテン、ハンター太守に任ぜられて赴任せり。

**八、太守ハンター** 此時殖民地は既に困阨時代を過ぎて漸く順境に向ひ、罪囚六十名徒刑満期となりて土地を交付せられ大に成効したる者あり、又太守ハ

ンターは自由移民を伴ひ來り、ホークスプリー河岸に土地を與へ、暫時にして六千「エーカー」以上は耕作を施し、小麥玉蜀黍等を作り、既に饑饉の憂なく殖民地は滋々愉快なる状態に進めり、然れども家畜の飼育甚だ不成功にして、一時殆んど絶望の淵に沈まんとせしとき、圖らざりきホークスプリーの牧野に六十頭の家畜あり、群をなして徘徊するを發見せり、之れ數年前太守フキリップの牧場より逸したる者の繁殖せしなり。

### 九、殖民地の狀況

創設以來十二年にして人口六七千人に達し、皆悉德尼附近に住居せり而して漸く西方に擴張を企てたれども、ブルー山脈は到底越ゆべからざる難關とせり、又北方七十哩許一河流を發見して「ハンター」と命ぜり、這はショートランズ中尉が舟を盗みて逃走したる罪囚を追ふて、圖らず該處に到りて發見せし者なり、河口附近石炭の存在する徵候を認めたるを以て、囚徒を送りて採掘を試み、大に成效して遂に現今の「ニューカッスル」を造出せり。

「ニューカッスル」石炭は品質優良にして當時僅かに試掘をなせしに止まり、後千八百廿六年濠洲農業會社設立して二十ヶ年間之れが借區を爲せしも之れ亦何等計畫する所なく、千八百四十七年契約満期となりて以來民間の競争に委したるより、大に發達して千八百八十九年に至ては採掘高三百六十五萬五千六百三十二噸、價格百六十三萬二千八百四十九磅に達し、尙ほ數百年を持續して遙かに世界市場を牽制するの力あり。

千八百十年太守「ハンター」公務を負ひて歸國するや、一軍艦の司令官に轉任を命ぜられ太守「キング」代て赴任せり。

## 第十一章 (三) 新南威耳斯州 (自千八百八年至千八百八年)

一、太守「キング」嘗て「ノーフォルク」島の開拓を行ひ、千八百十年「ハンター」に代て太守となり、活潑にして多藝多能、教育ある軍人なれども、當時濠洲太守の位置たる頗る難局たりしが故に寧ろ失敗を以て終れり、抑も濠洲殖民地は主として囚徒を以て成立ち、而して其大部は重罪人にして所有罪惡を犯したる惡漢のみな

り、故に此の如き徒輩を監督して秩序を保たんとするは至難の業にして、更に之れを善に導き勞働に従事せしめ有用たらしむるは、如何なる太守と雖も不可能に屬する難事たり、然れどもキングは屈せず撓まず匪勉努力せしと雖も、往々嘆聲を洩らし失望して曰く、盜兒を良農たらしむるを試むるは到底至愚の極なり」と加之部下に在る者にして少しく忠實たりしならば、或は成効せしならんも、事情は之れに反し、彼に一臂の力を貸す者なきのみならず、却て計畫を紊り極力妨害を務めたり。

**二、新南威耳斯軍隊。** 千七百九十年殖民地守備の爲めに特に編成して新南威耳斯軍隊と稱し、永久悉德尼に駐在することゝせり、然れども本國を距ること遠く、且つ劣等なる罪囚の間に在て勤務する者なるが故に、高等武官は之れを希望する者少なく、加之偶々派遣せらるゝ者も、蓄財し得れば速かに歸國せんとの希望を懷けり、而して當時貨殖の最良法は殖民地に物品を輸入して暴利を貪ぼるに在り。

此に於てか監督の位置に在る者も、物品販賣を營業として囚徒及び移民に賣捌き、其重要商品と爲す者は酒精類なり、就中燒酒の輸入最も夥しく、殊に軍隊は恰も酒類販賣の一大商店たるが如き有様となり、遂には器械を輸入して之れが醸造を始むるに至れり。

樞密院は命令を發して之れを禁止したれども、密かに製造する者少からず、高等官吏に至る迄大概之れに加盟し、千八百零年警部長は酒保の主人となり、押丁は牢獄の門前に於て之れを鬻げり。

**三、殖民地の狀態。** 事情此の如くなるが故に、暴漢醉客は一般の常態にして徒刑滿期となるも操行を改むること能はず、軍人は遊蕩に耽けり、官吏役員等悉く破廉恥の汚行を憚らざるに至る、之れ則ちキングの支配せし社會なり、奚んぞ能く効果を奏するを得べけんや。

**四、囚徒の暴動。** 囚徒は殖民地に到着するや、輕罪犯の多くは自由民に附托して地方に送りて牧畜耕作に従事せしめ、而して重罪犯は鎖に繋ぎ道路の修

築其他政府の勞働に服役せしめ、其三四百人許なる一團を、バラマッタの北方數哩の所カスル、ヒルに楹置せり、然れども彼等は數を憑んで跋扈し、其國事犯等は常に演舌を爲して煽動を試み、遂に暴動を企て桎梏を脱して小銃二百五十挺を奪取し、ホークスブリーに向て進み、該所に在る囚徒にして合同せば優に軍隊を壓倒するに足るべきを想像せり、此に於てシヨンソン少佐は二十四人の兵士を卒めて追撃し、彼等又止まりて戰を挑みたるを以て、已むことを得ず應戰して盛んに炮撃せり、元來烏合の徒輩、到底支ゆること能はず、忽ち敗北して四方に散亂せしを以て、主謀者三四名を捕へて絞罪に處し、他は漸く鎮靜するを得たり。

**五、濠洲羊毛の起源**　太守キング在職中、濠洲に在る重要なる産業は其端緒を開けり、新南威耳斯軍隊にメカサーなる士官ありて悉德尼に到着するや、職務を厭ふて直に職を辭し、土地の交附を請ふて内地に移住して牧羊こそ最大富源なるべきを達觀し、喜望峰に於ける蘭領殖民地より羊數頭を取寄せ、之れが飼養を試みたれども、最初の計畫は失敗に終りたるを以て、千八百三年英國に赴

き濠洲の牧羊に適することを論述して、ジョージ三世の庇護を受くるに至れり、元來メカサーの目的に適當なる羊は西班牙産「メリノ」種なり、而して之れを求むるに途なし。

當時西班牙は此利益を壟斷せんが爲めに該種羊の輸出を嚴禁し、犯す者は問ふに重罪を以てせり、然れどもジョージ三世は熱心なる農業者にして、嘗て之れを懇望し、西班牙國王は特に「メリノ」種數頭を贈呈せり、此に於て英王自ら農園に飼育せるが故に、メカサーの請願を允して秘藏の羊二三頭を頒與し、濠洲に送れり、無恙到着せしを以て、太守キングはメカサーにカムデンに於て一萬「エーカー」の土地を與へて、之れを飼養せしめたりしが、幸に成効して數年ならずしてカムデン牧場は群羊を以て蔽はるゝに至り、其採取する羊毛は著しき利益を與へ、遂に今日の盛大を來せり。

**六、太守グレイ**　千八百六年キング職を辭してキャプテン、グレイ之れを繼承して太守に任せられ、數度冒險を企て、著名なり、嘗て英國政府の命を受けて、パ

ウンチー」號に搭乗して、麵包樹を求むるが爲めに南洋諸島に航せしが、性質專横にして船員を虐待せしより、彼等一揆を企て十八名の者と共に、一小端艇に彼を載せて太平洋上に遺棄せり、然れどす熟練なるブライは毫も屈せず、三千五百哩を航行して、馬來群島中に在るチモール島に到り、便船を得て本國に歸り却て雷名を藏かせり。

既に述べたるが如く、深洲太守の職たる當時頗る難局にして、彼を太守に任じたるは蓋し政府の人選を誤りたる者にして、可惜海員をして徒らに名譽を毀損せしめたるに終れり、勿論深洲は罪囚流刑地なるが故に專政的威壓を以て支配すべき必要ありと雖も、自由移民は甚だ之れを歎ばずして、忽ち新太守を嫌忌するに至れり。

彼れ必しも慈悲心なきに非らず、既に千八百六十六年大洪水の際の如き、自費を抛ち農民を救済して本國政府の感賞を得たるとあり、然れども性來不羈峻巖其度に過ぎ往々鞭撻を用ゐ、又甚しく部下を侮蔑せり、而して本國上官に對しては歡心

を之れ求め、只管職責を盡さんことを焦慮し、斷乎として酒類營業を禁止したるを以て、結局役員等は大に反抗を現はし遂に全然失敗を招くに至れり。

七、ブライの放逐。 數ヶ月後ブライ倍々不入望に陥り、公私共に一人として

て交際する者なき而已ならず、復讐の念を懐く者多きに至れり。偶々メカサーと新任判官アトキンとの間に爭論を生じ、無端導火線となりて擾亂を惹起するに至れり、其は一囚徒メカサー所有の端艇を盜取して逃走せしを以て、過失罪としてメカサーに罰金を科せり、而してメカサーは之れに服せず、支拂を拒みたるを以て、法庭に召喚せられアトキン之れが裁判長たり、然れどもメカサーはアトキンと私怨ありとし仇敵の間柄なるを以て、之れが裁判を受くることを肯んせず、アトキンは彼を捕へて獄に投ぜり。

此に於て太守ブライは特に法庭を開き、新に六名の役員を選び、更にアトキンを任命せり、而してメカサーは出庭したれども全然裁判を拒絶し、六名の役員亦之れを是認して裁判を中止せるを以てブライ大に怒て六名の役員を入獄せしめ

んとせるを以て、事態頗る危急を示し、軍隊總て彼等に左祖し、大守を免じて代て支配せんことを、ジョンソン少佐に請願せり。

ジョンソン少佐は之れを認容して直に會議を開き、メカサーも共に出席せしめて、密かに方略を議し、翌朝に至り軍隊は國旗を翻し、鼓を鳴して、大守の官舎に迫り、令嬢出て、切に退却を諭したれども聞かず、直に侵入して、ブライを索め、其寢臺下に入て重要書類を隠匿しつゝ、在る所を捕へて幽閉し、守兵を附して逃走に備へ、ジョンソン少佐は大守の椅子を占めて役員等を任命せり。

次てフホーヴォー大佐代て事務を取扱ひ、更はベターソン大佐達斯馬尼より來て、新任大守到着迄殖民地を管理せり、而してベターソンはブライにして殖民地を騒がさず、直に歸國すべきを誓ひたるを以て放免せしに、忽ちフォークスプリーの移民を煽動せんとせり、然れども其應ずる者なきを以て達斯馬尼に渡り、該地に於て大に歓迎せられたり、必竟住民は未だ其事實を知らざりし所以なり。

間もなく命令達するや、捕縛せんと企つる者あるに至りたるより、逃れて英國に

歸れり、然れども其歸國するや直に海軍提督に任ぜられ、而して本國政府はジョンソン少佐を免黜し、陸軍少將ラ克蘭、マコーリーを以て大守に任じ、此に於てジョンソン少佐は新南威耳斯に土地を求めて退隱し、大に繁榮して千八百十七年死去せり。

### 第十二章 (三) 新南威耳斯州 (自千八百八年 至千八百卅七年)

一、太守 マコーリー 千八百八年英國政府はブライ放逐の事情を取調べ、ジョンソン少佐を免じ、軍隊全部解散を命ぜしと雖も、ブライも亦大に非難すべき欠點多きこと明白となりたるが故に、殖民の希望を容れて新に太守を任命することに決し、マコーリー少將をして之れに代らしめたり。

此に於て新任太守 マコーリー は到着するや、命に依り二十四時間 ブライ を復職せしめんとせり、之れ必竟本國政府は太守の任免は政府の權限に在りて、決して殖民の干涉容喙を許さざることを明かにせんが爲めなり、然れども此時既に ブライ

イは達斯馬尼に渡りたる後なるが故に、新任太守は只其命令を公布せしに止ま  
れり。

幼稚なる殖民地の運命は、全然其主宰者たる太守に起因し、善惡何れか其感化力  
に在り、故に悉德尼住民はマコーリー在職間大に幸福を蒙れりと雖ども、彼の性質  
又必ずしも非難なきにあらず、資性虚榮尊大にして本國上官に實際の報告をな  
さず、猥りに誇大に失し、又徒らに虚榮心に驅られて、地名等は大概自己に縁ある  
名稱を選びたるが如き然り、之れ其弱點にして大體に於ては嚴格にして尊る敬  
服すべき太守たり。

在職十二年間、夙夜殖民地の發達を圖り、住民の向上を期し、常に慈愛を以て民心  
を調和せり、而して一年一度必ず巡廻視察して改善すべき點を究はめ、殊に農民  
を愛撫し、茅屋を廢し、努めて愉快なる家庭を造ぐることを勸誘して、屢々、適切な  
る方法を授け、或は資金を貸付て農業の改良を奨勵せり、又寺院學校等を建て、  
教育の普及を計り、務めて徳義心を涵養せしめ、之れか爲めには、毫も間然する所

なく、當初本國政府は殖民地一萬の人口に對して一千一百人の軍隊を要すべき  
豫定なりしが、マコーリーは人口増加するも敢て軍隊の増設を請はずして、能く秩  
序を保つことを得たるは、全く教育の力にありとす、而して又囚徒を憐み、諄々と  
して倦まず、之れを善に遷して自由民となし、土地を與へて成効せしめたる者少  
なからず。

## 二、ブルー山の通路。

太守マコーリーは地方の拓殖及び道路の開築に力を  
注ぎ、赴任の當時は狭路僅かに四十五哩に過ぎざりしが、歸國の時は坦々たる公  
道三百哩に達し、而して市街を適所に創設し、ウキンズ、ブリー、リッチモンド、カッスル、リ等  
は其重なる所にして、滿期囚徒を適宜分配して土着せしめ、又最も著名なるはブ  
ルー山を越ゆる公道たり。

千八百十三年彼のウエントワース以下三人探檢旅行を果して復命するや、其報告  
に勵まされ更に測量師イーヴァンを派遣して道路を開鑿せしめ、工事頗る困難を  
極め、十五ヶ月を費して漸く悉德尼より該山を通ずる車道を築き、太守は夫人を

伴ひ、新道を旅行してブルース山を越えて一大沃野に出て、一市街を指定してパスポートと命名せり、之れ國務次官バサーストの名に因れり、此設計や殖民地を利益すること多大なり、元來山脈と海岸との間に介在する地方は、甚だ狹隘にして當時既に繁殖して二十五萬頭の羊を有し、而して往々旱魃の虞あるを以て、忽ち牧畜家は群羊を驅て該所に移住し、遂にマコーリー及びラクラン河畔に大牧場を現出するに至れり。

三、太守プリズベーン 千八百二十一年マコーリー歸國して殖民大に別離

を悲みたり、然れども彼の失政の一は自由民の移住を阻碍せり、而して常に謂ふ「此殖民地は罪囚の爲めに設立したる者にして自由移民は其用なし」と。

繼承者サートーマス、プリズベーン次でサーラルフ、ダーリングの兩太守は大に自由移民策を探り、之れが爲めに所有便宜を興へたり、然れども當時北米合衆國は最も移住に適し、旅費を才覺して渡航し深く内地に入り力役して漸次繁榮を求むるは彼地移民の状態なり、而して濠洲移民に在ては少しく其趣を異にせり。

千八百十八年濠洲へ無賃渡航を廢したるを以て、航路遠く從て多額の旅費を要するが故に、貧民は殆んど望を絶し、悉德尼に來る自由民は教育ある少壯者にして、又必ず數百磅を携帯し自ら勞働せずして、勞働者を使役せんと欲する者なり。太守プリズベーンは此種の冒險者を厚遇し、土地を興へ又囚徒を附托せるが故に、大に農業の發達を促し家畜群羊夥しく増殖して、囚徒の需用は供給を超過すること二千に及べり。

爾來殖民地の産業は著しき變化を呈し、收支償はざる政府の耕場其他の事業は廢止せらるゝに至れり、之れ必竟罪囚を勞役せしむるが爲めに經營せし者なればなり、加之囚徒は多數集合せしむるよりも、相隔離して使役する方取締り易く、又改善し易し、而してマコーリー時代に在ては有用に適する囚徒は十分の一に過ぎざりしが、七八年の後に至ては大に囚徒の聲價を高め、農業家は争ふて之れを雇入るゝに至れり。

此の如くプリズベーン及びダーリング治世の下に重要なる改革行はれ、民力大に發



展せしは一に兩太守の施政其宜しきを得たる所以なりと雖ども、然も兩太守共に人望を博すること能はざりしは頗る異なり。

太守プリズベーンは千八百二十一年職に就き高潔誠實なる老將軍たり、然れども幼稚なる殖民地の經營に對しては必しも適材なりと稱すること能はず、千八百二十五年本國政府は遂に召還するの必要を認めたり。

四、太守ダーリング 資性精確秩序的なりと雖ども、寧ろ謹慎に過ぎ却て大事を愆るの嫌あり、軍人にして又大に實業思想ありと雖ども、未だ以て殖民に満足と與ふること能はず、千八百二十五年より同三十一年に至る六ヶ年間在職せり、此間彼の有名なる濠洲農業會社は英國に於て設立せられ、主として商人及び國會議員より成り、資本金を一百萬磅とし、政府は新南威耳斯に於て一百萬、エーカーの土地を交付せり、而して其目的は、濠洲の荒蕪地を改良し、主として羊及家畜を飼育し、石炭其他礦物を採掘し、普く殖民地の財源を開發するに在りて、支配人として北極探險家サー、エドワード、バリー、選任せられて、リザアブル平原に殖

民せり、之が爲め一時殖民地の經濟界を擾亂せしも、遂に大に利益を與ふるに至れり。

五、上院 千八百二十四年初めて衆議院を設け、千八百二十九年漸く擴張して上院となし、十五名の議員を置いて立法權に參與せしむ、然れども嚴に秘密を守り専ら太守の意思に依て決行し、甚だ不完全たりしも、多少民意を代表するを得たり、而して専横なる裁判を廢して本國裁判法を模倣するに至れり。

六、新聞の争闘 太守ダーリング人望乏しく常に陰謀行はれ、遂に新聞の争闘と稱する紛擾を惹起し、四年間劇烈を極めたり。

千八百三年ホークキと呼ぶ囚徒あり、初めて濠洲に於て新聞紙を發行して「シドニト、ガセット」と稱し、政府の保護を受け、太守は常に關涉して全然政府の機關たるが如し、而してプリズベーン、太守の時ウエントワース、及びワッデル博士は、更に「オーストラリヤ」なる獨立新聞を發刊し、次で「モニター」なる新聞現はれ、此兩紙はダーリングの不入望を奇貨とし、頻りに太守の行動を攻撃せり、此に於て太守は「ガセット」

を以て百方防禦し、共に極點に達し、執政の第三年遂に一小事件より全殖民地の激昂を惹起するに至れり。

サッツと稱する一軍人あり放蕩無頼にしてタムソンなる同僚を咬かして曰く、軍人として何時迄勤務するも望少なし、如かず囚徒ならば却て利運の機會ある可しと、此に於て一商店に忍び入り竊盜を働き捕へられて七ヶ年間達斯馬尼に送らるゝの宣告を受けたり、之れ其望む所なり而して太守は此狡猾手段を採知して裁判を變更し、桎梏を加えて道路の苦役に従事せしめたるを以て、サッツは其酷刑に苦しみ數日にして斃れ、タムソンは遂に狂亂せり。

此に於て反對新聞は不法の干渉及び殘酷を以て盛んに太守を痛罵し、「ガセット」之れを辨解防戦し、太守も自ら渦中に入て全力を致せり、忽ちにして全洲二派に分れ、一は太守を庇護し、他は殘忍暴戾なりとし、争闘四閱年遂に反對派の勝利に歸し、千八百卅一年本國政府は彼を召還して、葛藤漸く融解せり。

七、太守ポーク サリ、リチャード、ポーク代て太守となれり、太守中の最も適任

者にして大に人望を得たり、マコーリーの如く多才、精勵、加ふるに淡泊にして眞情に富み、其辭任して歸るや、老實なる太守ポークなる尊稱を得たり、而して在職中殖民地は眞面目を以て確實なる發達を遂げ、千八百卅三年人口六萬に達し、内三万六千人は自由民にして毎年囚徒は三千人宛到着せりと雖ども、自由民の移住する者も亦同數を以て算せられ、人口増殖して大に繁盛に赴けり。

八、土地問題 ポークの赴任するや、土地問題に關して大に不平あるを認めたり、抑も其規定する所は何人と雖ども政府に請願するときは自由に土地の交付を得ることなれども、又大に弊害の潜ひあり、其は法文上何人も土地を求むるに同一の權利を有すれども、其實際に至ては政府部内に縁故を有するに非らざれば、願意貫徹せざる者の如し。

此に於てポークは本國政府に請ふて改正を爲し、凡そ殖民地方の土地は競賣に附して、「エーカー」五志に達せざれば買却せず、以上最高價を附する者を買人となすことに規定せり、而して此方法最も適當と認められ、土地の賣却より年々莫

大なる収入を得るに至り、之れを以て政府は千八百十八年以降廢止したる貧民移住の保護を再び實行するを得るに至れり。

**九、牧畜家。** 未だ實測せざる地方は彼の「**牧畜家**」と稱する者隨所に移住すと雖ども、其所有する「**地所**」に就ては法律上何等の權利を有せず、故に通知を受くれば直に轉住せざる可らず、加之群羊互に混合して往々紛争を醸し、各自頗る不安の状態なりしが、**ポーク**は新に法今を發して各自境界を定め、土地と牧羊の比例して些少の地代を納付せしめて使用することを公許せり、之れ當時重要な規定にして、牧民に多大の利益を與へたり、此の如く**ポーク**は在職六ヶ年名聲噴々、千八百三十七年退役して歸國するや、殖民擧りて追慕せり。

第拾參章 (四) 新南威耳斯州 (自千八百卅八年至千八百五十年)

**一、太守** **ギップス** 千八百卅八年太守 **ポーク**は故郷愛蘭士に退隱して餘命を送れり、此に於て**サー、ジョージ、ギップス**代て太守となれり、當時加奈太事件を處理し

225502

て名聲を博し、頗る才幹に富み、博識寛宏なりと雖も、稍々磊落の性癖を免れず、而して殖民地の安寧を圖るが爲めに、此の如く盡力したる太守なく、又此の如く不人望たりし者を聞かず。

其在職中殖民地は常に困難を感じて、不満の聲を絶たず、本國政府は終始殖民地の發展及び利益を保護することを企圖するは勿論なりと雖も、往々杜撰なる報告の爲めに齟齬するに至るも亦止を得ざるなり、而して兩者の間に立て責任の歸する所は單に太守の一身にして、其實際に至ては、必竟殖民夫れ自身の失態に原因する者多しと謂はざる可らず。

**二、金融の恐慌。** 既往十二年間殖民地は驚くべき發達をなし、蓄財甚だ容易たる者の如く、從て移民の上陸するや、已に富有なる空想を抱て、往々浪費を省みず、贅澤に流れ、就中**悉德尼**に在ては最も奢侈の風行はれ、**麥普尼**亦然り、高價なる酒精は勞働者普通の飲料となり、千八百四十三年太守**ギップス**は**ポート、フキリッ**を巡廻して、**麥普尼**郊外の叢林中に三鞭酒の空瓶山の如く堆積し在るを見た

り、以て其全豹を窺ふに足らん、斯くして少壯者及び商人等多く産を傾け、社會は漸次衰微して難澁に迫まれり。

三、土地條例 然るに本國政府は土地條例を發布して關涉を試み、遂に一大

恐慌を惹起するに至れり、千八百四十年南濠州は破産の淵に沈淪し、法令を以て地價を保持せんとするウエークフィールドの政策も、豫想の如く好果を奏することを得ず、當時英國に於ける朝野の縉紳多く其主義を賛成し、殊に殖民次官最も熱心せり、而して南濠移民は訴て曰く、如何に此計畫を成就せしめんと欲するも、他州に於ての地價低落するときは到底不可能たり、況んや隣州維多利に到れば「エーカー」五志を以て求め得るに、誰れか南濠に於てのみ一磅を拂ふ者あらんや」と。

此に於て南濠の顛覆を防がん爲めに、次官は各州共に地價を引上ぐべきことを命じ、新南威耳斯を三區に分ち、第一區は中央區則ちポート、ジャクソン附近にして、「エーカー」十二志以下に賣下を許さず、第二區は北方區モントン灣附近にして

同一價格となし、第三區は西方區則ちポート、フキリップ附近にして、最も豊饒なるが故に一磅以下に拂下ぐることを禁ぜり。

此條例發布せらるゝや、新南威耳斯に於ける不平は殊に甚しく、大概「エーカー」二三志以上の價值なしと論ぜしも、次官は肯て之れを聽かず、此に於て土地に關する投機盛んに行はれ、隨分高價に賣買せられ、千八百四十年に於ける土地賣下の收入は千八百卅八年の三倍に達せり、然れども、結果非常なる害惡を生ぜり。初め一千磅を以て「エーカー」の土地を購求して、一兩年の後之れを賣却せんとするや、僅かに二三百磅に過ぎず、漸く實際價值なきを知て、争ふて賣却せんとするに至り、愈々下落を來し、銀行者も之れを抵當として貸附を爲したる者は殆んど窮境に陥り、千八百四十三年、濠洲銀行遂に破産して、茲に無端恐慌を惹起せり。牧畜家は負債償却の途に充んが爲めに、群羊家畜等を賣却せんとせば、一兩年前卅志にて買入れたる羊も僅かに十八片に過ぎず、當時實際悉德尼に於て六片にて賣拂はれたることあり、然れども幸ひ「ヤッス」に住する「牧民」オブリンと稱する者

一頭の羊を煮て六志の價値ある獸脂を製することを發明せり、若し此方法にして案出せられずんば、全然破滅せしや必せり。  
千八百四十三年困難極度に達し、太守は飢餓を救済するが爲めに、食料品を元價以下にて發賣するの止を得ざるに至れり、而して事態此の如くなるにも關せず、本國官權は更に地價を騰貴せしめ、全濠洲總て「エーカー」一磅以下に賣下ぐ可からざることを命令せり。

**四、移民。** 然れども英國政府は土地の賣却より得る収入を決して妄りに使用せず、悉く移民を送くる爲めに支出し、歐洲に代理人を置き、獎勵法を設けて免狀を與へ、而して之れを有する者は悉く德尼に無賃渡航を許し、其費用は則ち土地拂下げ代金を以て支辨せり、而して殖民地に在る者にして親戚、知友、家僕或は勞働者を呼び寄せんと欲する者は、太守より該免狀を受くることを得。

此に於てギブスは千八百四十年に於けるが如き収入を年々收め得べしと考へ、同年及び翌年中に該免狀を下附すること一百萬磅に達せり、然れども千八百四

十一年に至ては土地の收入は前年の二十分の一に減じて、將に破産せんとする有様に迫れり、太守ギブスは殖民の攻撃を受け、又本國政府より嚴責を蒙れり、而して到着したる移民は豫想に反し、勞働を求むること能はず、數週間空しく公園等に露宿し、殆んど糊口に窮せり。

チンヨルム夫人と稱する慈善家ありて之れを救済し、其扶助を受けたる者二千人、婦女六百名に達せりと云ふ、而して此の如き窮乏に瀕して初めて覺醒し、殖民漸く謹慎精勵を旨とするに至り、無稽なる土地賣買も止みて、恐慌を回復することを得るに至れり。

**五、分離。** 太守ギブスの管轄區域はヨーク岬よりポート、フキリップに至る濠洲大陸の東半部に於て人口大凡十五萬、一部は悉く德尼を中心として十二萬人、他はポート、フキリップの附近三萬人にして、廣濶なる地方に散在するが故に統御頗る困難たり、而して後者は小なりと雖ども、勢力侮る可からず、常に不平を鳴らし、首府を距ること六百哩、總て遲滯不便を免れず、之れ其原因の一たり。

ラトロップなる者を監督として麥普尼に置き、南部地方の管理を委ねたりと雖ども、一個の財産家と稱するに過ぎずして優柔不斷敢て責任を負ふて事を決行するの勇氣なく、猥りに唯々太守に盲従する而已。

此に於て麥普尼住民は自然單獨に太守を有するの希望を懷き、千八百四十年イグ街の小丘上に在る一堂に會合して、新南威耳斯より分離の請願を爲すことを議決せり、然れども翌年悉德尼市民も亦一劇場に集會を催ふして其反對を決したるを以て殖民地は二派に分れ互に該分離問題を討議せり、而してギップス及びラトロップは勿論分離に不賛成なるが故に、ポート、フキリップ住民は非常に嫌忌して本國官權は稍々分離説に傾くを以て、其意見を殖民に傳ふるや、仲介に立て又悉德尼市民の激昂を來し、彼此共に不人望を招くに至れり、蓋し此の如き位置に在て所信を貫徹せんと欲するも到底勞して功なき也。

**六、代議政體** 千八百四十二年代議政體を請願せんと欲して悉德尼に於て會合を催ふし、遂に英國議會は之れを可決して批准を得、翌年七月に至り第一回

代議士の選舉を悉德尼に於て執行せり、而して議會は上下兩院を通じて議員三十六名より成り、其十二名は太守の指名を以て人民及び政府員より選び之れを上院となし、他は二十四名を以て衆議院とし普通選舉に依り、十八名は新南威耳斯六名はポート、フキリップより選出して民意を代表せしむ、然れどもポート、フキリップより選出すべき議員は自己の職業を離れて之れか爲めに半歲悉德尼に滞留するは頗る不利益なるが故に、其興望を負ふて代表すべき者を悉德尼住民より選出するの止むなきを感じ、ラング博士は委囑を受けて選舉區の利害を双肩に擔ひ大に活動せり。

千八百四十四年第二議會に於て、ポート、フキリップは新南威耳斯より分離して獨立の一州を設立する請願を女皇に提出すべき動議を起し、有名なるローウ及び其他ポート、フキリップ選出議員は之れに賛成せり、然れども投票の結果十九の反對ありたるか爲めに否決せり、此に於てラング博士は自ら請願書を起草し、ポート、フキリップ選出議員の署名を得て本國政府に致せり、而して太守ギップスは國務

次官ロイド、スタンレーより該問題を上院の會議に付すべき命を蒙り、且つ英國政府は其要求を正當と認めたる旨を通知し來りたるを以て、悉德尼議會は直に之れが討議をなして其結果を回答し、從て本國議會は之れに必要な條令の發布を議するに至れり。

ポート、フキリップ住民は喜悅限りなく、千八百四十六年ラング博士を招待して一大祝宴を開きたり、然れども茲に其完成を遲滯ならしむる運命を發生せり。當時此請願を賛成したる英國内閣は倒れて、新に組織成り、此を以て年一年と遷延し、ポート、フキリップ住民は遂に忍ぶ能はず、更に屢々苦情を訴へ陳情せり、而して其理由とする所。

第一、土地の収入は其區域の利益の爲に使用すべき規定なるにも關せず、其實際に至ては悉德尼政府は該區に移民を招くが爲めに、ポート、フキリップ區の賣却代金を使用せり。

第二、衆議院に六名の議員を選出する權利を有すと雖ども、眞に之れ假托に

過ぎず、如何となれば何人と雖ども毎歲五ヶ月悉德尼に出張して、爲めに自己の業務を離るゝこと能はざればなり。

而して第一の理由は未だ以て断定すること能はずと雖ども、第二の問題に至ては到底免る可からざる所なり。

七、アール、グレイ。然れども英國政府は殆んど分離問題を忘却せる者かか如くなるが故に、千八百四十八年ポート、フキリップ住民は一方案を廻らせり、其は改選期を利用して議員を選出せず、以て本國政府の反省を促がさんとするに在り、然れども偶々フォスターなる者打て出でたるを以て、競争者なくんば中原の鹿容易に其手に歸すべきが故に、舉りて本國殖民次官アール、グレイを選舉することに決せり、之れ英國貴族にして政府員たり、當選するも決して遠く殖民地に渡航し來ること能はざるや必せり、果して然らば全然選出議員なく、從て自他の注意を惹起し得べしとなし、大多數を以てアール、グレイヲ選舉せり。

其報本國に達するやアール、グレイは寧ろ滑稽に過ぎずと雖ども、之れを上院に議

せり漸く注意を惹起せしを以て、更に分離問題を商量して、議案を帝國議會に提出し、次て維多利女王は親ら皇名を新殖民地に附與すべしとの回答を得たり、殖民の感激何者か之れに過ぎん一日千秋其實施を熱望せり。

**八、太守** フキッツロイ 然れどもギップスは憤激に堪えずして職を辭し、サー・チャイルス、フキッツロイ之れに代れり、寧ろ温厚の君子と稱すべく、敢て殖民地の事務に齷齪せず、議會の欲する所に任せ、ポート、フキリップの分離獨立すると否とは、毫も痛痒を感ぜざる者の如し、而して千八百五十年に至り、ポート、フキリップは新南威耳斯より分離すべき宣告を受け、翌年中頃遂に獨立して監督ラトロップ新太守に任せられ、憲法を制定し總て母洲に則れり。

**九、囚徒輸送の廢止** 此時恰も英國政府は最早濠洲に囚徒を輸送することを廢止すべきを決せり、曩に帝國議會は委員を設けて囚徒輸送の結果を研究し、殖民地の報告に據り之れを繼續するの愚なるを悟り、千八百四十二年業已其輸送を停止せり、而して「牧畜家」は之れを悦はず、囚徒を使用するときは賃銀廉に

して比較的良好なるが故に、屢々其復活を請願せり、然れども本國政府は斷然之れを斥ぞけて輸送せず、獨り達斯馬尼のみは依然竄流を受けしも、千八百四十二年以降は事實に於て全濠洲共に囚徒の收容所たるを免るゝを得たり。

#### 第十四章

(五) 新南威耳斯州 (自千八百五十一年至千八百六十年)

**一、金鑛發見の結果** 千八百五十一年以降數年間新南威耳斯は酷烈なる一大試檢を經過せり、彼のポート、フキリップの分離は人口四分の一を失ひ、富は僅かに三分の一を減じ、加之バラ、ット及びペンデゴの金坑發見は有爲なる殖民を驅て彼地に移住せしめたり、然れども之れ一時の現象に過ぎず、其富源未だ無盡たるが如く、一兩年ならず忽倏挽回するを得て、倍々繁榮して確實顯著なるに至れり、而して金鑛發見に關し一時世人を眩惑せしめたる空想は、俄然勞働者を吸引して賃銀非常に昂騰せしと雖ども、金坑に於ける實際の状況及び收得の困難なる事實の明白となるや、大部は固有の業務に歸へり、結局人口増加して従て商



業活潑に行はるゝに至れり。

之れを隣州維多利に比較するに、千八百五十一年に於ける該州の金坑發見は勿論多大の幸福にして新南威耳斯の金産出高は維多利に及ばず、千八百五十二年を除くの外一年二百萬英斤を超過せしことなし、然れども羊毛の産出は永久的にして廣大なる面積を利用することを得て、遙かに金礦發見に勝るに至れり。

二、太守デニソン フキッツロイ太守となりて千八百四十七年より在職八ヶ年にして同五十五年英國に歸り、其間幾多の變遷を経て殖民地の情況に一生面を現はせり、而して嘗て達斯馬尼の太守たりしサーウキリヤム、デニソン之れに代はれり。

恰も千八百五十四年クリミア戦争の發生は殖民地に一大激昂を惹起し、魯西亞艦隊の來襲を慮りて、港灣の警備を整へんが爲めに急に防禦工事を起し、新任太守デニソンは壯時本國政府に在て、技師を務め經驗を有するが故に、憤激熱誠を以て作業を督勵し、港灣の中央に在る一小島に城砦を築き、又海岸適所に砲臺を設

けて武備を嚴にせり、近時戰闘術の發達するに従ひ、此の如き砲臺は到底防禦力なきを以て、常に最近式を應用して之れが改良を行へり。

三、憲法の改正 千八百五十年英國議會に於て、澳洲殖民地の爲めに制定したる憲法は、一時を糊塗する彌縫に過ぎざりしが、茲に初めて各州自適の憲法を制定する特權を與へられ、千八百五十一年選出上院議員に各州の希望を表白すべきを命ぜり。

悉德尼議會は上院に委員を設け、新に憲法の編成を委ねたり、此に於て委員は専ら英國政體に倣ひ、一を衆議院とし、人民を代表して議員五十名以上たり、他は普通標準以上一定の財産を有し、一定の所得ある者より選舉すること、し之れを上院とす、然れども之れが爲めに頗る困難を感じ、ウエントワースは建言して曰く、女皇は殖民地に世襲貴族を設けて上院を組織すべしと論じたれども、徒らに議論沸騰したるを以て之れを撤回せり。

遂に委員は隣州維多利に於て採用したる方法を賛成し、上院議員も同じく選舉

に依り實產五千磅以上を有する者に被選舉權を與へ、更に討議の結果二十一人より少からざる議員を太守の指名に委することとし、女皇の裁可を請はんが爲めに本國に送れり、然れども此時恰も責任内閣を創定したるを以て、閣員の進退は從來の如く獨り太守の專權に依てのみ左右せらるゝに非らず、議會に對し聯帶責任を負ふに至りたるを以て、専ら本國の政體に則り、修正を施して批准を得、千八百五十六年此改正憲法を發布し、次で千八百五十八年更に改正して、衆議院議員を六十八名に増加し、又選舉を擴張し二十一才以上の男子にして六ヶ月以上殖民地に住居せし者とせり。

**四、旱魃及ひ洪水。** 建國の初めより旱魃及ひ洪水の爲めに、屢々大損害を蒙り、往々極端に達せり、新南威耳斯の地勢は山脈海岸に接近して連亘するが故に、河流従て長からず、又大概急流にして霖雨の季節には海岸一帶洪水を氾濫して大洋の如し、而して旱魃に際しては河流の消滅することも甚だ速かにして、一滴の濕氣だもなきに至る、ハンター、ホークスブリ、及ひシヨールヘーブン諸流に沿ふ

地方は殊に水害多く、最も慘狀を極め人畜家屋收獲を一掃す、千八百五十二年の洪水の如きガタガイの市街は全然流失して溺死者八十名以上を出せり。

**五、ダン・パー。號。** 千八百五十七年一大悲報は殖民地を震襲せり、其はダン・パー號と稱する一船悉德尼を距る七哩の沖合に於て難破したることなり、同年プリマス港を出帆して乗客百廿名を搭載し、殖民地の名士多く英國より回遊の歸途なり、將にポート・ジャクソン岬頭に達せんとして、俄然暴風東北より起り暗嶮咫尺を辨せず、然れども船長は空しく海上に漂流せんよりも速かに入港せんと欲して、海岸に近付き港口を搜索し、裂口と呼ぶ岩礁の罅隙を誤認して突進したるが故に、片々破碎して悉く海底の藻屑と化せり、翌朝難破の報傳はるや現場に馳せ集まる者數千人、而して幸に一人の生存者ありて岩窟内に横はるを認め、漸く救助するを得て初めて事實を確むることを得たり、爾來同所に燈臺を設けて船舶の便に供す。

### 六、文物隆興。

千八百五十二年悉德尼住民は大學を設立し、同五十七年博物

館を開き、又數多の新聞雜誌を發行し、鐵道の延長を急ぎ、電線は各州重要市府に達し、而して著しく物質的進歩を見はすに至れり。

### 第十五章 (六) 新南威耳斯州 (自千八百六十年至千九百一十年)

一、土地條例 千八百六十一年サー、ジョンヤング代て太守となれり、資性頗

悟頗る大器なりと雖ども既に殖民地に在て太守は己れの伎倆を施すの餘地なく政治上の權利は重に責任内閣の手裡に在り、當時内閣はチャールレス、クーパー及びジョン、ロバートソン相次で首相たり。

土地拂下法を改正して貧民も容易に土地を所有することを得べき議案を設計せり、其方法土地を耕作せんとする者は、「エーカー」一磅の割合を以て最初價格の四分の一を拂込み更に三ヶ年を経て殘餘の四分の三を仕拂ふか或は「エーカー」に付一年一志の地代を納めて繼續するか、兩者其選擇に任かすこととせり、之れ小農には甚だ利便なりと雖も、牧畜家の爲めには却て然らず、該法實施せば

彼等の借地たる牧場の地味肥沃なる所は耕地として撰擇せらるゝ恐れあるが故に、牧場主は大に激昂を來せり。

故に衆議院は該方案を通過せしと雖も、上院は牧畜家多きを以て忽ち論戰を惹起し、内閣は之れを遂行せんとし、上院は斷乎として拒絶せり、此に於て太守ヤングは百方上院を説て讓歩を求めたりと雖も、敢て其勸告に傾聽せざるを以て、最後の手段を弄して之れを強行せんと決せり、則ち上院議院は五ヶ年の任期を以て前太守の指名せし者にして終身議員たるの前提に過ぎず、而して既に任期滿了に近附きたるが故に、ヤングは其時機に於て自己の意に適應する者を改選せんとし、而して内閣は之れを待つに忍びず、直に該案に賛成すべき議員廿一名を指定せんことを勸め、反對派は其術策を看破するや、席を蹴立て一同退出し、議長も亦椅子を離れたるを以て、議事を繼續すること能はず、止むなく延期となり、内閣も一時大に失望せり、然れども多少遲滞せしに過ぎずして、遂に目的を達することを得たり、之れ責任内閣に於て最も拙劣なる手段たるを以て、輿論を激昂し、

又サージョンも太守として徒らに干渉せし所以を以て殿責を蒙れり。

二、プリンス、アルフレッド 千八百六十八年ロード、ベルモア太守となり、在職中維多利女皇の第二子プリンス、アルフレッド、遠洲に來遊せり、之れ皇族來遊の初めにして殖民感激措く能はず、到る所線門花飾を施し、夜間は電光飾を行ひ丹心熱誠を凝らして歓迎せり、而して此の如く悉德尼市民は全盛を盡くして貴賓を饗應し歡喜極まりなきのとき忽焉として一大憂愁を湛えたり。

一日プリンス、アルフレッドはクロンターフの招待會に臨み種々の遊枝を觀覽して徐々歩を進むるの刹那、オフアールなる青年突如拳銃を以て狙撃し彈丸背部に命中せり、此に於て市民の狼狽名狀すべからず、然れども幸にして致命傷ならざりしを以て、一兩日の後經過良好なるを確め稍々愁眉を開けり、兇漢は直に捕へられ嚴刑に置せられたり、其理由たるや、單に皇族を嫌忌する狂暴に過ぎざりし而已。

### 三、鐵道布設

新南威耳斯の鐵道は悉德尼を基點として三大主線に區分す。

第一、ゴルボーン及び國境アルバニーを経て麥普尼に到る。

第二、ニユーカッスルより北方新イングラッド地方を貫通してブリスベーンに到る。

第三、ブルース山を越えバサリストを経てダーリング河畔ホークに達す。

而して西方巒峯崛起、重疊する大山脈は工事頗る困難を極め、千八百十五年開通したるブルース山の公道に沿ふ鐵道は漸く布設せり、其工事中第一の難關は「ナングサク、ガレー」背囊洞と稱する長谷にして此に大鐵橋を架し、又高さ七百呎の絶壁を登るに「ジク、ザック」と稱して電光形をなし、登るに滾鐘車を前後に付し、先づ左方に急勾配を以て進み、更に右方に向ひ又左に轉じ、斯くして絶頂に達すれば、悉德尼停車場より高さこと三千五百呎なり、溪谷深林の間に出没し、斷岩絶壁を迂回登攀して最も奇觀たり。

初め此工事を施すに當て一墜道あり、斷岩空に聳え甚だ危險なるを以て之れを除去せんとし、三噸半の火藥を墜道内に裝填し、電線を導きて爆發せしむ、之れを執行するに儀式的を以てし、「ヘルモア」夫人の臨場を請ひ、夫人手づから電線に

指頭を觸れ電氣を通ずれば轟然爆發して、巨岩片々として飛散せり。  
 フルー山の他端リスゴー溪谷に降る坂路も亦甚だ困難を極め更に大なる電光形  
 を造り容易に上下することを得るに至り、而して南方アルパニーに達する鉄道も  
 彼のスタート、ヒューム、及びミツチエル等の數週間勞苦して探檢したる經路に沿ふ  
 て布設し、今や僅かに短時日を以て往來することを得るに至れり。

**四、悉德尼博覽會。** 千八百七十二年二月太守ベルモア去り、同年六月三日  
 ロード、ロスミード之れに代はり、而して千八百七十九年新西蘭の太守に轉じ、同年  
 八月三日ロード、ロフタス代て太守となれり、此間殖民地は著しく發達して、鉄道は  
 廿有餘の枝線を有し、電線恰も蛛網の如く、羊は増加して四千萬頭に達し、小麥、玉  
 蜀黍の耕作は殆んど五十萬「エーカー」に擴がり、果樹、菜園、各種製造所及び金、銀、錫  
 石炭等の殖産勃興して、人口百萬を超過し、坤輿上繁榮の地として誇るに至れり。  
 此に於て千八百七十九年萬國博覽會を開設して、自國産業を各國に比較對照し、  
 滋々之れが獎勵を圖れり、而して會場は悉德尼江上植物園の小丘上にして、建築

頗る優美にして輪煥の美を極め、閉會後永く市の壯嚴として保存せんとせしが、  
 不幸火災に罹りて烏有に歸せり。

**五、外國遠征。** 英軍と聯合して蘇丹戰爭に参加せんとし、新南威耳斯政府は  
 軍隊を派遣せんとして本國政府の承認を求め、七八百名盛んに武備を整へて亞  
 非利加に出征せり。

然れども其武勇を振ふべき機會を得ずして終局を告げたるを以て、赫々たる榮  
 譽を輝かすこと能はざりしと雖ども、終始母國と運命を共にすべき殖民の赤誠  
 は、此行動に依て證することを得べし、蓋し此出兵は主としてシー、ビー、ダッリーの  
 方寸に出でたる者なり、而して政海に在ては老實なるサー、ヘンリー、パークスあり  
 て領袖と仰がれ自由貿易主義を唱へ又濠洲聯邦を主張して、能く國家の發展に  
 努力せり。

**六、太守キヤーリングトン** 千八百八十五年十一月ロフタス滿期辭任し、同  
 年十二月十二日ロード、キヤーリングトン太守となれり、資性懇篤普く人望を博し大

に濠洲聯邦を賛成し、之れを以て殖民地を強固ならしむる唯一の方策なりと確信し、又能く憲法を恪守して國民の權利を助長せり、千八百九十年任滿ちてアー、ル、オブ、ジャーゼー代れり。

七、太守 ジャーゼー 夙夜殖民地の發達安寧を憂慮し、其幸福を増進せんが爲めに専ら獎勵補助を與へ、州民舉りて敬服せり。

在職中聯邦會議を開設し、「センチニアル」會堂に於て瀕りに聯邦の必要を論述せり、千八百九十三年私事止むなく故國に退隱せり。

八、聯邦 太守 ダブは之れに代りたれども千八百九十五年達斯馬尼に旅行中病に罹りて逝き、同年六月十七日ハムブデン子爵太守となり頗る満足なる成績を奏し、千八百九十九年ロード、ボーチャムプと交代せり。

千九百年南阿戰爭の起るや、本國政府の要求に依て義勇兵を組織して出兵せり、而してボーチャムプの職を辭するや、サー、エフ、エム、グレイ代理事務を取扱ひ、千九百一年一月一日濠洲聯邦成て直に之れに加盟し、同月廿九日サー、ロインン太守に任

ぜられたり。

同年の統計に據れば土地、家屋、鉄道三千二百八十哩、余其他政府に屬する財産は五億一千五百二十七萬磅にして、歳入千〇六十一萬二千四百廿二磅、而して耕地面積は二百四十四萬五千五百六十四「エーカー」あり、又製造所三千四百七十六ヶ所、職工六萬五千六百三十三人、此資本金千九百九十七萬九千五百四磅なり、同年輸入額は二千六百九十二萬八千二百十八磅、輸出は二千七百三十五萬千二百二十四磅、入港船舶三千四百五十二艘、此噸數四百十九萬六千四百〇八噸なり。

### 第拾六章 (一) 達斯馬尼州 (自千八百三年至千八百卅六年)

一、殖民地の創設 ボーデンの悉德尼を去るや、佛國は濠洲に殖民地を設立せんとして、フアン、デー、メンス、ランドの暴風灣ボームベと稱する江灣を撰擇せんとする意思あるを發見せり、該地は草木鬱蒼として頗る膏腴なり、而して當時既に達斯馬尼は大陸を離るゝ環海の一孤島たるを探檢したるが故に、太守 キングは後難を恐

れて直に遠征隊を派遣して其占領を確實ならしめんとし、海軍中尉ジョン・ポーウエンを撰任して指揮官となし、軍人八名を随へ、レデー、ネルソンに號に搭乘し別に「アルビオン」と稱する捕鯨船を雇船して、自由民六名及び囚徒廿四名を送りて殖民地を創設せしめたり、之れ甚だ少數なりと雖ども權利を證據立つるには充分なりと云ふべし。

太守キングは此殖民地を建設するに又他に目的あり、則ち悉德尼に在る重罪犯囚徒は大概ね兇惡にして常に困難を醸生するを以て、之れを隔離して嚴重に監守すべき必要を感ぜり。

千八百〇三年十一月二艘の船舶は暴風海に到着し、デルウエント河口を溯りポーウエン中尉は江灣の右方リスドン、カウと稱する一小江に投錨して、河流の後方牧草青青たる小丘に上り、天幕を張り囚徒に命じて漸次小舎を建築せしめ、其間自ら附近を探検し、須臾にして一小村落を現出せり、名付てホバートと稱す、之れ殖民局長官ロード・ホバートの名に因れり、而して一ヶ月ならずして太守キングは更に

軍人十五名、罪囚四十二名を送りて勢力を増加せしめ、又他に一大増加ありて人口漸く稠密となるに至れり。

二、コリンス 同年英國政府も亦佛國の占領を掛念して、ポルト、フリップに殖民地を設立せんと決定し、當時偶々悉德尼殖民地裁判官ダグキッド、コリンス英國に來遊せしを以て、新殖民地の副太守に任じ、軍人五十一名、自由民十三名及び囚徒三百七名、其妻廿四名を、カルカッタ及びオーションと稱する二艘に搭載して派遣せり。

初めコリンスはポルト、フリップに到り、ツルレントの地域附近に殖民せんとせしも、海濱砂礫多く甚だ不適當なるを以て、千八百四拾年該地を撤回して全殖民をデルウエント河岸に移し、二月十五日リスドンに上陸して暫時探検を試み、更に對岸にある一小江を撰び江口を溯ること六英里の處に移住せり。

此に於てウエリントン山の麓、ホバート市街は劇かに活氣を呈し、續々家屋は建築せられ、其方法頗る拙速にして直に丸木を打込んで柱となし、樹枝を編み泥土を

塗りて壁を作り、而して屋根は草を以て葺き、烟突は石を重ねたるに過ぎず、斯くして新市街は發生し、又軍人及び囚徒はリストンに於て耕作に従事せり。然るに五月に至り無端土人と衝突せり、初め數百の土人漂泊し來りて、圖らず此處に白人を見て、奇異の感に打たれたる者の如く、大聲疾呼異様の手眞似をなせり、英人は之れを目して襲撃の合圖ならんと考へ、直に發砲し逃るを追ふて三十余人を殺戮せり、之れ其發端にして爾來争闘絶ゆることなく、遂に該種族を全滅せしむるに至れり。

**三、種族** 達斯馬尼種族は軀幹最大の人種と稱せられ、濠洲本土に於ける土人よりも古く、前述千八百三年より同三十二年に至る間の戦闘に於て大概殺戮せられ、殖民の當時數千人なりしが千八百五十四年に至りては其數十六人に減少せり、此を於て土蕃保護協會は其保存を圖り、猶且教育を施して文明に導かんと努めたりしが、却て滅失の傾向を來し、千八百七十六年五月トルガニニと稱する者七十三才にて歿せり、之れを該種族の最終の者なりとす。

**四、ベターソン** 悉德尼政府は達斯馬尼の北方に一殖民地を設立する目的を以て陸軍大佐ベターソンに囚徒の一團を附して送れり、而して其撰擇したる場所はポード、ダルリンフルの江口附近にして、其後八ヶ年間則ち千八百十二年に至る迄は恰も獨立の如く孤立し、同年に至り初めてホバート市に在る太守の監督に屬せり。

**五、コリンズの死去** 漸を追ふて殖民地は繁榮に赴き、千八百八年ブライの悉德尼より逃れ來りたるときは既に愉快なる一小市街を成せり、而して千八百十年温良懇篤の譽れ高き太守コリンズは一友と對座快談中、突然卒倒して死去せり、殖民地創設に際して専心經營怠らず治績頗る歴然たり。

**六、太守ダヴェー** コリンズ死去して其報英國に達し繼承者來る迄凡そ三ヶ年を経過せり、其間ロード、マレー及びグイルズの三人代理補欠をなし、千八百十三年海軍大佐ダヴェー太守として赴任せり、然れども軍人として適材たるべきも決して治民の器にあらず、粗野頗る無頓着にして天候暖かなれば、常に上衣を脱



して市街を濶歩し、敢て風俗習慣を省みず、然れども在職中殖民地は自然に發達の運に向ひ、其第一年港灣を開きて一般商船の出入を許可せり、元來重罪犯の徒刑地なるが故に、自由民は特に承認を得るに非らざれば上陸すること能はざりしが、此時より自由民漸く増加して耕作又大に行はれ、千八百十六年に至ては自國の需用を充たし、猶ほ剩餘を悉德尼等に輸出するに至り、從て商業著しく發達せり。

**七、新ノーフオルク** 千八百七年ノーフオルク島に於ける殖民地は英國政府之れを廢止せり、而して其囚徒は改心して良農となりたる者多く、之れを達斯馬尼に移してデルウエントに新殖民地を造れり、之れホバートを距る十五哩の處に在りて紀念の爲め新ノーフオルクと名稱せり。

**八、山賊** 當時殖民地は盜賊の跋扈甚しく其難を蒙むる者頻繁なり、毎年二十名乃至四十名は逃走して該島中央に在る湖水の附近寂寥たる地方に遁れ、或は西方山間に隠れて山岩を構へ、或は土人と共に住居して彼等に惡事を教へて

獸類の如く取扱ひ、其使役に適せざる者は忽ち銃殺す、故に土人は總て白人を敵視するに至れり、而して常に彼等を卒わて農家を襲ひ、奪掠殺傷到らざるなく、從て農家は警誠を怠らず、皆其家人に武器の用法を教へ、障壁に銃眼を設けて狙撃に便ならしむ。

**九、太守ソーレル** 千八百十七年太守ダウエーは職を辭しホバート附近に居をトして土着し、ソーレル大佐代て太守となり、先づ其盜賊を掃蕩せんことを企てたり、而して其方略稍々功を奏し、殖民多少愁眉を開きたり。

農業漸次發達して收益倍々多く、就中小麥の輸出大に増加し、又最良種の羊を飼育して頗る順境に發達し、製造家は争ふて之れを高價に購入す、當初達斯馬尼産羊毛は英國市場に於て輕んぜられ、僅かに臥褥の材料に使用するに過ぎざりしが、漸次聲價を高むるに至れり、斯くして殖民の多數は財を蓄へ、其財源たる土地も比較的價格を持ち、建國第十六年に至ては繁榮倍々顯著なるに至れり、而して他に又財源を發見せり、捕鯨事業之れなり、嘗て一商船の船長悉德尼に航

行中達斯馬尼の西方沖合に於て鯨の一大群集を目撃せしを以て、新南威耳斯太守に謀り密かに捕鯨遠征を出すの計畫を企てたり、然れども其水夫も亦之れを見たるを以て、其事實は世上に流布するに至り、該船長の出帆せんとせし時に同一の目的に出づる船舶少からず、然して皆共に成効したるを以て爾來捕鯨船舶劇かに増加せり、而してホバートは之れが爲めに最も便利なる位置を占むるが故に捕鯨者は鯨油を此處に持來り、又糧食を購入して船舶を繕装し出入常に絶えず、此一小市街は忽ち實質的發動を受くるに至れり。

此の發達は大に太守ソレルの敏腕に依る所少からず、而して大守は又能く囚徒を改善し、自由民の意思を高尙ならしむることを努めたり、此を於て千八百二十四年滿期となるや、殖民は擧りて英國政府に對して尙ほ六ヶ年間の留任を請願せり、然れども聞届けられず、之れ必竟他に氏を必要とする所以なりとの回答を得たるを以て、五百磅の年金を呈して以て感謝の意を表せり。

一〇、太守アーサー 然れどもソレル大佐の去りたるときは未だ山賊を

殲滅すること能はず、千八百二十四年太守アーサーの到着するや、再び彼等の横行甚しく、殖民地は將に退歩せんとするが如き有様となれり、而して幾干もなく十三四名の囚徒端舟に乘じ逃れて沿岸寂寥たる所に隠れ、彼等悉く合して一團となり、クローフォード及びブラデーの兩人之れが巨魁となりて蠻行到らざるなく、殖民爲めに大に恐怖せり。

或時十二名の一群テラーなる老紳士の住所を切かせり、然れどもテラー勇を振ふて能く闘ひ、男子三人あり及び大工、家僕等と共に侵入し來る賊徒を狙撃し、子女は傍らに在て銃の裝填をなして父を援け、必死に防戦したるを以て、巨魁シロフオード以下兩三名の負傷者を遺して逃走せり、故に直ちに之れを捕縛してホバートに送置の刑に處せり、此に於て大に其勢力を滅殺したりと雖も、ブラデーは依然巨魁となり盛んに掠奪を行へり。

彼等はシャンノン河岸の寂寥たる森林中に深く隠れ、軍隊を以て攻撃するも、險峻なる山間に入て抵抗するが故に、容易に掃蕩すること能はず、爲めに久しく地方

は衰頽に赴き、産業殆んど廢止せられんとするに至れり、此に於て太守アーサーは一計を案じ、自首する者には赦免を與へ、無貨本國に送還すべきを約せり、依て降参し來る者續々踵を接し、遂にブラデー一人となれり、彼は單身溪谷に彷徨せしが、突然ジョン・バットマンに追撃せられ、進退維れ谷まゝりて遂に降参して死刑に處せられ、山賊全く跡を絶つに至り、殖民初めて安眠することを得るに至れり。

一、分離。此時に至る迄達斯馬尼は新南威耳斯の所屬に過ぎざりしが、千八百二十五年分離して一州となり、自ら高等法院を設け、千八百二十九年代議政體を組織し、十五名の議員を任命して太守と商議し、法律を制定す、爾來數年間靜穩にして確實なる發達をなせり。

ホバート市街は漸く繁盛に赴き、宏壯なる家屋は建設せられ、市街頗る整然たり、而して地方は耕作能く行はれ、普く劃柵を施し、又適路橋梁等を修築せり、然れども殖民地に於ける唯一の困難は貨幣の不足にして、代用貨幣として六片或は一志の金額をも手形を使用するが如く、大に正貨の欠乏を來したるを以て、太守アー

サーは十萬磅の貨幣を英國に請求して流通せしめたり、而して千八百三十六年太守アーサー任滿て歸國するや、住民は大に之れを惜み、感謝狀に千五百磅を添へて贈呈せり。

### 第十七章 (三) 達斯馬尼州 (自千八百三十七年至千九百一年)

一、太守フランクリン。千八百三十七年サー・ジョン・フランクリン代て太守となり、北極探險を以て著名なり、又嘗て海軍少尉試補にてフリンドグースの部下に在り、濠洲沿岸の探險に従事し、後數年間學術研究の爲め英國海軍に入れり、而して今や太守と成りて赴任し、大に成效を期待せりと雖ども、必しも豫想の好果を收むること能はず、誠實澁白なる行爲は善く、殖民の歡心を求め得たりとするも、行政上屢々嚴酷に失するの嫌あるを免れず、折柄達斯馬尼に於ける三十年間引續きたる不景氣は實に此時より始まれり。

二、囚徒の激流。千八百四十年新南威耳斯に囚徒の輸送を廢止したるを

以て當州も同様ならんと豫期して自由民も漸く増加するに至りたるが達斯馬  
厄は獨り重罪犯の受審として依然罪囚殖民地たることに決し、従前各州に分配  
せられたる者も悉く此處に集注するに至れり、而して囚徒の勞銀は甚だ廉なる  
が故に自由民の困難を醸成し、賃銀下落して到底妻子を養ふこと能はざるを以  
て、續々他州に移住するに至れり、此に於て刻苦勉勵なる自由民を失ひ、單に徒刑  
場として劣等なる位置に沈淪せり。

千八百四十二年殖民次官ロード、スタンレーは囚徒の取扱に關して新案を提出せ  
り、其方案たる罪人を犯罪の輕重に依て等級を定め、成る可く一ヶ所に集合せし  
めず、各地に分配して滿期に至る迄は充分監視を行ふに在り、故に之れを監視法  
と稱せり、然れども少數に區分して各地に散在せしむるときは、監督困難にして  
到底逃走を免れずとの反對を生ぜり。

三、フランクリンの困難。島民の太守フランクリンに對する感情は、夫人の内  
助に依て大に融和せられたり、フランクリン夫人は快活高潔にして又自ら財産を

所有し、之れを適宜に使用せるを以て簡人的尊敬を得たりと雖も、太守として其  
執政上に至ては決して然らず、前太守に二人の甥あり一人をモンテギューと云ひ、  
秘書官長として大勢力を有し遙かに太守フランクリンを凌駕し、兩者全然反目の  
間に在り、而してモンテギューは極力反抗して遂に貶斥禮を失する一書を送りた  
るを以て、太守は彼を免職せり、然れども其才幹あるを認むるが故に太守は自ら  
書をロード、スタンレーに寄せて、他に彼れを採用せられんことを推薦せり、而して  
次官スタンレーは其書を手にするや、之れ却てモンテギューの適任者たるを證する  
者なりとし、免職の日より依然俸給を與ふべしと命令せしのみならず、突然サー  
アルドレー、ウキルモット來りて太守の職に就き、千八百四十三年フランクリンは歸國  
するの止を得ざるに至れり。

後二年を経てフランクリンは北米に探檢を企て、寒帯を通過して太平洋に出づる  
航路を發見せんとし、エルバス及び「テラー」の二艘を卒わて北極結氷地方に入り、  
爾來數年を経れども何等の消息を得ず、此に於て夫人は自ら搜索を行ひたれど

も遂に絶望せり、其後紙片及び帽子の破片等を發見して全員悉く凍死せしことを確むるを得たり。

**四、太守ウキルモット** サイ、アードレー、ウキルモットは英國議會に於て辨論家を以て著はれ、新南威耳斯の太守ブライ及びギブス等の如く、囚徒と自由民を同時に支配するの不可なるを悟れり、而して囚徒は一度満期放免となるも多くは再び罪惡を犯すが故に、警邏は常に之れに注意せざる可らず、從て警察は勿論裁判所及び獄舎等の必要を増加し、徒らに殖民の重擔を加ふるのみ、唯々公共事業に無賃にて使役せしむる便益あるに過ぎず、然るにロード、スタンレーは命令を發して自今囚徒の勞力に對しても相當の報酬を與ふべしと決せり、此に於て異論紛々自由民は大に不平を訴へたりと雖ども、ロード、スタンレーは終始達斯馬尼は囚徒移往地たるを以て論據とせり。

而して太守ウキルモットは警察費及び牢獄維持の爲めに借入金金を爲さんことを上院に提出せり、幸以上院議員は多數政府員にして太守に畏服するが故に可決

せりと雖ども、六名の議員は之れを以て殖民地に害ある者なりとし大に反對せり、而して太守は其斷行を決したるを以て一同辭職せり、之れを「愛國六士」と稱し殖民大に敬服せり、此時恰もグランドストーンはロード、スタンレーに代て殖民次官となり、太守ウキルモットは本國官權を欺くが如き曖昧なる陳述を送りたるを以て直に召還の命を受け、其後二三月にして病に罹り遂に殖民地に於て歿せり。

**五、太守デニソン及び罪囚輸送問題** 千八百四十七年サイ、ウキリヤム、

デニソン赴任し、女皇の命を以て愛國六士を復職せしめたり、此に於て殖民は此勅命に依て大に感激し、更に二大宿望を貫徹せんとせり、則ち代議政体及び罪囚輸送の廢止之れなり、而して千八百四十六年より同五十年に至る間、二萬五千の囚徒は達斯馬尼に輸送せられ自由移民は途絶せり、故に囚徒の數は自由民に二倍し、世界何處を問はず若し達斯馬尼より來りたりと云へば、忽ち忌憚せられ殆んど信用を措く者なきに至れり。

マクラクランは倫敦に赴きてグランドストーンに建白し、同時に又ピットケヤンは帝國官

權に請願したるを以て其結果太守デニソンは住民一致悉く之れが廢止を望むや否やを研究すべきことを命ぜられたり此に於て該諸間に對し各地法官を経て一般住民の意見を徴せるを以て議論愈々沸騰して黨派的感情を惹起するに至れり元來其附帶する商業に依て利益する者囚徒輸送の爲めに政府の保助を受くる者或は囚徒を使役して廉價なる賃銀の爲めに利益する者等ありて是等は皆其繼續を希望するは勿論なりと雖ども多數は其廢止に賛成なるを以て輸送全廢を希望すとの回答を送りたるを以て直に其承認を與へたり然れどもアールグレーは更に囚徒取扱に關する方法を改正し英國牢獄に於て一定の期間を經過し改心と認むる者を殖民地に送り自由民として上陸せしむるに在り然れども狡猾なる罪囚は殊勝を裝ひて殖民地に到て自由となるや忽ち罪惡を犯すべきや必せり

千八百四十九年アールグレーは囚徒に好機會を與へんとし「ランドル」號に彼等を滿載して輕送し該船先づポート、フリップ灣頭に現はれたり麥普尼住民は其入港を拒絶せりと雖ども船長は聞かざる者の如くウキリヤムスタウン灣に到りて上陸せしめんとするや殖民の激昂甚しく大に抵抗を示したるを以て「ラトロップ」の勸告を請はんとして悉德尼に航せり然れども該地に於ても同様に於て住民は「サーキユラ」に大集會を催し之れ輸送の復活をなす者なりとし非常に抗議せり而して各州同一の態度を探りしが獨り西濱州は之れを承諾したるを以て遂に大に後難を醸せり

**六、非輸送同盟** 他殖民地舉りて罪囚を拒絶し而して赦免狀を有する者にして維多利及び新南威耳斯等に渡航する恐れあるが故に達斯馬尼を援助する傾向を見はし千八百五十一年一大非輸送同盟を組織せり偶々金鑛發見に際し大に同盟の勢力を助け英國政府も囚徒の金鑛地方に入込むべき恐あるを思ひ斷然之れを廢止せんとするに至れり

**七、輸送の終止** 千八百五十年達斯馬尼も亦他州に於けるが如く上院を設けたるが故に非輸送同盟に賛成せざる者は選舉せざることに決議し英國官

權も既に時期を洞察して新任次官ニューカッスル候爵は千八百五十三年以降達斯馬尼に全然其輸送を廢止すべき命令を發せり。

**八、名稱の改正。** 此時に至る迄該島はフアン、デーメンズ、ラントと稱せしが、其名稱たる重罪犯囚徒と聯想して人口に喰炙せしが故に其發見者の名を選びて現今の名稱則ち達斯馬尼と改稱せり。

**九、太守及び責任内閣。** 千八百五十五年南澤州の前太守サー、ヘンリー、ヤングは太守に任命せられて千八百六十一年に至る迄職に在り、此間責任内閣の創設ありて各種の改良行はれ、上院は新に憲法の制定を企て、指名を廢して兩院共に民選に依ることとせり。

ヤングの後大佐、フロン、デューケーン及びウエルド相次て太守となれり、共に伎倆才幹に乏しからず、頗る人望を博せり。

千八百八十一年十二月サー、ジョン、ストラハン太守となり、名聲噴々、千八百八十六年十二月英國に歸り翌年二月病歿せり。

千八百八十七年三月十一日サー、ロバート、シー、ハミルトン太守となり、同九十二年十月滿期歸國して翌年八月八日ゴルマンストン子爵赴往し、千九百年十一月に於て滿期となりサー、ドッド代理せり。

**一〇、實業の發展。** 千八百六十三年土地條例を規定して農夫に便益を與へて以て企業家を誘導し、又鐵道の敷設を爲す諸會社を獎勵し、而して盛んに金及び其他の礦物の搜索を行へり。

此の如く幾多の獎勵保護を與ふると雖ども人口漸次減少せり、之れ大陸に於ける金礦發見の結果に外ならず、而して一般の情況大陸各州に於けるが如く活潑ならず、寧ろ閑雅なる田舎の景色に彷彿たる者ありて、嘗て猛惡なる重罪犯の受容たる達斯馬尼は、却て殖民地中最も道徳堅固にして温厚なる國柄となれり、晩近更に一大發展をなし人口頓に増加して十七萬人以上に達し、而して鑛業より生ずる利源夥しく、就中錫は非常に豊富にして該島の西方部に擴がり、金礦も亦尠からず、今や無職に苦しむものなく、尙ほ充分なる餘地を存し、將來の發達倍々

確然たり。

千九百一年の歳入は十二萬六千六百六十三磅、鉄道の延長大凡六百哩、輸入百九十六萬九千九百九十九磅、而して輸出二百九十四萬五千七百五十七磅に達せり。

第拾八章 (一) 維多利州 (自千八百零一年至千八百四十年)

一 ポート、フネリッブの發見。千七百九十八年、バス海峽の發見は濠洲航路を短縮せり、此に於て英國政府は海軍中尉グラントを派遣し、レデー、ネルソン號を以て全航路の探検を行はしめ、先づ維多利及び新南威耳斯の境に到着し、グラントは該處をノーザンバールランド岬と命名し、次てネルソン岬、ポートランド灣及びシヤンク岬等其沿岸處々に名稱を附し、遂に悉德尼に到り、太守キングに面會し、一江灣を指示して其甚だ重要なるを物語れり、然れども未だ充分之れが精測を行ふこと能はざりき。

千八百二年に至り、太守キングはマーレー中尉を指揮官となし、レデー、ネルソン號を派遣して該江灣を探検せしむ、而してマーレー中尉は探検の結果該港灣は非常に遠淺なれども一條通路あるを發見し、且つ海岸一帶風景絶佳頗る豊饒なることを報告せり、此に於て太守キングは嘗て自己の長官にして初めて濠洲の太守となりたるキャプテン、フネリッブを肥臆するが爲めに其名を付したり、而して其後六十日を経てフリンダースも亦此地に來れり、而してフリンダースは後に至り己れ其第一發見者ならざることを知て一驚を喫せりと云ふ。

太守キングは佛國の侵入を掛念して、更に精細に探検せんとし、カンバールランド號を以てロビンス監督の下に測量總監チャールス、グライム、技師マッカラム、助手ミーハン及び農業上の探検をなさしむるが爲めに滿期囚徒フレミングトソン等を派遣せり、而して一行ポート、フネリッブに到着するや、規則正しく測量を行ひ、ロビンスは江灣の深淺を測りて精密なる海圖を調べ、他四人の者は毎朝上陸して内地を探検し、毎日十哩乃至十五哩を歩行し、夕景に至て歸船し、斯くしてソルレント、近傍よりグライトンを迂回してヤラ河に達し、次て江灣に沿ふてジーロンに至り、充分探検



して完全なる海圖及び重要なる報告を齎し太守に呈せり、故に若し本國より遠征隊を派遣せずんば、自ら一團を送りて殖民せしならん。

二、太守コリンス 之れより先き本國政府はダヴキト、コリンスに遠征を命じ、四百人を附し内三百名は囚徒にして、最初達斯馬尼のダルウエントに殖民を爲す企てなりしも、豫めポート、フキリップに來れり、而してソルレントの海岸に殖民地を選びたれども、一滴の淡水を得ること能はず、中夏赫灼たる日光に晒され到底其不可能なるを感じ、コリンスは他に移轉せんとし、ダツケー中尉をして沿岸を搜索せしめたり、然れども一の河流だも發見すること能はず、加之土人の襲撃を受け爲めに陸上の探検を阻碍せられ、又海上に在ては暴風雨に出遇ふて空しく歸り來りたるを以て、一行大に失望して彌々煩悶を來せり、唯々無心にして喜戯するは囚徒の伴ふ兒童數名のみ、中にジョン、バスコー、フオークナーなる一少年あり、後世ポート、フキリップの歴史上に其名を著はすに至れり。

斯の如く困難名狀すべからざるに至り、コリンスは端舟を派して悉德尼に書狀を送りて救助を求めたるを以て、太守キングは達斯馬尼に渡航を許可せり、此に於て直にダルウエントに殖民するに至れり、而して其出帆前四名の囚徒脱走して悉德尼に赴かんとして森林中に遁入せりと雖ども、一人は疲勞して歸航し、二人は其行方を知らず蓋し餓死せしならん、他一人は三十二年を経過したる後其運命を知るを得たり。

三、ウエスタルン、ポート、ヒューム及びホーヴェルの探検を終りて歸悉するや、ホーヴェルは其目撃したる良好なる江灣は之れをウエスタルン、ポートなりと主張せりとは雖ども、實際は現今のジョーロンにして蓋し其觀測を誤りたるなり、然れども其報告に基きキャプテン、ライトに遠征隊を組織せしめ、ホーヴェルを伴ひ該處に殖民地を設立せしめんが爲めに派遣せり、一行先づフキリップ島に上陸せりと雖ども、永久的河流の欠乏するを以て、東方海岸の本土に渡り、此處に木造及び煉瓦造の屋舎數棟を建築せり、此時初めてホーヴェルは以前目撃したる所はウエスタルン、ポートに非ざることを悟れり、而して此殖民地は殆んど一ヶ年間熱心に發

達を企てたれども到底不適當なるを以て遂に之れを撤回するの止むを得ざるに至れり。

然れども達斯馬尼に在ては羊の數漸次増加し甚だ狹隘を感ずるに至りたるを以て、ジョン・バトマンは維多利地方に群羊を送りて飼養せんとし、達斯馬尼牧畜業者間に組合を組織せんことを企圖せり。

四、バトマン。 ジョン・バトマンは新南威耳斯州 バラマッタに生れ、二十一歳の時 達斯馬尼に渡り、ベン・ローモンド附近に地所を選び牧羊に従事せり、然れども性來冒險企業の精神に富むが故に、殖民地の困難なる狀況に憤慨し、嘗て彼の山賊の張本 ブラデーを捕縛し、或は土人との争闘に關しても幹旋能く努めて、遂に彼等を降服せしめたり、斯くして幾多の困難を排除し専心牧羊に従事せり、然れども土地大概石礫牧畜に適する所狹隘なるを以て、千八百二十七年友人 グリブランドなる者と共に ウエスタルン、ポート附近に土地の交附を請願せり、而して 悉德尼太守は之れを却下したるを以て、千八百三十四年許可を得ずして之れを決行せんと

し、八名より成る一組合を組織せり、勿論豫め探檢の必要を認め、自ら其選に當り、該組合は之れが爲めに、レベッカと稱する小船を備ひて出發せしめ、海上暴風に遭遇し日數十九日を費して、千八百三十五年五月二十九日辛ふして ポート・フキリッに入ることを得たり。

翌日 ジローン附近に上陸して、パライブル小丘の頂に登り、雜草を踏破して四方に探檢を試み、更に翌日に至り土人を搜索し適々婦女子二十名許の一群に出會したるを以て、鏡、毛布、手巾、林檎、砂糖等を施與して之れが歡心を求めたり。

五、ヤーラ河。一兩日後、レベッカ號は ホブソン灣に碇泊せり、則ち現今の ウキリヤムスタウンの前面なり、而して河流あるを認めたるが故に、之れを探檢せんが爲めに出立し、十四名を卒ゐて武装せしめ、河流の左岸を進みたれども本流に出づること能はず、ソルトウォーターに向ひ、牧草青々たる廣野を過ぎること二日にして サンブリー附近に達し、一小丘上に登れば前方遙か二十哩許、東南に當て火烟を望みたるを以て其方向に進むや、途中妻子三人を伴ふ土人に遭遇せり、而して彼等

は既にジロン附近に於て物品を施與したることを傳聞せるが故に、喜んで一行を導きメーリー、クリックの河岸に在る其部落に入り、稍々小奇麗なる茅舎に案内して大に歡待せり。

翌朝土地を購入せんことを談じ、合意に依て剪刀、小刀、毛布、鏡等の物品を以てメーリー、クリックよりジロンに至る一帶の地方を交換せり、此に於てバトマンは證書を作成して土人と共にノースコード、ヒルの小丘に登り、コリンウードの平原及びカールトン、ブリックロイ等の森林を望見し、面積六十萬「エーカー」の地を指示して證書に印影を押捺せしめ、以て有効に所有權を獲得せる者と認め、樹木に刻して境界を劃定し、午後に至り別を告げて出立せり。

行くこと里許、一大沼澤に遮られて進むこと能はず、護謨樹の繁茂せる樹陰に宿泊せり、之れ現今繁華なる西部麥普尼の在る所なり、而して翌朝迂回して路を索めムントラターに達せんとして、圖らず滔々たる河流に出てたり、之れ則ちヤラ河にして晚景漸く歸船することを得たり。

翌日端艇を浮べてヤラ河を溯り浩然たる飛瀑を發見し、日誌に記して曰く、之れ將來必らず一村落を現出すべき處なり」と、今や則ち一大繁華なる市街たり。

ポート、フキリップ海頭附近インデンテッド、ヘッドに歐人三名及び土人一名を留めて、取得したる土地を管理して開墾に着手せしめ、バトマンは組合員と共に家族及び群羊を卒ゐて移住せんが爲めに達斯馬尼に歸航せり。

六、ヘンチー兄弟。然れども之れより先き既に早く開墾なる一殖民地は維多利の西部に設立せられたり、則ち千八百廿八年海豹漁獵者はポートランド灣に住し、家屋を建て庭園を築き宛然一漁村を成せり、然れども英國政府は之れを侵入者と見做して敢て法律上の權利を認めず、而して又千八百三十四年に至りヘンチー兄弟三人エドワード、スチーヴン、及びフランクなる者來り住せり、其父は相當の財産を有し千八百二十八年家族及び數多の牧畜を卒ゐて、當初西濱州に移住せりと雖ども、スワン河畔の到底殖民に適せざるを認め、達斯馬尼に移り該島に六人の子を土着せしめたり。

須臾にして達斯馬尼も亦牧場自ら限りあるを知り、エドワードは嘗て航海中ポーランド灣に於て漁村を認め、又灣内鯨鯨多く、陸地は綠草繁茂せるを目撃せしを以て、「シストル」と稱する一船を備ひ家僕及び牧畜を卒めて該灣に移住し、フランク及びスチーヴンも亦相次て來り、牧畜及び其監督者をも伴ひ家屋を建設し土地を耕作せり、就中捕鯨の利益最も多く頗る巨額に達せり、而して五六年間ポートランド一帯の地方は移住者漸次増加せるを以て、英國政府は遂に土地を拂下て其所有權を公認し、千八百四十年以前既に繁榮なる一小市街となれり。

七、フ。オ。ク。ナ。ー。 ジョン、バスコー、フ。オ。ク。ナ。ーは千八百三年幼にしてソルレントに上陸し、達斯馬尼に於て成長せり、後ランセストンに住して旅舎を營み又一小新聞を發行せり、性質活潑敏捷頗る勤勉家にして、幼時教育の不足なるが故に、自ら之れを補はんが爲めに夙夜匪懈せり。

バトマンのランセストンに來て對岸維多利の狀況を報導するや、大に感激して別に組合を組織せんとし、五名の賛成者を得て、自費を以て「エンタープライズ」なる一帆船を僱ひ、家畜果樹、食料品、鋤鍬等の器具及び建築材料等凡そ殖民に必要な物品を積載して、千八百三十五年ランセストンを出帆せり、然れども偶々颶風に遇ひ三晝夜を経るも、未だ達斯馬尼の沿岸に在ることを知り、自己は上陸して船長ランセーなる者に委任せり。

船長ランセーは豫定の如くウエスタルン、ポートに到りたれども、地味好適ならざるを以て週航してホブソン灣に投錨し、端舟を浮べて前面に在る河流數哩を溯れり、河水鹽分を含みて飲用すべからず、依て之れをソルト、ウォーター（鹹水）と呼稱せり、而して翌朝再び其支流を探り進むこと一時半許にして風景絶佳なる流域に達せり、土地肥沃にして處々に淡水を湛へ、牧草青々たり、即ち此處に殖民せんと決し翌日船を曳て上陸せり、之れ現今税關の在る所なり。

其後數日ならずしてバトマン組合員ウエッチなる者インデペンテッド、ヘッドより來て、之れを見て一驚し直に交渉してバトマン會社の權利を侵害する者なりと抗議せり、然れども船長ランセーは其士人より買取りたる顛末を聞て、到底此の如き契約の

効力なきを反駁し、勵聲開墾に着手せり、故に二週間を経てウエッチも亦移民を伴ひ來り兩組合相對峙して宿營せり、之れ現今のコリンズ街の在る所なり、而してフオークナーは更に自ら移民及び建築材料等を輸送し來て、直にヤラ河岸に家屋を建築せり、即ちエリザベス街の在る所にして之れを麥普尼の初めて整然建設せらるゝ端緒なりとす。

ハ、ウキリヤム、バクレー。一日異形なる扮装を爲せる者突然インデンテット、ヘッドに在るバトマン組合を訪問せり、頭髮茫茫として梳らず、皮膚は茶褐色を帯び赤裸にして土人の武器を携帯せり、之れウキリヤム、バクレーと稱する者にして、既に記載せるが如く、嘗てコリンズ遠征隊中より脱走したる三名の囚徒中の生存者たり、彼は三十二年間土人と共に棲息し、毫も彼等に善良なる勸化を興ふることはざるのみならず、却て墮落して獸類に等しき生活を行へり、然れども白人來住せしを以てジロン部落は襲撃を企てたるを探知して、之れを密告せんが爲めに來りたるなり、此に於て彼を通辯となし土人との交渉を處理するを得て、常に

大に殖民地の建設に利益を興へたり。

### 九、達斯馬尼州の感激

バトマンの報告は住民に多大の激動を興へ、新開地搜索の爲めに續々渡航する者多く、其數二百人に達し、羊一萬五千頭以上はポルト、フキリップに上陸しジロンよりサンブリーに至る一帶の牧野に延蔓し、土人と共に雜居せり、然れども土人は漸くバトマン等の意思を悟り、復讐を企て屢々來襲せり、或時一牧畜家は其家僕と共に、ウエリビー附近に於て殺戮せられたるを以て、爾來大に警戒を加ふるに至れり。

一〇、太守ポーク。太守ポークは布告して曰く、噫味無智なる土人より購入せしと稱する土地は法律上決して効力なく、従てポルト、フキリップの移民は猥りに家屋を建築すべからずと、然れども移民は漸次牧畜を増加し市街をヤラ河畔に設立せり、而してバトマン組合は土人より讓受けたる土地の全部に對する權利は到底認可せられざるを知り、本國政府に交渉して既に放下したる資金の報酬として、二萬八千「エーカー」を得て以て満足せり。

一、ロンスデール 千八百三十六年の終に至り、太守 ポーク は新殖民地の設立を承認するの餘義なきを悟り、判官 キャプテン、ロンスデール に軍人三十名を附して派遣せり、而して翌年千八百三十七年太守自ら ポート、フキリップ を巡回せし時は、住民既に五百に達せり、此に於て太守は市區を劃策して町名を附し、又該市街を 麥普尼 と命名せり、蓋し當時英國宰相 ロード、メルボルン の名に因れり。

一、ラトロローヴ 千八百三十八年 ジーロン も亦た一市街として發生するに至り、住民は西方 コラク に達せり、翌年 ラトロローヴ は 監督官 の名稱を以て ポート、フキリップ 全區域の管理を命ぜられ、住民は マーケット 街に於ける競賣市場に公會を催ふし、熱誠を以て歓迎の意を表し、而して ラトロローヴ は稟賦卒直敦厚にして大に名望を得たり。

當時市街の状況は頗る殺風景にして、四名の巡査を任命し派出所を ウエスタルン、マーケット に置き、又裁判所、郵便局等の官衙及び各種の文明機關は漸を追ふて設立せられ、新聞紙は既に千八百三十八年 フォークナー 之れを發行して、アドヴァタイ

ザイ と稱せり。船舶の出入増加し殊に 達斯馬尼 との商業大に繁盛に赴き、人口は千八百三十九年より増加して翌年の初め 麥普尼 は人口三千、戸數五百、商店の數七十を有し、同四十一年に至りては人口一萬一千、家屋一千五百に達せり、而して創業者たる バトマン は殖民地の發達を見るの暇なく、千八百三十九年不圖感冒に罹り、愛嬢の看護を受けて空しく永眠せり、獨り フォークナー は老年に及ぶ迄能く大都會の發展を目撃せり。

第十九章 (二) 維多利州 (自千八百五十一年至千八百五十五年)

一、金鑽熱の結果 千八百四十一年以降 維多利州 は分離の必要を認め、百方經營之れが爲めに殆んど十年を費して素志を貫徹することを得、維多利女皇 は親ら其名を附與せられ、千八百五十一年獨立を宣言し、同年七月十六日 監督ラトロローヴ は太守に任ぜられ、偶々 金鑽發見 の成效を奏し、漸く大發展を爲すに至り

たるは既に之れを記述せり。

而して金鑛發見の當時數ヶ月間の情況に依て推すときは、到底勞働者の欠乏を來し従て賃銀暴騰せるが故に、勢ひ一般の産業は之れを廢止せざる可らず、爲めに却て百年の大計を誤るなからんかを杞憂せり、然れども千八百五十二年に至り歐洲より移住し來る者恰も激流の如く、此に於て各種の事業一時勃興し、加之千八百五十年の輸入は七十五萬磅に過ぎざりしが、三年の後は正に二十倍に達し、急劇なる人口の増加に伴ひ商業著しく發達せるが故に、猥りに採金に従事して徒勞に歸せんよりも、寧ろ確實なる固有の職業に安んずるの優れるに至れり、而して千八百五十二年政府の歲入は金鑛發見前に比して六倍し、翌年は十二倍に達せり、金鑛發見の結果朝野共に一大發展を爲すに至れり。

## 二、囚徒防遏條令

金鑛發見は夥しく各州より移民を誘引せると同時に、達斯馬尼より數百の囚徒入込み來れり、蓋し彼等は未だ刑期中なれども改心せし者と見做して保釋せられたる者多く、其金坑地方に至るや忽ち性來の悪行を

萌して遂に盜賊の群に入り掠奪を事とするに至る。

總て金塊を輸送するには武装したる護衛を附すると雖ども、山賊等も亦た巧みに之れを要撃して金陸を奪略す、或時ホブソン灣に碇泊せし「ネルソン」號に山賊亂入し、數を以て船員を脅迫して二萬四千磅の金塊を奪ひ去れり。

此の如き状態なるが故に千八百五十二年囚徒防遏條令なる者を發布せり、要するに囚徒は滿期放免を得たる者に非らざれば決して當州に入るを許さず、殊に達斯馬尼より來る者は上陸前陸に之れを檢し、其自由たるを確保せざる可からず、而して若し囚徒を輸送し來る船長は一人に付百磅の科料に處すと規定せり。

## 三、金鑛地方の景況

ニューレカグラヴェル及びカナチアン、リीडに於ける金鑛發見は、再びバラ、ットを繁盛ならしめ、而して又千八百五十三年ヤローウキに在る坑夫は殆んど四萬人に達し、旅舎及び劇場等を設け、寺院は山間斜面上に天幕を張りて布教を爲す、而して前面平坦なる場所は則ち金坑にして無慮百千の凹凸起伏して地上を蔽ひ、坑夫は隱見出沒して、遠く之れを望めば恰も蟻の群る

が如く、砂袋を擔ふあり、或は牛車を以て運ぶあり、陸續徑路を辿り、而して細流の河岸に到れば砂金を洗滌する者、列を連ねて兩岸數哩に亘り、流水爲めに黄色を呈す、之れ晝間の光景なり。

而して夕景事務所に於て號炮を發すれば一齊に作業を止め、忽ち萬餘の炊煙天に漲り、暫時沈靜食卓に對し、須臾にして夜に入り漸く喧噪となり、遂に放歌朗吟管絃沸くが如く、或は砂金を暗して博奕を行ふあり、或は酒房に痛飲夜を徹するあり、千態萬狀列擧すべからずと雖ども、比較的狂暴なる結果を生ずること少なく、能く勞苦を慰安せり、之れ金坑地方一般の光景なり。

**四、免許料。** 鑛夫は毎月一定の免許料を納付すべき規定にして、之れ較々重擔とする所なり、蓋し此課税たる鑛夫は必ず收入ある者と見做したる懸想に基因したる者にして、必竟意外の僥倖を獲たる者の常に針小棒大に喧傳するが故に生じたる結果なり、而して其實際に至ては普通勞働の賃銀より少なき者寧ろ多數を占め、其收益は一ヶ月平均一人に付八磅の割合にして坑夫は採金許可の

爲めに免許料毎月三十志を仕拂ふ規定なり、之れ其僥倖者には些少なりと雖ども、不幸收得なき者は仕拂ふの途なく、大概全數の五分の一以上は納付すること能はず、巡查は時々免許狀を檢して之れを持參せざる者は直に捕縛せり。

巡查は一週に二回坑夫狩を行ひ、職務執行上往々暴慢に失するが故に、坑夫の反抗を惹起することあり、加之或時オーヴェンに於て無免許者を苛酷に取扱ひ負傷せしめたるより、坑夫は一大會合を催して、免許料廢止の必要を論じ、太守ラトロに請願せしも、直に却下せられたるを以て、倍々強硬なる態度を持ち、千八百五十三年八月激昂の極點に達し、遂に不穩の形勢を呈したるより、俄かに免許料を減少して一ヶ月廿志となせり。

是を以て一時鎮靜に歸せしと雖ども、之れ明かに政府の弱點を曝露したる者にして、却て他日の果根を醸成せり、當時維多利の軍隊は甚だ微弱にして、萬一暴動等の發生することあらんか、到底如何とも爲すべからざる状態たり、而して坑夫中には無頼の徒多く、一獲千金を僥倖すること能はざれば徒らに太守を怨み、折



角免許料を減額するも何等の効驗なく、漸々不満の意氣を高め、將に一大破裂を來さんとする兆候あるに至りたるよりラトロウツは各州に援助を求めポバート第九十九聯隊は直に麥普尼に派遣を命ぜられたり。

**五、太守** ホザム 危急此の如きに迫りラトロウツは職を辭し、千八百五十四年六月サー、チャーレス、ホザム代て太守となり、赴任の當初は大に坑夫に同情を寄せたりと雖ども、數ヶ月にして其眞想を悟るに至り、偶々同年九十の兩月に亘りて非常なる旱魃あり、河流爲めに乾涸し、坑夫は飲料水は勿論砂金を洗滌する用水にも欠乏を來し、加之政府は金坑に軍隊を駐屯せしめ、士官は専ら事務員を幫助せしより、愈々忿懣を抱かしめ、遂に瑣々たる事件よりして、無端暴動を蜂起するに至れり。

**六、バラハットの暴動** スコビーと云ふ坑夫あり、一夜深更に及んでバラハットの「ベントレー」旅館の戸を叩きたれども、夜中既に閉鎖せるが故に理不盡に侵入せんとせしを以て、館主ベントレーは怒に乘じ格闘を始め、何者とも知れず闇に紛れ

鉄を以てスコビーの頭部を亂打して死に致せり、坑夫等はベントレーを加害者なりと告訴したるを以て捕縛せられ、法官デーヅキスの審問を受け幸に無罪となれり、然れども法官デーヅキスはベントレーと組合人たるの謂を以て勢ひ不公平を免れず、故に坑夫等は其判決に服せず、該旅館の前に群集し、ケネデーなる坑夫は蘇國辨を振ふて頗る過激なる演舌を試み、知友の鮮血を灑きたる現場を指示して憤慨禁せず、誓て復讐すべきことを斷言せり。

此に於て巡查數名派出せりと雖も、殆んど八千に近き群集に對しては徒らに愚弄せらるゝ而已、突然一兒童の戯れに石を抛て旅館の軒燈を破壊するや、巡查は周章犯人を搜索して之れを捕えんとしたるを以て、無端動機となり瓦礫飛んで急霰の如く、忽ち旅館に亂入して狼籍至らざるなくベントレーを搜索せり、然れども彼は既に馬に鞭て兵營内に逃込みたるを以て、火を放ち旅館を焼き拂ひ軍隊の繰出し來りたるときは一同既に退散せり。

**七、暴徒の就縛** 直に嫌疑者三名を捕縛して麥普尼に送り、有罪と認めて

徒刑に處し、次でベントレーも亦た再び審問に付し、法官デーヴキスは最早彼を庇護すること能はず、三ヶ年道路の苦役に處せり、而して太守ホザムはデーヴキスの職を罷めて百方坑夫を慰撫説諭せりと雖ども、遂に其効なくケネデー、ハムフレレー及びブラックの三名は代表者として太守に迫り、放火犯嫌疑者たる三名を赦免せられんことを要求せり。

太守ホザムは快よく彼等に面接せりと雖ども、文辭頗る妥當を欠き、抑も要求なる語は女皇を代表する太守に對して、甚だ潜越なるを以て該書狀を拒絶せり、然れども彼等も頑強にして字句の改訂を肯んせず、太守も亦た此の如くんば到底何等の回答を與ふるを得ずと通知せるを以て、彼等はバラ、ットに歸り一大集會を催ふし、ケネデー、ハムフレレー、ブラック、レーロー及びヴェルン等主謀となりて、悉く免許狀を焼き捨て最早免許料を拂はざることを議決せり。

**八、バラ、ットの反亂。** 軍隊及び坑夫間に衝突屢々起り、十一月三十日最後の坑夫狩を強行するや、軍隊及び巡查は大に退撃せられたり、而して坑夫等は公

然叛旗を翻し、青地に四隅銀星を現はしたるを旗幟となし、主謀者は其下に跪座して死を以て防戦すべきを誓ひ、坑夫を召集して練兵を始め、劇かに防禦工事を施し、レーロー頻りに叛徒を指揮して、晝夜武器の使用を練習せしめたり。

**九、ユーレカ要塞。** 太守ホザムは命を下して第九十九聯隊の殘部八百名を出兵せしめ、サー、ロバート、ニッケル之れに將たり、又淀泊軍艦の水兵及び巡查總員を参加せしめ、日夜急行せしめたりと雖ども、其到着せしときは既に鎮定に歸せり。

是より先き暴徒はユーレカ要塞に據て堡壘を築き、板屏を以て高く圍繞し之れを維多利共和國と稱せり、而してフェルンは獨逸人、ピーター、ローレーは愛蘭人にして其父は同國の紳士たり、兩人首領となり糧食彈藥を四方に募り専ら防戦の用意を爲せり、然れどもサー、ニッケルの到着する迄は攻撃なかるべしと考へ、少しく警戒を怠れるを以て、此機を察しキャプテン、トーマスは駐屯兵を以て一舉之れを掃蕩せんとし、土曜日の夜陰彼等の快樂に耽りつゝ在るを見て、攻撃の用意を整へ

翌朝未明要塞内僅に二百人許なるとき、キャプテン、トーマスは密かに兵を進めて三百碼に接近したるとき、郭内初めて騒然周章狼狽して彈丸を雨射し爲めに十二人を殺傷せり、是を以て攻撃軍稍々躊躇せしも靜かに應戦して狙を誤らず、而してピーター、レローは要塞内小高き場所を立て指揮を行ひしが、彈丸忽ち肩に命中して倒れたり、兩軍盛んに銃火を交ゆること約二十分にして休戦し、又直に吶喊の命令遙かに攻撃軍に傳はるや柵を越へて闖入し、混戦格闘少時にして暴徒は潰亂し、捕虜百二十五忽ち火を放ち凱歌を奏せり。

首領レローは負傷して倒れたりしが、板屏焼け落ちて其身體を蔽ひたるを以て僥倖にして捕縛を免かれ、軍隊の去るや匍匐して山間に遁れ醫師を求めて治療を請へり、政府は五百磅の懸賞を以て搜索せりと雖ども、知友の庇護に依て事件落着に至る迄巧みに逮捕を免るゝを得たり。

此役暴徒の負傷数は正確ならず、死者二十六名を出し、之れを該要塞内に葬り、翌日戦死軍人四名の爲めに名譽ある葬儀を執行せり、而して又程なく負傷者多數

死亡し、殊に悼むべきは第四十聯隊附ウィズ大尉は名譽の戦死をなせり、今や該所に戦死者の爲めに紀念碑を建て、以て當時を追想せしむ。

一〇、暴徒の審問 戦争の報復普尼に達するや、住民は大に坑夫の爲めに同情を表し、プリンス、ブリッヂ附近に於て大集會を催し、參集する者殆んど五千人、ジ・ロン、及びサンダースト亦然かり、而して千八百五十五年の初め捕虜十三名は麥普尼に於て審問せられ無罪の宣告を受くるを得たり。

一一、金坑地の改良 暴徒鎮定後太守 ホザム は委員を任命して取調べを爲さしめ、其結果實際坑夫の難澁なる事實を確むるを得たるを以て、上院は毎月の免許料を廢止し之れに代ふるに坑夫權を發行し、一年一磅を納付して之れを所持する者は當殖民地隨所に於て探金に従事することを得しめ、而して新に議員を上院に選出して坑夫の權利を保護せしむ、其數 サンダースト 二人、バラ、ト二人、カッスルメイン 二人、オーヴエン 及び アウオカ 金坑より各一人宛の規定にして、坑夫權を有する者之れか選舉者たり、加之政府は坑夫中名望ある者を選びて金坑地

區の法官に任命せり、斯くして漸く平穩に歸し秩序的發達を爲すに至れり。

第貳拾章 (三) 維多利州 (自千八百五十五年 至千九百〇一年)

一、責任内閣 千八百五十五年全殖民地は各州適宜の政府を組織するに至りたるを以て、維多利州も亦英國の制に倣ひて上下兩院を設け、當初衆議院は議員六十名なりしが漸次八十六名に増加し、千八百五十七年に至り撰舉權は永住者にのみ之れを與へ、而して上院に關しては母州に於けるが如く同一の困難に遭遇せるが故に、太守の指命を廢して總て民選と爲せり、而して下院と其性質を異ならしめんが爲めに被選舉權は實產五千磅以上を有する者及び選舉權も亦た一定の財産ある者に限れり。

此の新憲法の發布と共に又責任内閣の制を設け、ヘンズ宰相となり、初めて其内閣を組織して、同年末第一議會を召集せり、此時ナイコルソンは衆議院に於て將來威情的抑壓より生ずる弊害を防がん爲めに、選舉法を改正して秘密投票と爲す

べき勸議を起し、内閣は反對せりと雖ども衆議院は之れを可決せり。

此に於て内閣は總辭職となり、太守はナイコルソンに新内閣の組織を命ぜり、然れども多數の議員は其勸議に賛成せしも決して彼の首相たるを歡ぶ者に非らず、從て同志を糾合すること能はざるを以て、責任内閣は六ヶ月にして全然失敗に歸せり、加之此危機に際し太守ホザムは瓦斯局の開業式に臨み、偶々感冒に犯され、又ナイコルソン内閣の不成立を苦慮して病漸く重體に陥り、千八百五十五年除夜遂に遠逝せり、此に於て爾後一年間メカサー少將代理して太守の職を司り、ヘンズに命を傳へ、茲に再び責任内閣を起すを得たり、而して翌年サー、ヘンリー、バークレー太守に任せられ、在職七年其間操縦宜しきを得て、責任内閣の實を擧げ頗る圓滑に行はれたり、只其更迭甚だ頻繁なりしのみ、或る内閣は六週間にして倒れ、其一ヶ年を持續せし者は甚だ稀れなりし。

二、紛擾 千八百六十三年バークレー殖民地を去てサー、チャールズ、ダーリング之れに代はれり、四十年新南威耳斯の太守たりしサー、ラルフ、ダーリングの甥にして